

外ノ事ヲ詳ニセザル當時ノ著書ナレバ、幾分ノ誤謬ヲ免レズト雖モ、亦以テ參考トナスニ足レリ。書中「切支丹道具」ノ目錄中ニ尙ホ南蠻籠(織物)一、金絲縫天鵝絨打掛(西洋服)一、羅紗丸合羽、同前アテ各一、西洋鞍二、鎧三、轡ノ襟ナル物二、野杏二、書物大小十九冊、聖母ノ像板金製一、カク繪四、碟杭二、珠數三、抱柏紋付ノ銅一、印判二、外雜品數種アリ、同書ニ前記書物大小十九冊ノ事ヲ記シテ曰ク「日本紙ヘ認メタルモノナリ、コレハ六右衛門等覺書聞書ト見ユルカナ本ナリ法教ノ事ニヤ、草卒ノ際、取リアゲ讀ミテモ見ズ、尤モ讀ミテモ解スベキモノニアルマシ、併シ熟覽シナバ廻歷セシ國々ノ事等ノ荒増ハ知ルベキカ、奇怪ノ事書キアツメシモノト見エタリ。」此書物ハ今其所在ヲ知ラズ、或ハ逸失シタルモ圖リ難シ、書中如何ナルコトヲ記セシモノナルカ、今詳ニスルニ由ナシト雖モ、若シ現存シナバ、或ハ外國行ノ始末ヲ審明スルノ便トナリタラシモ知ルベカラズ、眞ニ惜ムベキコトナリ。右遺品中現存セルモノハ、明治九年、車駕北巡ノ際、敎覽アリテヨリ、始テ世人ノ知ル所トナリテ、大ニ珍奇トセラレ、尋テ史官ニ於テ「伊達政宗歐南遣使者」ノ撰アリ、今日ヨリ見レハ其書多少ノ疎謬ヲ免レズ、是レ當時未ダ十分ノ材料ヲ得ザリシガ故ナリ、又右ノ諸品ハ其頃一タヒ官ノ所管トナリシガ、後再ヒ伊達家ノ所有トナリテ博物館ニ陳列セリ。

支倉ノ刑死ハ何時ノ頃ナリヤヲ考フルニ、政宗ガ幕府ノ政旨ヲ奉シテ、仙臺領内ノ耶蘇教徒ヲ掃攘シ、在留傳敎師カラヲイルヲ死刑ニ處シタルハ、元和九年ノ事ナリト云ヘバ、亦其頃ナルベキカ、日本西敎史ノ「政宗ノ勢力與州ニ盛ナリ、使テ海外ニ遣リシテ以テ是レ法王ト歎テ通ワテ日本國王タラント欲スルモノナリト世人ノ疑ヲ受ク、政宗此嫌疑ヲ斷チテ害ヲ避クント欲シ、嚴法ヲ設ク耶蘇敎ヲ禁制ス」トノ説ト恰モ符合ス、當時ノ事甚ダ陰晦ニ屬スルヲ以テ見レバ、或ハ然ル事情ニ由リシナラン。

支倉ノ履歷ニツキテハ、政宗軍記ニ、葛西ノ亂(天正十八年、葛西某小田原ニ遇參セル罪ヲ以テ所領ヲ沒收セラレ、明年其殘黨亂ヲ作シタルヲ云フ)政宗ハ屋代勘解由兵衛、山岸修理、支倉飛驒同六右衛門以下ヲノ其餘黨ヲ討セシムトアリ、又征韓ノ役支倉ハ御手明二十人衆ノ中ニ列セラレタルコトヲ記セリ。支倉ノ少壯ヨリ軍ニ從ヒ、政宗ノ特ニ眷愛スル所ナリシハ、其後裔ノ亦傳フル所ナリ、征韓ノ役後十餘年ヲ經テ海外ニ使シ、八年ヲ消シテ歸ル、則チ其年齡應ニ五十左右ナルベシ。補綴金城秘韞ニ支倉ノ家ニ傳フル遺物中、死失狀ト唱フル書付アリ、官府ヨリ尋問アリシト、六右衛門ガ死シタルコト確實ナルヲ證明スルノ用ニ供セリト、其他六右衛門ノ最後ト墳墓トニツキテ種々ノ異説アリ、或ハ曰

〔伊達政宗其臣支倉六右衛門并ニ傳敎師ソテロ〕ヲ歐洲ニ派遣ス。日本船再ビ太平洋ヲ航ス。日本ヨリ西班牙ニ對シ條約締結ヲ請求ス。 一五五



ク多年本邦ニ在留セル羅馬教師佛人「プロテラン」ノ言ニ羅馬ニ於テハ支倉ノ末路ヲ三様ニ傳説シ、一ハ歸國ノ後變心セリト云ヒ、一ハ變心ノ躰ニテ匿レタリト云ヒ、又一ハ固ク宗旨ヲ守リテ殺サレタリト云フ、而シテ第三ノ説異ナラント傳フト云ヘリト。支倉ハ元來藩祖以前ヨリノ舊家ニシテ、六右衛門マデハ大祿ナリシガ、其處刑ノ後別ニ名跡ヲ立テタルマデニテ、小祿ノ士族トナリテ、其子孫連綿タリ、其家ハ子孫世々「寺證文」(往時耶穌教徒ヲ究明スルニ當リ、何レノ籍ニ屬スルヲ明證スル爲ニ此設アリ)ニ「切支丹宗門ニ御座候」ト記セリ、此事確傳ニシテ、藩政ノ頃支倉ト同ク切支丹宗門ニ御座候ト寺證文ニ記シ、又同ク年々鹽三俵ヅ、ヲ藩主ヨリ給ハル(何故ナルヲ知ラズ)ヲ例トスルモノ四五家アリシト云フ、耶穌教嚴禁ノ當時ニ在リテ此特例ヲ許サレシハ其由來スル所アリヲ知ルベキナリ。

是ヨリ先使節ノ羅馬ニ在ルヤ法王ハ「ソテロ」ヲ以テ日本奥州ノ二等教正ニ任マタルニ、西班牙ノ教職等ハ之ヲ嫉ミ國王「フヰリッ」第三世ニ讒スルニ、其西班牙臣民ニシテ私ニ法王ヨリ官職ヲ受ケタルヲ以テス、王因テ「ソテロ」ガ官職ヲ褫フ。印度政廳モ亦教徒ノ意ニ從ヒ、東邦派遣ノ教職ノ任命ハ西班牙王ノ權ニ屬スルヲ主論

トシテ「ソテロ」ノ行爲ヲ非難シ、又「マニラ」ノ商人ハ新西班牙ノ日本貿易ヲ競争スルヲ驚キ「ソテロ」ノ「アカブル」ニ着スルヤ直ニ人ヲシテ日本條約書類ヲ差押ヘテ「ソテロ」ヲ新墨西哥府ナル管長ニ送還セシム、然ルニ「ソテロ」ハ法王ヨリノ職任ヲ帶ブルノ身分ナルヲ主張シテ管長ノ命ニ從ハズ、其地ヲ發シテ呂宋ニ至リ、元和八年(一六二二年)同地ヨリ商人ノ裝ヲナシテ支那船ニ乘リ長崎ニ赴カントセシニ、船長之ヲ覺リテ告發ス、因テ直ニ捕縛セラレテ獄ニ投セラレ、寛永元年(一六二四年)ヲ以テ死刑ニ處セラレ。

本文「ソテロ」ガ日本奥州ノ二等教正ニ任ゼラレタル事ハ、耶穌教記引ク所ノ「ルラ」所著「フヰリッ」島年史ニ據ル、此事ハ當時「ソテロ」ハ獄ニ投ゼラレ、一六二四年一月廿日(元和九年未)獄中ニ於テ作りシ所ノ書翰ヲ以テ之ヲ證スベシト云ヘリ。又耶穌教記ニ「ソテロ」ガ西班牙王ニ官職ヲ褫ハレタルヲ以テ、諸僧ノ忠告ニヨリ、其直ニ日本ニ歸ルヲ止メタルニ由リ、使船ノ浦賀ニ歸着セシト「ソテロ」ハ船中ニアラザリシト記セリ、而シテ伊達家ノ記録及ヒ幕府ノ記録ニ據レバ、「ソテロ」ハ呂宋マデ支倉ト同船シ、南蠻王(西班牙王)ヨリ大將軍ヘハ答書モ持來リシニ、耶穌教嚴禁ト聞キテ呂宋ニ留リシヲ知ルベシ、即チ支倉ガ

〔伊達政宗其臣支倉六右衛門并ニ傳教師「ソテロ」ヲ歐洲ニ派遣スル日本船再ビ太平洋ヲ航スル日本ヨリ西班牙ニ對シ條約締結ヲ請求ス〕



歸國ノ翌月元和六年九月ヲ以テ政宗ヨリ幕府ノ執政ニ照會シタル書ハ左ノ如シ

急度令啓候先年南蠻へ向井將監申談舟を遣申候時分江戸に數年逗留被仕候そてろと申南蠻人渡被申候其刻從公方様も南蠻へ爲御音信御具足御屏風杯被遣候其砌拙者内之者遣申候與南蠻へ參ニ付而七八年逗留御坐候而漸當秋ろそんが之舟ニ而歸朝仕候そてろ事は吉利支丹かたく御法度之由ろそんにて被及承先々延慮之旨ニ而彼地ニ逗留之由申來候南蠻より之御返事も御坐候由申來候御前不苦候は來年ろそんが歸朝仕度由被申越候如何可有御座候哉依御報返事仕度爲其態申入候恐惶謹言。

九月廿三日

松平陸奥守(華押)

土井大炊助様 人々御中

此書ニ對シテ幕府ハ如何ナル回答ヲ爲シタルヤ詳ナラザレモ當時耶蘇教嚴禁ノ令ヲ發シタル事情ヨリ察セバ之ヲ歡迎スルノ意ナカリシハ疑ヲ容ルベカラズ。斯ノ如キ事情アリシヲ以テソテロハ呂宋ニ留リ支倉ヲ日本ニ先發セシメ其報ヲ得テ日本ニ復命セントシタルニ偶西班牙官吏ニ捕ヘラレテ刑ニ處セラレタルナリ此一條ハ諸書ニ見エズ今ヒルドレッズ氏日本古今記(Hildre-

This 'Japan as it was and is' 一八五六年倫敦刊行ニ據ル。

伊達政宗ノ大胆雄志夙ニ眼光ヲ國外ニ放テ遠ク人ヲ萬里ノ外ニ派シテ出征通商ヲ試ミントセシニ幕府ノ姑息退守政策ノ爲ニ多年ノ宿志一朝ニ挫折セラレテ偉略全ク畫餅ニ屬シ西教禁止外交遮斷以後人之ヲ言フヲ憚リ其事蹟久シク湮滅シテ世ニ聞エズ近時遺品始テ顯ハレ斷簡零文ヲ聚メテ茲ニ其顛末ヲ窺フヲ得タリ此時ニ當リテヤ我國ハ常ニ進取ノ地位ニ立チ外國ハ反テ之ニ應ズルノ狀況タリシナリ實勢ヨリ見ルモ我力南洋或ハ亞米利加中ノ土地ヲ取ルト難キニアラザリシヲ知ルナリ數百年ノ下ニ在リテ之ヲ聞ク者亡見ノ齡ヲ算スルニ似タリト雖モ誰カ發憤痛惜セザラゾヤ。

〔德川秀忠及ヒ島津義久各其家士ヲ西洋ニ遣リ耶蘇教ヲ

審明セシム〕

大將軍德川秀忠夙ニ天主教ノ害ヲ憂ヒ其正邪ヲ究メント欲シ慶長中、小納戸(近臣)楫斐與右衛門(一ニ半右衛門)ヲ密ニ西洋ニ遣ル楫斐彼地ニ赴キ伴リテ信徒トナリ

〔德川秀忠及ヒ島津義久各其家士ヲ西洋ニ遣リ耶蘇教ヲ審明セシム〕



教法ヲ學ビ、滯留七年、悉ク其道ヲ得テ、元和初年ニ還ル、秀忠之ニ推問スル、三日三夜、粗ホ其要領ヲ曉リ、遂ニ之ヲ國家ニ害アリト斷定シ、申テテ耶穌教ノ禁令ヲ下ス  
(元和二年八月)、榎斐又命ヲ受ケテ、教法ヲ井上筑後守政重(一説ニ此人ハ蒲生氏郷ノ遺臣ナリト)ニ傳フ、政重後ニ吉利支丹奉行トナリ、教徒ヲ糺治ス。

同時ニ慶長初年ニ薩藩主島津義久其家士、鯨島某ヲ西洋ニ遣シ、耶穌教ヲ研究セシメ、其歸リテ云フ所ヲ聞キ、國ニ害アリト認メ、遂ニ之ヲ禁止ス。

德川氏等ノ耶穌教禁止ニツキテハ、世ニ可否ノ論アリト雖モ、之ヲ禁スルニ當リテ用意ノ周到ナリシ、亦以テ見ルベキナリ。

按スルニ、榎斐及ビ鯨島ノ赴キタルハ、諸書ニ西洋又ハ外國トノミアリテ、國名ヲ記セザルヲ以テ、呂宋地方ニ赴キタルカ、歐洲ニ赴キタルカ、詳明ナラズ、然レモ、榎斐ハ七年ノ久シキヲ費シタリト云ヘバ、或ハ歐洲ニ至リタルナランカ。

〔鎖國時代密ニ外國ニ赴キテ技藝ヲ研究シタル者〕

徳川幕府一タヒ鎖國政策ヲ執リ、外航者ヲ處スルニ嚴刑ヲ以テシタルヨリ、復タ一

人ノ國外ニ出ヅル者ナキニ至レリ。寛政年間(一七九〇年代)、松平越中守定信(白河藩主、晩年樂翁ト稱ス)幕府内閣ノ首席ニ在リテ賢相ノ名アリ、頗ル海外ノ事物ニ注意ス、嘗テ荷蘭人齋ス所ノ普魯斯國都伯林ノ圖ヲ見テ其精妙ヲ感賞シ、畫工中田善吉ヲシテ之ヲ摸寫セシム、是ヨリシテ定信善吉共ニ洋畫ヲ我國ニ傳入セント欲スト雖モ、國禁ノ爲ニ何人モ外航スル能ハザルヲ奈何セン、既ニ善吉長崎ニ至リ、又去リテ其踪跡ヲ逸ス、後數年ヲ經テ飄然故郷ニ歸リ、畫風一變シテ宛然洋風トナレリ、世ニ傳フ密ニ定信ト相謀リテ外國(英國名ヲ詳ニセズ)ニ航シテ其技ヲ學バルナリト、善吉家ヲ亞歐堂ト號シ、其姓名ヲ畧シテ田善ト稱ス、我國洋畫ノ元祖ト稱スル司馬江漢ト稍ヤ其時ヲ同ウス。

司馬江漢ハ初鈴木春信ト稱ス、長崎ニ至リ、蘭人ニ就テ畫術ヲ學ビ、天球地球ニ圖ヲ製シ、又蘭人ノ說ニヨリ各國ノ風俗ヲ錄シテ和蘭通舶ト題スルモノヲ著ス、即チ西洋油畫銅版ノ唱首タリ、寛政元年、江戸ニ歸リ、其術ヲ唱フ。

善吉死後數十年、明治九年、車駕北巡、岩代國須賀川驛ナル須賀川神社ニ幸ス、社内ニ洋畫山水ノ額アリ、古色鬱然トシテ、今代ノモノニアラザルヲ以テ、此額ノ來由勅



問アリ、故老乃チ侍從ニヨリテ奉對シテ曰ク、是レ此地ノ畫工中田善吉ノ畫ク所ナリト、因テ其履歷ヲ具申シタリト云フ。

〔金忠輔北地ニ入り、遂ニ往ク所ヲ知ラズ〕

文化中(一八〇〇年代ノ初)、仙臺藩士金忠輔アリ、弱冠ニシテ卓犖不羈、粗ホ史書ニ通シ、又擊劍ニ達ス、自ラ權略剛膽ヲ以テ任マ、奇行ヲ以テ名アリ、文化四年ノ頃、齡凡ソ二十、藩地ヲ脱シテ、或ハ云フ罪アリテ、蝦夷ニ入ル、適マ松前藩ノ移封ノ事アルニ會シ、藩主ノ爲ニ周旋スル所アラント之ニ説キ、千金ヲ懷ニシテ江戸ニ至リ、大ニ要路ノ間ニ奔走ス、依テ移封ノ事止ムヲ得タリ、藩主大ニ喜ビ之ニ厚祿ヲ給セントス、忠輔辭シテ受ケズ、或ハ云フ、更ニ千金ヲ受クト、既ニノ國外ニ功名ヲ立テント欲シ、東察加(カムチャツカ)亞細大陸ノ東端ニ航シ、文政四年(一八二一年)露西亞(四比利亞ナラシ)ニ入り、遂ニ往ク所ヲ知ラズ。

一説ニ忠輔露國ニ入りテ後、其内亂ニ際シ大功アリ、依テ將相ニ任マ、封土ヲ受ク、後書ヲ裁シテ仙臺ナル叔父ノ安否ヲ訪ヒ、密ニ海上ニ相見、ノヲ乞フ、叔父

事ノ漏レノヲ懼レテ之ヲ辭ス、忠輔以爲ラク、我封土酷寒堪フベカラス、而シテ肯テ此ニ居ルモノハ、唯郷國ニ接シ、屢バ相見ルノ便アラシガ爲ノ故ノミ、然ルニ今此ノ如シ、寧ロ暖ニ南方ニ就カント、去リテ安南ニ赴ク、天保中(文政四年ヨリ凡ソ十年ノ後)安南内亂ノ時、客將タリシ者ハ即チ忠輔ナラント、又傳フ、嘉永中、土佐ノ漂流民萬次郎ガ亞米利加ヨリ歸リ、カリホルニア(米國ノ西岸ニアリ、本邦ヨリ殆ド直東ニ方ル)ノ酋長ニ日本人金氏ナル者ヲ見ル、齡凡ソ六十歳、自ラ琉球産ナリト稱セリト、又云フ、其頃幕府ハ忠輔外行ノ風説ヲ聞キ、其事實ヲ仙臺藩ニ質セシニ、藩ハ答フルニ忠輔脱走シテ踪跡分明ナラザルヲ以テス、是其憚ル所アリシガ故ナリト、又云フ、忠輔ノ先ハ金國ヨリ出ヅ、故ニ金ヲ以テ姓トナスト、之ヲ要スルニ、忠輔ノ事蹟ニ關シテハ種々ノ説アレド、概テ俗説ニシテ信スルニ足ルモノヲ得ズ、唯異聞トシテ茲ニ録スルノミ。

〔錢屋五兵衛等鎖國ノ世ニ於テ窃ニ米國ト通商ス〕

鎖國ノ世ニ在リテ、小船ニ乘リ、亞米利加マテ往來シ、貿易ヲ營ミタル錢屋五兵衛ハ加州宮ノ腰村ノ人、明和八年(一七七一年)ヲ以テ生ル、年十四ニシテ人ニ雇ハレ、十五

〔金忠輔北地ニ入り、遂ニ往ク所ヲ知ラズ〕 〔錢屋五兵衛等鎖國ノ世ニ於テ窃ニ米國ト通商ス〕 一六三



年ノ間専ラ回漕ノ業ヲ習ヒ、家ニ歸リテ自ラ船乗ノ業ヲ開キ、各港ノ間ヲ航シ、貨物ヲ運送賣買シテ利ヲ得ルコト愈ヨ多ク、漸ク其名ヲ世ニ知ラル。五兵衛是ニ於テ更ニ大利ヲ遠海ニ得ント欲シ、八丈、三宅等ノ諸島ニ赴キ、土人ノ無智ニ乗シテ、一ヲ以テ十二易ヘ、多ク獸皮、香木、藥種等ヲ齎シ歸リ、爾後屢バ此等ノ諸島ノ間ヲ往來ス。曾テ洋中ニ一大黒船ニ遭フ、五兵衛等怖レテ逃レントス、黒船忽チ近ヅキ、艇ヲ下シテ之ヲ招キ、船中ニ誘フ、言語通ゼズト雖モ、其露西亞ノ商船タルヲ知リ、乃チ其携フル所ノ商品ト交易セシコトヲ求人喜ンデ之ヲ諾ス、是ニ由ヨリ五兵衛又大利ヲ得タリ。其後屢バ洋中ニ於テ外船ト交易ス、五兵衛頓ニ富チ成シ、各地ニ商店ヲ設クルコトシ、膽略アリ商機ニ敏ナリ、五兵衛常ニ之ト共ニ腹心ノ船夫ヲ從ヘ、洋中ニ出テ露船等ト交易ス、故ヲ以テ家人多シト雖モ、其實ヲ知ラズシテ、皆チ三宅、八丈諸島ニ至リテ賣買スト思ヘリ。天保三年(一八三二年)五兵衛年六十一、又二千五百石積ノ船ヲ艤ヒ、十一人ヲ率井テ宮ノ腰浦ヲ出帆シ、北海ニ向フ、五月大風ニ逢ヒ、怒濤ノ爲ニ船覆ヘラントシテ僅ニ免レ、漂流三十五日ニシテ始テ陸地ニ達ス、此時六人既ニ死シ、

存スル者僅ニ六人ノミ、此陸地ハ亞米利加「ブレイトン」ニシテ、桑港ノ東五里ノ處ニアリ、五兵衛等米國人ニ救ハレ、茲ニ止マルコト數十日、髪ヲ斷リ、髯ヲ蓄ヘ、其國人ニ交リテ粗ボ言語習俗ヲ知り、商工ノ業ヲ視、數月ノ後、去リテ米船ニ乗り、翌年十一月伊豆ノ下田ニ歸ル。五兵衛ノ米國ニ在ルヤ、其國商人ト貿易ヲ約シ、天保四年五月二日、又大平丸(二千五百石)ニ提灯、傘、竹杖、赤合羽、團扇、扇ヲ積ミ、三宅島ニ航スルト稱シ、竊ニ米國ニ赴キ、貿易ヲ營ム、蓋シ本邦商人ノ米國ニ至ル者、慶長十五年以後、錢屋、五兵衛ヲ以テ始トナス、桑港ノ豪商「フレンチ」アシク「深ク其膽略ヲ賞ス、五兵衛其歸ルニ際シ、僕他三郎ヲ「フレンチ」ニ托ス、他三郎時ニ年廿六、名ヲ「フレデルストント」稱シ、永ク桑港ニ留ル。「フレンチ」五兵衛ニ接シテヨリ日米通商ノ利アルヲ信シ、商船ヲ艤ヒ、他三郎ヲ伴ヒ、弘化二年(一八四五年)相州浦賀ニ至ル、幕府之ヲ拒ンテ入レズ、フレンチ即チ米國ニ歸ル。是ヨリ先、五兵衛加賀藩ノ用達ヲ命ゼラレ、帶刀ヲ許サレ、清水五兵衛ト稱ス、竊ニ上州信州ヨリ生糸ヲ米國ニ輸出シ、益ス富チ致シ、其名天下ニ高シ。嘉永五年、五兵衛河北郡河北瀉ヲ埋メテ新田ヲ開カンコトヲ企ツ、漁民苦情ヲ訴フ、依テ先ツ毒ヲ沼中ニ流シ、其魚ヲ殲シ、以テ其望ヲ果サントス、里人魚ヲ食シ毒



ニ中リテ死スル者アリ、流言アリ、是レ近來黑船ノ近海ニ往來スルガ故ナリト、人心  
洵々タリ、藩吏乃チ沼底ヲ撿シテ石灰并ニ鐵器等ヲ得終ニ五兵衛ノ所爲タルヲ發  
覺シ、其九月ヲ以テ五兵衛以下家人皆ヲ捕ハレ、尋テ五兵衛ハ獄中ニ病死シ、其他要  
藏以下四人ノ者ハ、海禁ヲ犯シ、私利ヲ營ミタルノ罪ヲ以テ、翌年三月斬ニ處セラレ、  
家財ヲ沒收セラル、現在ノ金銀錢凡ソ廿四萬兩、外ニ賣掛并貸付金廿七萬餘兩、船大  
小廿五艘、倉庫八十棟、現米三萬五千餘石、珍奇ノ外國品其他器具極テ夥シク、頗ル世  
人ノ耳目ヲ驚カセリ。

初五兵衛ノ捕ハレシ後、江戸西城燒失シ、吏人木材ヲ會津ニ取ラントセシニ、山民  
加藩ノ用材ナリト答フ、幕府之ヲ藩ニ尋問シ、五兵衛ガ藩主ノ名ヲ僞リテ買收シタ  
ルヲ海禁ヲ犯シタルト共ニ發見シ、加藩連累ノ者十二人切腹ヲ命セラル。

是ヨリ先、文化二年(一八〇五年)幕府令シテ海上物品ヲ外國ニ賣ルノ禁ヲ嚴ニス、  
然ルニ加州安房崎ノ商人木屋藤右衛門海禁ヲ犯シ、外國人ト賣買ス、其罪ニヨリ父  
子及ビ僕三人皆ヲ磔刑ニ處セラル、沒收ノ家財亦殆ド前者ニ比スト云フ。

一説ニ錢屋五兵衛ハ濠洲ニモ至レリ、濠洲某地ニ『大日本錢屋五兵衛領地』ト記

セル標木アリ、英人之ヲ毀チシヲ、近年其地ニ航セル船員之ヲ發見シタリト云  
ヘド、未ダ確説ヲ得ズ。又弘化二年及ヒ三年、即チ一八四五、六年ノ兩年ニ米船  
相州浦賀ニ至リ、通商ヲ求メシ事ハ、内外ノ書ニ載スレド、彼ノ「フレンチ」ナル者  
ノ船ヲ指シタルヤ否ヲ知ラズ。又一書ニ「フレンチ」ハ五兵衛ニ接シテヨリ日米  
ノ貿易ヲ開カンコトヲ期シテ議院ニ請フ所アリ、遂ニ「ベリ」ヲ日本ニ發遣スル  
事トナリタルナリトアレド、「ベリ」ノ航來ハ、嘉永四年即チ一八五一年、米國帆  
船カ日本ヲ距ルコト六百哩ノ海上ニ於テ、日本ノ難船人ヲ救ヒテ桑港ニ伴ヒシ  
後、其國外務長官「ダニール・ウエプスタ」ガ海軍將官「オーリック」ノ勸告ニ同意シ、  
公書ヲ海軍長官ニ贈リ、軍艦ヲ以テ右漂流人ヲ護送シ、之ヲ機トシテ兩國ノ間  
ニ交際ヲ開クベキコトヲ協議シタルニ基クナリ。

以上列記スル所ヲ以テ、昔時歐米ニ赴キタル日本人ノ事蹟ノ錄スベキモノハ  
大抵盡了シタリト信ズ。其他天保八年大坂ニ亂ヲ作シタル大搦平八郎ガ歐羅  
巴ニ潜伏シタリト云フノ説、之ト謀ヲ共ニシタル秋篠昭足カ其女ニ密語シタ  
ルコトアリト云フノ如キハ一モ確據スベキモノナシ。又聞ク、明治廿六年現ニ墨  
西哥國、シラダラハラ州ニ閑居セル陸軍將官「トレンチノ」ト云フ者アリ、數十萬

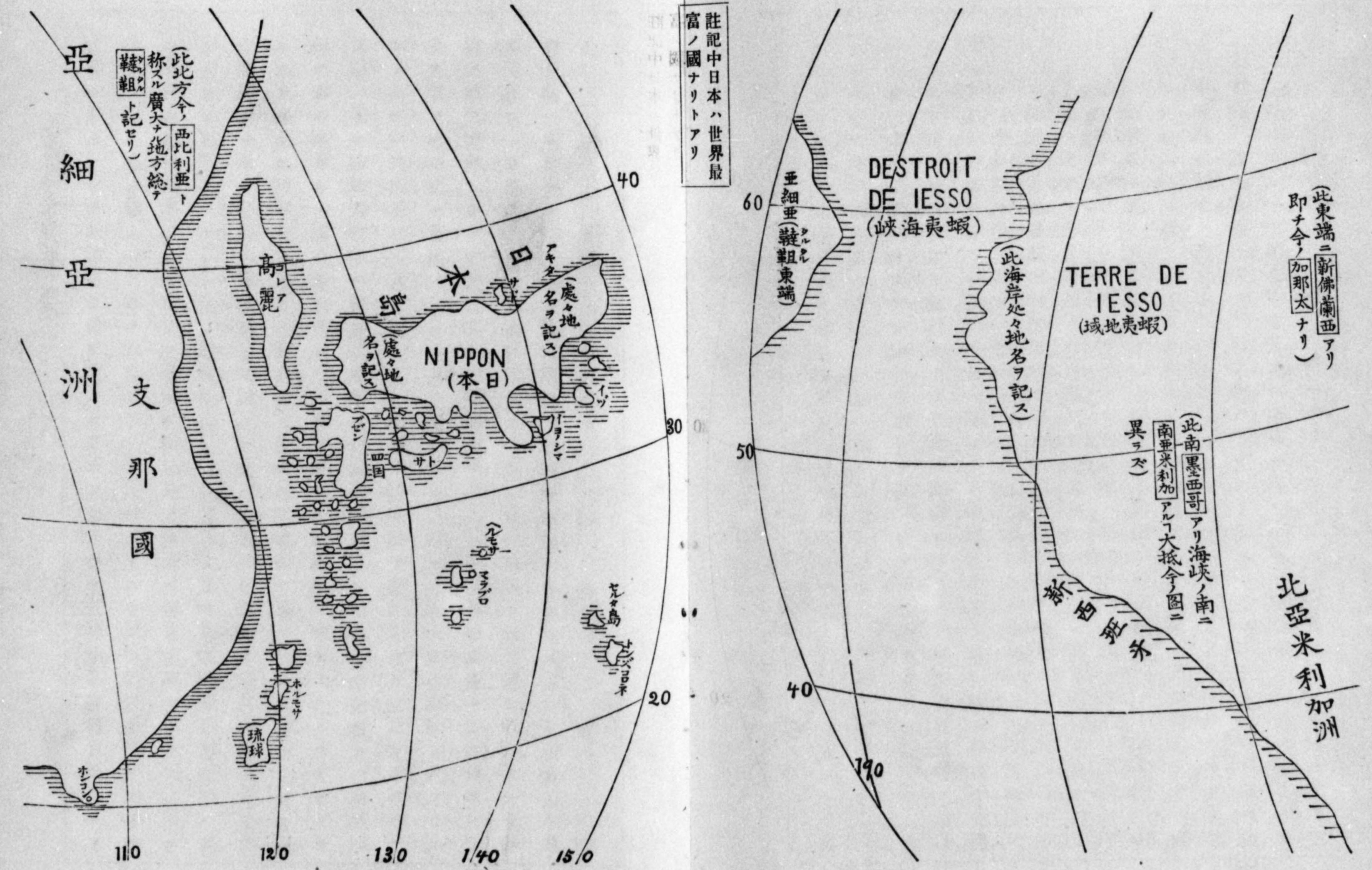
〔錢屋五兵衛等領地ノ世ニ於テ竊ニ米國ト通商ス〕



圓ノ財産ヲ有ス、曾テ、ハリスコ州知事タリ、其弟ハ陸軍大尉ナリ、母ハ土地ノ者ナレトモ、父ハ然ラズ、其他國ヨリ墨國ニ來リシ初ハ理髮師ヲ業トシ、自ラ、マニラ入ト稱シ、結髮長袖ニテ刀ヲ帶ビ居タリト云ヘバ、蓋シ日本人ナラフ、或ハ往年耶穌教禁止ノ際、マニラ即チ呂宋ニ移住シタル日本人ノ子孫ナラフコト考フレトモ、未タ詳説ヲ得ズ、又土州中、濱ノ漁夫萬次郎ガ天保十二年漂流シテ米國ノ鯨獵船ニ救ハレ、南洋并ニ太平洋ノ各島ニ至リ、亞米利加、マツサシウセツ州及ヒ、カリフォルニア州ニ留マルコ數年、或ハ學校ニ學ビ、或ハ金山ノ雇夫トナリ、更ニ出テ、阿非利加ノ喜望峯、又南亞米利加ノ南海ノ間ニ航行シ、嘉永四年ニ歸國シ、世界圖、亞米利加圖等ヲ幕府ニ呈シテ外國ノ事情ヲ陳ス、其海外ニ在ルコト十年粗ホ英語、英文ニ通ズルヲ以テ、後二年米使ノ來ルニ際シ、特例ヲ以テ漂流漁民ヨリ擢テ、幕府ノ士ニ列セラレ、中濱萬次郎ト稱シ、後ニ幕府ガ使節ヲ米國ニ派遣セシキ、隨員トナリテ再ビ同國ニ至リタルカ如キ、漂流民等ノ事蹟ハ一二ニ止ラズト雖モ、別ニ條ヲ設ケテ記スルノ要ナキナリ。



〔部一ノ圖界世製所國佛(末ノ代年〇〇六一云或)代年〇一七一〕  
(ス高縮リ中圖原幅大版綱)



註記中日本ハ世界最富ノ國ナリトアリ



○亞米利加洲ト日本人種トノ關係。

我千島ノ東北ナル亞細亞大陸ノ東端ト北亞米利加「アラスカ」ノ西角ト相對スル處其間實ニ一章帶水ノミ、此海峽ヲ稱シテ「ベリリング海峽」ト云フ、是レ著名ナル丁林國ノ航海者「ベリリング」ガ我享保十年即チ一七二五年、東察加測量ノ爲ニ發航シ、二年ヲ經テ、此海峽ヲ發見シタルニ由ル、然レモ其以前ニ日本人ガ此海峽アルヲ知リシ事ハ右年代以前日本人ノ製シタル海圖ニ該海峽ヲ詳記シタルヲ以テ證スベシ、其圖ハ現ニ倫敦博物館ニ藏ス。此事ハ明治十二年（一八七九年）亦有名ナル北洋回航ヲ爲シ遂ケタル瑞典艦「ウエーガー」號ニ乘リテ我國ニモ來リタル「ノルデンスキヨルト」博士ガ同年九月八日ノ横須賀ニ於ケル演說ニモ云ヘル所ナリ。又正徳年間即チ一七一〇年代佛國製ノ地圖ニハ此「ベリリング海峽」ヲ蝦夷海峽（Deströit de Lessö）ト記シ「アラスカ」ノ地ヲ蝦夷地（Terre de Lessö）ト記セリ、當時北亞米利加ハ多ク佛國ノ植民地タリ、蓋シ地圖ノ著者ガ植民地ノ佛人ニ聞キテ記シタルモノナルベク、又植民地ノ佛人ハ其地ノ方言ヲ取リタルモノナルベシト云フ、然ラバ則チ全ク據ル所ナクシテ此地名ヲ記シタルニ非ルヲ知ルベシ、世界地名辭書ヲ按スルニ



「カナダ」ハ「カナタ」ノ語ヨリ出ヅ、「村家ノ集合」ノ義ナリトアリ、又「アラスカ」ニ「アリヤスカ」ト云フ、其義未ダ詳ナラズ、然ルニ「アラスカ」(荒須賀)ト云ヒ、「カナダ」(金田)ト云ヒ、恰モ日本語ニ類ス、其語源ヲ考究セバ、豈ニ我ニ緣故アルノ事實ヲ發見スルコトナシトセシヤ。

「カナダ」ハ歐人著ス所ノ地誌ヲ見ルニ、一四九七年歐人「カボット」ノ發見スル所ニ係ルト、其古史ハ詳ナラズト雖モ、傳説ニアリ、一ハ北方氷界ノ住民ノ傳説ニシテ、凡ソ一千年前歐人「リーフ」ト云ヘル者小舟ニ乗リテ「カナダ」ノ「ラブラドル」ノ海岸ニ漂着シタルヲ第一ノ發見者トスト云ヒ、一ハ古代亞細亞ノ民族ガ海峽ヲ渡リテ此地方ニ來リタリト云ヘリ、實踐者此ニ説ニツキテ曰ク「北方住民ハ歐人ヲ以テ第一ノ發見ナリトシ、固ク執リテ動かズト雖モ、怪誕ニシテ信ズルニ足ラズ、又亞細亞人ガ此國ニ來リシトノ説ハ多少實地ニ近キヲ覺ユ、彼ノ「英領コロンビヤ」ニ住スル「サイクッ」ト云ヘル土人ノ狀貌酷ダ我國人ニ似タルト、近年「バンクーバー」ニ於テ日本ノ「甲冑」ニ類セルモノヲ掘出シタルヲ見レバ、此説信スベキガ如シト雖モ、未ダ十分ノ考證ヲ得ズ、此ノ如ク諸説曖昧ナレモ、茲ニ確徵スベキ一條ハ、古代穴居民族ノ居シテ歴然タ

リ、此民族ノ遺跡ハ「メキシコ灣頭ヨリ」「ウイニベグ」ニ至ルノ間ニ往々發見セラレ、此等ノ洞穴ハ幾百千年ヲ經タルヲ知ルベカラズ、鬱々タル樹木ノ蔭ニアリ、皆ナ潰崩シテ殆ンド形ヲ留メズト雖モ、仔細ニ觀察スルハ、當時ノ有様其大略ヲ想測スルニ足レリ、土中ヨリ出デタル奇異ナル器物等ヲ以テ見レバ、穴居民族ノ存在シタルヤ疑フベカラズ、然レモ其歴史ニ至リテハ亦空想タルヲ免レズ、土人(インヂヤン)中ヲ尋索スルモ、是ニ關係スルノ傳説ヲ得ズ、又早歲來遊セル歐人ノ記錄ヲ查スルモ、更ニ片言ノ之ニ及ブモノナシ、故ニ「カナダ」舊時ノ事ハ遑トシテ知ルベカラズト云フノ外ナキヲ奈何セシ。土人ハ極テ愚鈍ナルモノニシテ、被髮跣足、奇異ノ神物ヲ信奉セルモノアリ、赭面、黒毛、頗ル我國勞働社會ノ人物ニ類セリ、或ハ同人種ナルベシト疑フ者アレモ、東方ニ住居スルモノ往々皮膚眞紅ノ者アリ、恐クハ同一ノ統屬ニ非ルベシト。米國人「モールス」曾テ日本ニ在リモ亦古物發見上ヨリ、土人ト日本人トノ關係ニツキテ疑ヲ存セリト云フ。

或ハ云フ、先年英領關龍比亞ノ「ヴ井クトリヤ」市ニ於テ工夫井ヲ堀リシニ、地下凡ソ四尺ノ處ニテ、日本古代ノ鎖衣一領ヲ堀出セリ、其鎖衣ハ鉛筆ノ長サノ鐵鎖數千ヨリ



組成セルモノニシテ、頸ヨリ裾マデ、其丈廿一吋半（我一尺七寸二分ニ當ル）、其一袖ハ  
 刃物ニテ切ラレタリト覺シキニ吋（一寸六分）ホドノ痕アリテ、銀ニテ繕ヘリ、此鎖衣  
 ハ二三年前ノ製造タリト雖モ、此地ニアルノ由來ハ之ヲ知ル者ナシ、而シテ此近  
 傍ニモ日本古代ノ住家ト思ハシキ證據數多アリ、現ニ數年前ニモ日本古代ノ貨幣  
 ナ石塚及ヒ墳墓ノ中ヨリ發見シタリト是レ或ハ昔時日本人ガ墨西哥航路ニ由リ  
 テ米洲ニ一ノ植民地ヲ開キタレモ、其後白人等ニ滅絶セラレタルノ遺跡ナルベキ  
 歟。

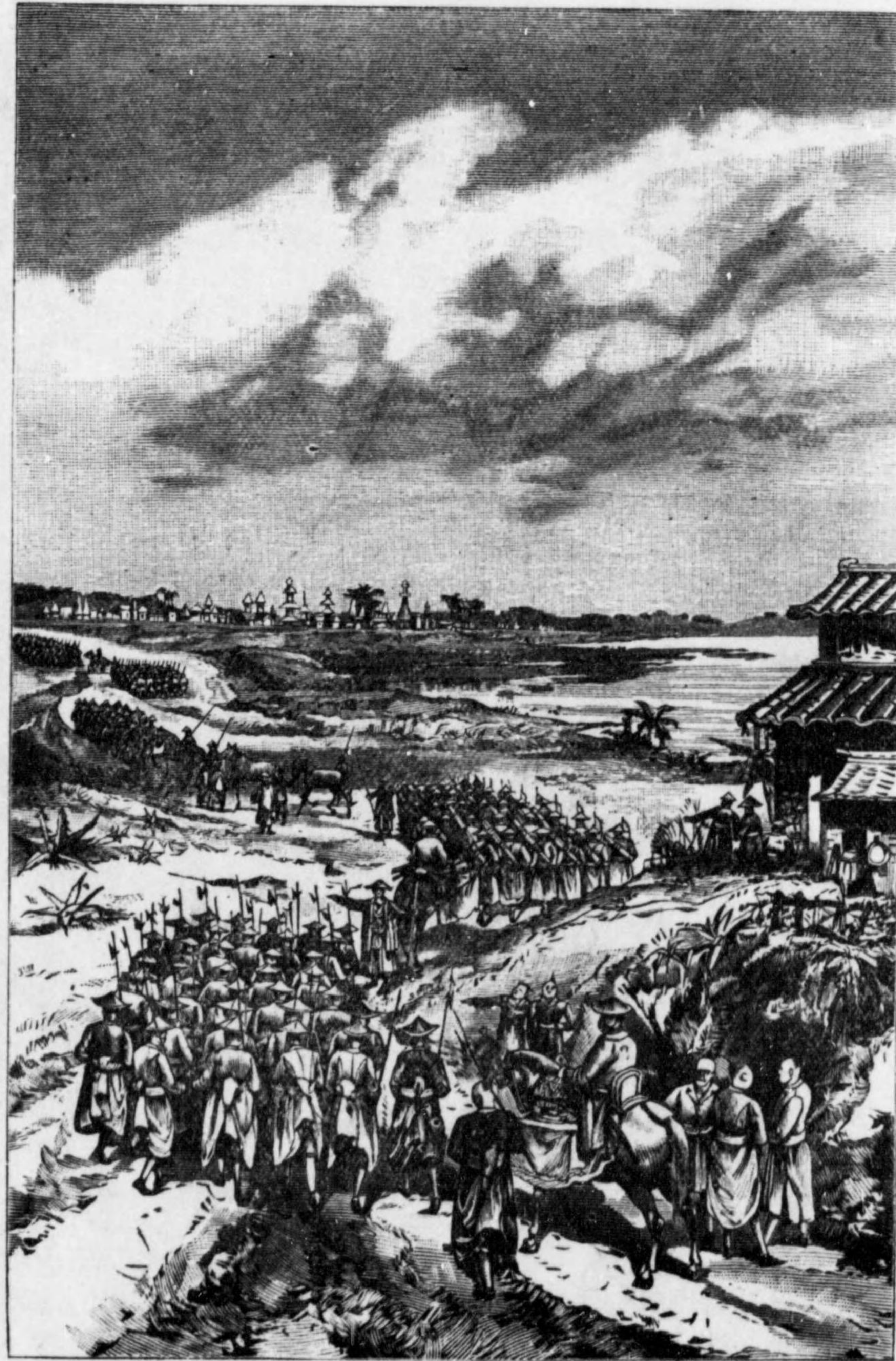
又或ハ云フ蝦夷、アイノ「民族ノ前ニ「クルミシエ」民族アリ、アイノ「爲ニ逐ハレ、  
 遂ニ千島、東察加地方ニ退キタルナリト。」（ロ）西人往々亞米利加土人、インヂヤン」ト北  
 方ノ矮人種、エスキモ」ト同人種ナル」ヲ説ク、而ゾ「インヂヤン」ノ言語風俗頗ル我  
 國ノ一部ニ似タルモノアリ（ホチ「ミ」ト云フ「我ニ同シク、又菊花ヲ尊重スルノ風  
 アリト聞ク）、是ニ由リテ之ヲ觀レバ、我古代ノ民族ガ海峽ヲ超エテ亞米利加ノ北部  
 ニ移住シタリト云フハ全ク理ナキノ説ニアラズ、其土人全ク我古代ノ民族ニ出デ

ザルモ、幾分カ相混シテ今日ノ土人トナリタルモ、亦知ルベカラザルナリ。



[兵本日ルケ於ニ度印]

(ス模ヲ雷原人佛)



Cochin fil deltin. J. Y. Schley Sculp.

MARCHE MILITAIRE DU JAPON.

KRYGS-COGT DER JAPONESE.

(世界ニ於ケル日本人) 第二部九頁

○第二部。日本ト西南洋諸國トノ交渉。

○交通事歴

西南洋即チ呂宋近傍ニ基布セル諸島并ニ印度ノ一部トハ早クヨリ我國ト交通アリ、近古ニ至リテ南洋ノ貿易最モ繁盛ヲ極メタレド、數十年ニシテ一タビ其跡ヲ絶チ、近年交通復々漸ク盛ナラントスルノ勢アリ、蓋シ麻刺加地方ノ我國ニ通ゼシハ、『白雉五年(皇紀千三百十四年)吐火羅國ト舍衛國ノ男女日向ニ漂着シタル』(イ)ヲ以テ始トス。外交志稿ニ『吐火羅ハ今ノ土耳其斯坦ノ内ニ在リ、漢土ニ所謂西域是ナリ、唐書ニ吐火羅、或ハ吐豁羅、又覩貨邏ニ作ル、元魏ニ吐呼羅ト云フ、又舍衛國ハ天竺ニアリ、扶南傳ニ舍衛ハ天竺伽戸國ニ屬ス、一名ハ波羅奈國、又波羅國、又奈斯國ト云フ』ト、然ルニ近年實踐者ノ說ニハ、『二國ヲ以テフ、井リッピン群島(呂宋群島)中ニアルモノトシ、吐火羅ハ即チ「タガロ」ニシテ、舍衛ハ即チ「ピサヤ」ナリト云ヘリ。以上兩地ハ麻刺加海峡ヲ相隔テ、大陸ト島地トノ別アリ、未ダ何レカ可ナルヲ知ラズ。』又國史眼(帝國大學編纂)ニ吐火羅ヲ以テ今ノ寶島トナス、即チ薩州惡石島ノ西南ニアル一小島ナリ、然レモ前後ノ文勢ヨリ考フルニ吐火羅ハ我近海ノ島ニアラザルガ如シ。

是ヨリ六十餘年ノ後、養老年間、天竺ノ僧始テ來リ、佛經及ヒ音樂ヲ傳フ。皇紀二千



欠

MISSING



二百年代(足利幕府ノ末路)ヨリ、日本人ノ南洋ニ當時之ヲ南蠻ト稱スニ赴ク者アリ、呂宋(即チ東洋諸國ニ倭寇ト稱セラルルハ)西班牙國ニ對シテ呂宋群島ヲ爭ハント欲シ、臺灣ニ對セル同島北面ノ、カバヤン、河口ヨリ侵入ス、太守、ベニヤロサ、撃テテ之ヲ破ル。當時謂ハユル倭寇ノ、支那近海到ラザルノ地ナキ以テ見ルベシ。其頃原田孫七郎群島ニ渡リテ其形勢ヲ察シ、遂ニ其地ヲ取ランコトヲ企テ、策ヲ豊臣秀吉ニ獻サタレ、事故アリテ果サズ。其後凡ソ五十年、寶永年中、島原藩主松倉豊後守重政又群島ヲ征服セント欲シ、人ヲ派シテ其地勢ヲ視察セシメタレ、偶マ其死ニヨリテ志ヲ空ウセリ(各別記アリ)。

文祿慶長年間(二千年代)我西南ノ士民安南、暹羅、呂宋等ノ地方及ヒ支那(明)ニ至リテ侵掠スル者連年甚シキヲ加フルヲ以テ、諸國使ヲ遣シテ之ヲ禁絶セシメテ請フ、德



川將軍依テ嚴令ヲ下シ、元和四年(七千八百)商船々主船本彌七郎ヲ安南ニ遣リ、邦人ノ暴行ヲ鎮セシム。翌年船本安南ヨリ歸ル。

慶長四年(五千九百)太泥國ノ信使我國ニ來リテ書翰及ヒ方物ヲ呈ス、太泥ハ暹羅ノ西南麻刺加半島ノ内ニアル小國ナリ。時ニ徳川家康國政ヲ執ル、乃チ復書及ヒ甲冑二具ヲ酬ユ。同時又我國ト安南國トノ交通開ク、同六年安南國都統元帥瑞國、公阮敬ノ信使至ル(貿易ノ條)。爾後、呂宋、東埔寨、其他各國ノ信使相次テ至リ、南洋及ヒ印度地方トノ交通漸ク繁ク、商人互ニ往來セリ。寛永三年(八千五百)東埔寨ノ信使又來ル、翌年長崎奉行長谷川權六并ニ商人大和屋善右衛門、分部又四郎ノ二名ヲ其國ニ遣リテ答聘ス。

斯ノ如ク南洋及ヒ印度ノ交通益ス繁劇ナラントスルニ際シ、幕府ハ最モ切支丹(即チ耶穌)ヲ嫌忌スルノ念ヲ生シ、寛永十三年、耶穌教嚴禁ノ令ヲ發シ、長崎居留ノ外人ヲ逐ヒ、我商船ノ外國ニ航スルヲ禁シ、十六年又外船ノ來ルアラバ、其船ヲ毀チ、其人ヲ誅スベキトテ合ス。翌年、媽港船長崎ニ到ル、幕吏其犯禁ノ罪ヲ責メ、其船ヲ燒キ、六十一人ヲ斬リテ之ヲ梟シ、特ニ船手及ヒ醫師十三人ヲ放還シ、禁令ヲ其本國ニ告ケ

シム。幕府海禁ヲ布キテヨリ、我人民ノ海外ニ航スルヲ許サズ、其歸ル者ハ即チ之ヲ死刑ニ處ス、依テ外地ニ留リテ終ニ歸國セザル者多シ、其後四十年、延寶年間、特ニ支那船ニ托シテ親戚ト書翰ヲ往復スルヲ許シ、長崎ニ於テ之ヲ檢査ス、其時尙ホ暹羅ニ留ル者九人、安南ニ四人、廣南(西貢)ニ四人、東京(交趾)ニ一人、咬啗吧(瓜哇)ニ七人(内五人其一人ハ)以上總計廿五人アリ。爾來、南洋ハ印度諸國ノ商船來リテ貿易スルモノ僅ニ數國ニ止リ、寛政年中(二千五百年)ニ至リテ其交通殆ド絶エ、以テ今ノ開國ノ世ニ及ベリ。



### ○近古西南洋交通貿易ノ繁盛○日本ト西南洋諸國トノ交渉○海外交通ノ遮斷

近古南洋、印度交通貿易ノ一時ニ太盛ノ氣運ニ向ヒシヲ實ニ驚クベク、亦以テ當時ノ國人ノ氣象ヲ見ルニ足レリ。此ノ如キ事狀ニ至リタルモノハ其原<sup>○</sup>因蓋シ三アリ、第一ハ當時海外貿易ニ大利ヲ得ル<sup>○</sup>ト容易ナリシヨリ、少シク氣力アル商人ハ皆之ヲ試ミタル事、第二ハ時ノ雄將豐臣德川二氏ガ他ノ諸將ト主權ヲ争フニツキテ、大ニ費金ヲ要シ、之ヲ補フニ貿易ノ利ヲ以テシタル事、第三ハ戰國ノ際、敗者ノ地位ニ落チ、逆流ニ立チタル士人ガ生計ヲ國外ニ求メタル事、是ナリ。文祿元年<sup>(二)</sup>百五十二年<sup>(二)</sup>豐臣秀吉呂宋、媽港、安南、東京、占城、東埔、塞、暹羅、太泥ノ諸國渡航ノ商船ニ免許ノ朱印ヲ與フ之ヲ

#### 〔御朱印船〕

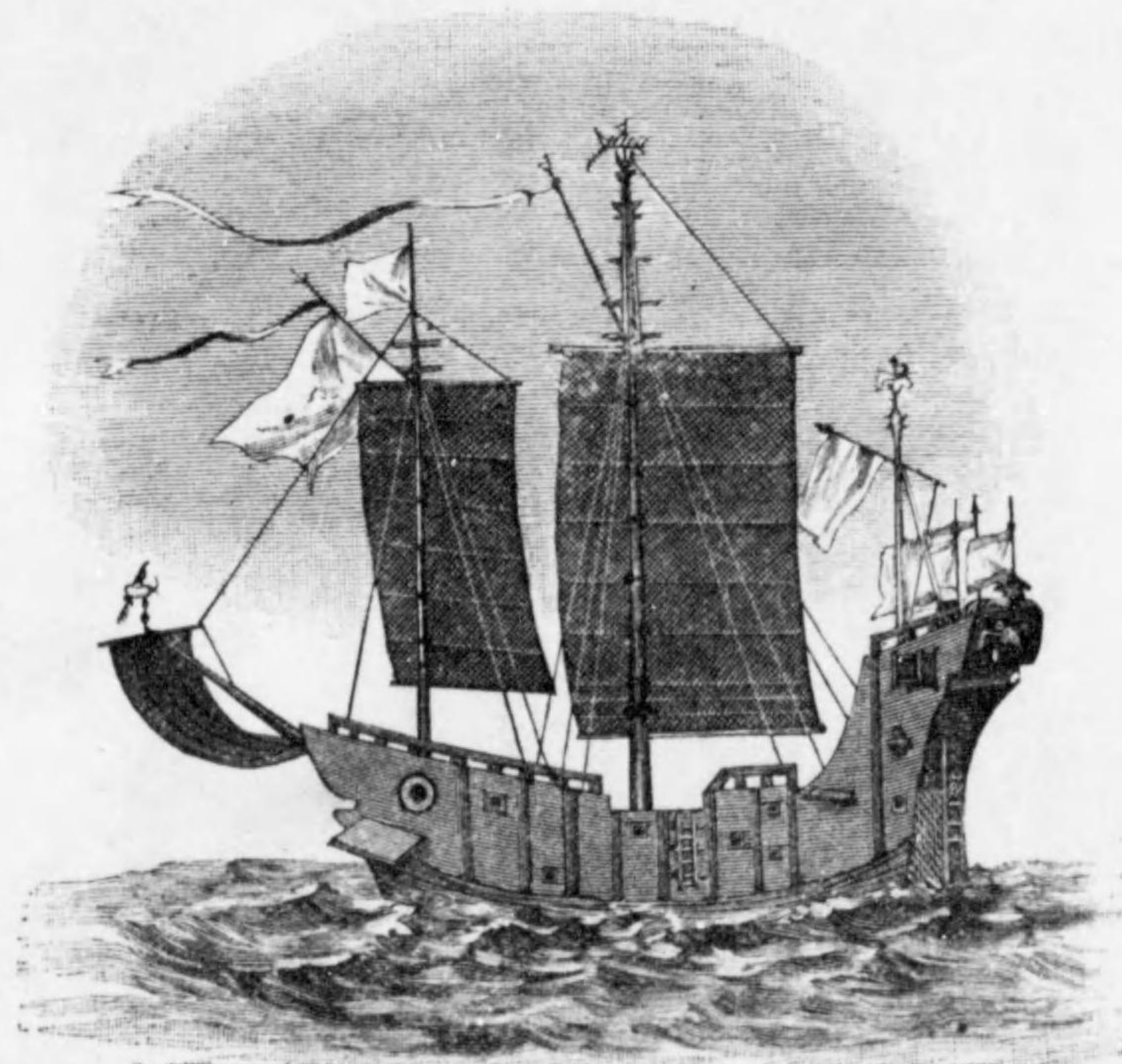
ト稱ス、其人名及ビ船數ハ長崎ノ末次平藏二艘、船本彌平次、荒木宗右衛門、糸屋隨右衛門、泉州堺ノ伊豫屋貞千、并ニ京都ノ茶屋四郎次郎、角倉與一<sup>(本名吉田與一、郎貞順、京四條、嶋角倉ニ居ル)</sup>

與一ト稱ス<sup>(伏見屋各一艘トス)</sup>。以上八人ノ持船ハ皆ナ大船ニシテ、支那船ニ摸擬ス、世人之ヲ九艘船ト云ヘリ。此年其船呂宋等ニ至ルモノアリ、白糖、棉花、麻、煙草、其他ノ產物ヲ齎シ還ル。

朱印船ノ記ニ「長崎ノ長崎山清水寺ノ觀音堂ニ、往時海外ニ渡リシトノ船ヲ圖セシ古キ扁額一面アリ、其形粗ボ福船ノ如クナレト、兩傍ニ格子ヲ造リ、窓ヲ設ケテ、人ノ出入スベキヤウニ造レリ。艦<sup>トモ</sup>ノ方ハ樓造リニテ、欄干アリ、檣<sup>ホネシラ</sup>ハ大小三竿アリ、帆ハ屏風ノ如ク、竹ノ葉ヲ編ミテ造リ、之ヲ檣ニ掛ク。又布帆ヲ其上ト舳ノ頭<sup>トモ</sup>楫トニ張ル。大小ノ二桅ニ號帶<sup>フナシ</sup>ヲ掲ク。艦ノ方ニハ朱丸ノ内ニ「平」ノ字ノ大ナル幟ヲ立ツ、其側ニ「奉納寛永十一年甲戌七月吉日 石本庄左衛門八代石本幸四郎與長男庄五郎與道」トアリ。當時免許ノ朱印ヲ賜ハリテ長崎ヨリ年々異國ニ渡海セシ船五艘アリ、此扁額ハ何レノ船ヲ圖セシモノニヤ、朱丸ノ内ニ「平」ノ字ノ幟アルヲ見レバ、恐ラクハ末次平藏茂房ノ船ナルベシ。其頃御朱印船ト稱スルモノハ、長崎、堺、京都ノ三ヶ所ニテ九艘ニ限り、其他ニ之ナシ。此大船ハ唐船形ニ造リテ、皆長崎ヨリ出帆ス。世俗ニ「唐渡リ」ト云ヒシカド、皆臺灣



〔海外渡航ノ船舶〕



此圖ハ清水觀音堂扁額ヨリ傳寫ス。  
船ノ長サ十五間乃至二十間、大ナルモノハ荷  
物二百萬斤、中ハ百五十萬斤、小ハ百二十  
十萬斤ヲ積ム。船ノ造リ方、并ニ帆具等支那  
船ニ同シク、底深クシテ、舵ニ數ク所大ナル  
鐵ノ肘ヲ打チ、其肘ヲ受クル所ニ又大ナルつ  
ぼヲ打チテ舵ヲ箝ム。舟ノ上廻リヲ赤ク丹土  
色ニ塗ル、又油漆ノ類ヲ塗リタルモノアリ、  
船底ノ水ニ入ル處ハ總テ油石灰ニテ白ク塗  
ル。艙ニ短キ櫓アリテ遣出シト云フ、之ニ帆ヲ  
掛ク、又本帆、綱帆ノ上ニ更ニ帆ヲ掛ク、之  
ヲ高帆ト云フ、高帆、遣出シノ帆トモ本縮帆  
ナリ。此船ノ式ヲみすつ、す造リノ船ト云フ、  
往時長崎ヨリ四南洋ニ航セシ船ハ皆ナ此造リ  
方ナリ。  
支那ニ往來シタル船モ大抵此ニ同ジカリシモ  
稍ヤ小形ナリシガ如シ、應仁二年(一四六八  
年)足利義政ノ命ヲ以テ明ニ聘使タリシ僧清  
啓ノ戊子入明記ニ、渡唐船ハ二千五百斛ヲ大  
トシ、千八百斛之ニ次ク、皆ナ大ニ過ギテ運漕  
ニ便ナラズ、千二百斛ヲ適度トストアリ、又船  
名ヲ何丸ト稱シタルヲナモ記セリ。

(頁四一部二第人本日ルケ於ニ界世)

(歐米ノ部覽)  
易ノ條參看

呂宋、交趾、暹羅等ノ國々ニ往來セシナリ。然ルニ異國渡海ノ禁アリテヨリ、天下  
ハ舟船ノ規模ヲ狭小ニシ、風浪ニ駕シテ、洋海ヲ渡ルニ堪ヘザラシム。是ヨリ  
シテ本邦大船ノ制法一旦ニ廢シテ、所謂地乘船トナリ、往時構造ノ制式ヲ見ル  
ニ由ナシ、唯其形圖ヲ扁額ナドニ窺フノミ。京都ノ北野ノ聖廟ニハ朱印船ノ圖  
一枚アリ、又清水ノ觀音堂ニ角倉氏ノ船圖アリ、其船中ニアリシ人ノ奉納セシ  
所ナリ(此二圖ハ扁額集覽ト云フ刊書ニ載シ、就中聖廟ノ角倉氏ハ當時九艘ノ大船ヲ總  
廣ニアレ圖ハ縮寫シテ刊行セルモノナリ)。角倉氏ハ當時九艘ノ大船ヲ總  
テ監司セシト云フ。此圖ノ模様ハ長崎ノ圖ト大同小異ナリ。天竺德兵衛ノ  
渡天物語ニ云ク、角倉氏ノ渡海船ハ、長サ二十間、幅九間、人數スベテ三百八十人、  
先ツ長崎ニ來リ、其レヨリ出帆ス云々。是ニ由リテ觀ルトキハ、其餘ノ船ノ大サ廣  
サモ大抵推シテ知ルベシ。昔時船舶ノ事ハ金澤義光ノ「和漢船用集」ニ詳ナリ。  
當時大名ニテ大船ヲ有セシ者ハ松浦隆信(法印)、島津義弘、加藤清正、鍋島直茂、五島盛  
利等ニシテ、其船十餘艘ナリ。慶長五年(二千九百)徳川家康ノ政權ヲ握ルニ及  
デ、更ニ朱印ヲ附與ス、之ヲ受クル者六十二人ナリ。其朱印免許狀ノ文例左ノ如シ



自日本到  
暹羅國舟也

右

慶長十七年壬子年九月九日

朱印

自日本到  
交趾國舟也

右

年 月 日

朱印



文祿元年ヨリ寛永十一年ニ至ル四十三年間ニ、豊臣徳川兩幕府ノ免許ヲ得テ、南洋  
 印度諸國ニ通商シテ大利ヲ得タル者多シ、是ヲ以テ世人競フテ海岸貿易ニ從事セ  
 ント欲スルモ、免許ニ制限アリシガ、故ニ志ヲ抱キテ手ヲ空ウセシ者少カラズト云  
 フ。慶長九年ヨリ十八年ニ至ルマデ十年ノ間ニ海外渡航ノ朱印ヲ受ケシ船内外  
 ナ合シテ、凡ソ廿四艘ニシテ、又十九年ヨリ寛永元年マデ十一年ノ間ニ五十五艘ア  
 リ、以上廿一年ノ間ニ合計百七十九艘ナリ、其元和八年マデノ人名左ノ如シ(各書ニ  
 若ル者ヲ集録ス、尙ホ  
 若干ノ遺漏アラシ)

慶長九年 (二千二百六十四年、西一六〇四年)

安南國又交趾ト稱スルヲアリ。

茨城屋又左衛門 細屋 喜齋 高瀬屋 新藏

尼崎屋又次郎 安當 仁 末次 平藏

船本彌七郎顯定

占城國安南ノ南隣國

西野 與藏

呂宋國邦人「ロソン」又ハ「ルスン」ト云ヒ、歐人ルソン (Luzon) ト云フ、即チ「フィリピン」群島

伊丹 宗味 安當 仁 平野孫右衛門

田邊屋又右衛門

シンチウノ通航一覽ニ引ケル異國渡海御朱印帳ニ信州トアレ凡、外交志稿ニハ廣南(安南)

高瀬屋 新藏 窪田 與四郎

東京安南ノ東都、支那ト前印度ノ境ニアリ。 角倉了以初、與七、光好 皮屋助右衛門

榮仁一ニ榮住

東埔東埔國又「カンホーヂユ」ト呼ブ、暹羅ノ南ニアリ。

島津少將忠恒後家 五島淡路守盛利 平戸傳

六條 仁兵衛

暹羅國當時邦人之ヲ「シヤムロ」ト呼ブ、土人ハ自ラ其國ヲ「タイ」ト稱ス、英人ハ「サイアム」ト呼ブ。

島津陸奥守 住暹羅國 與右衛門 有馬 修理

太泥國麻刺加半島ニアリ。

今屋 宗忠 江戸檜皮屋孫兵衛 江戸大黒屋助左衛門



順化安南ノ四郡。

平戸助 太夫

西洋國 按スルニ南印度地方ヲ汎稱シタルモノニシテ、今ノ謂ハユル西洋ト云ヘリ。歐羅巴ニハ非ズ、當時歐羅巴ハ印度洋以テ共ニ之ヲ汎稱シテ大西洋ト云ヘリ。

明人林 三官

カチア 迦知安國 交趾ノ中ナラント云フ。

松浦法印 鎮信

慶長十年

西洋國

松浦法印

島津淡路守

五島淡路守盛利

肥前原 有馬修理大夫晴信

明商林 三官

島津少將忠恒

鍋島加賀守直茂

アントウニシ 日本名 甚左衛門

明人林 三官

長崎喜安

呂宋國

アントウニシ 安當仁カラセス

田邊屋又左衛門

浦井宗普

東埔寨國

有馬修理大夫晴信

河野喜三右衛門

船本彌七郎

長井四郎右衛門

西村隼人

原彌二右衛門

豆葉屋四郎右衛門

大黒屋長左衛門

安南國

島津陸奥守

船本彌七郎

天南國安南ノ別名。

原彌二右衛門

占城國

有馬修理大夫

東京

角倉了以

皮屋助右衛門

ミサイヤ 密西耶國「フサリッピン群島」ノ「ピサヤ」ナリ。

窪田與四郎

〔御朱印船〕



艾萊國アライ麻刺加半島ノ東ニアル大島。

大坂甚右衛門

太泥國

京都 仁兵衛

尼崎屋又次郎

慶長十一年

田彈國太泥ノ別名ナリト云フ。

明商林 三官

東埔寨國

後藤 宗印

大坂檜皮屋孫左衛門

西村 隼人

密西耶國

高橋掃部入道

占城國

明人林 三官

暹羅國

木屋彌三右衛門

長崎惣右衛門

今屋 宗忠

有馬 修理

安南國

原彌二右衛門

呂宋國

安當仁カラセス

平野彌右衛門

明人林 三官

西洋國

山口駿河守

慶長十二年

西洋國

鍋島加賀守直茂

松浦鎮信法印

安南國

船本彌七郎顯定

占城國

〔御朱印船〕



有馬修理大夫晴信

東埔寨國

有馬修理大夫晴信

西村隼人

堺豆葉屋四郎右衛門

暹羅國

大賀九郎左衛門

慶長十三年

西洋國

角倉大膳

安南國

角倉大膳

東京

角倉大膳

東埔寨國

堺木屋彌三右衛門

暹羅國

田邊屋又左衛門

末吉孫左衛門

慶長十四年

東埔寨國

明人林三官

東京

角倉了以

呂宋國

平野孫右衛門

小西長右衛門

安當仁カセラス

交趾國占城ノ北ニアリ。

加藤肥後守清正

暹羅國

加藤肥後守清正

伊藤新九郎

キリシタン、パレン、トマス

島津陸奥守

木屋彌三右衛門

龜井武藏守

〔御朱印船〕



慶長十五年

東埔寨國

大村丹江島吉右衛門

暹羅國

右 同 人

慶長十六年

安南國

角倉與一郎略シテ與ト云フ

交趾國

船頭松右衛門

呂宋國

平野孫左衛門

暹羅國

(細川)長岡越中守忠興

木屋彌三右衛門

龜井武藏守

平戸松浦法印隆信

長谷川左兵衛藤廣

慶長十七年

交趾國

茶屋四郎次郎晴次

呂宋國

右 同 人

毘那宇島

津 田 紹 意

廣南安南

ヤヨウス荷蘭人ヤンヨリステン

暹羅國

木屋彌三右衛門

ヤヨウス

慶長十八年

東京

角 倉 與 一

[御朱印船]



呂宋國

村山市藏

暹羅國

長谷川忠兵衛藤繼

豐人マノシル

木屋彌三右衛門

ヤヨウス

東埔寨國

夏ノ局

本多佐渡守正信

シノニヨロ本名未詳

元和元年(二千二百七十五年、西一六一五年)

交趾國

長崎大文字屋忠兵衛

元和二年

マロコポルトガル渤泥島ノ一部ナリト云フ、或ハ麻刺加ノ轉訛ナランカ。

長崎高木作右衛門

元和六年

呂宋國

船主某氏名欠ク

元和八年

交趾

長崎荒木宗太郎

當時朱印狀寛永八年朱印船ヲ奉書船ト改ムノ事ハ三寺院豐光寺、圓光寺、金地院ニ於テ之ヲ管掌ス、亦奇ト謂フベシ、此三寺院ハ寛永元年ヲ以テ從來交付セル朱印狀ノ數ヲ幕府ニ報告スルヲ左ノ如シ

安南	十四通	東京	十通	占城	五通	暹羅	三十五通
呂宋	三十通	交趾	廿六通	東埔寨	廿三通	太泥	五通
西洋	十八通	信州	二通	密西耶	二通	荖菜	二通
田彈	二通	摩利迦	一通	摩陸 <small>マルコ</small>	一通	臺灣 <small>タカシマ</small>	一通
迦知安	一通	順化	一通				

合計十八國、百七十九通ナリ、以テ當時南洋、印度ニ出テ、貿易ニ從事シタル者ノ多

〔御朱印船〕



キヲ知ルベシ。

當時ハ外國商船ノ我國ニ來ルニ、何レノ港タリトモ隨意ニシテ制限アルコトナシ而シテ南洋諸國ノ多ク船ヲ寄シテ貿易シタルハ九州ノ各港ナリ、其頃ノ

〔貿易物品〕

ハ概テ左ノ如シ

輸出品	蚊帳	傘	紙張扇子	合羽	刀劍
	銅器	藥罐ノ類	漆塗	小麥類	時繪
	紙帷子	水風呂	鐵器類	小刀	錫
	庖丁類	食器	木綿布子	鐵錢	椀
	樟腦	屏風	疊		
輸入品	白糸	金入繻子	タビイ	繻珍	チャラ島
	緞子	カベチヨロ	紗	ケン	コルゴラン

サヤ	リン	綸子	縮緬	麝香
山歸來	鮫	水銀	木香	トタン
珊瑚珠	鼻眼鏡	インドヤ唐皮	朱	

白糸ハ即チ今ノ生糸ナリ、當時我國ノ生糸ハ支那産ハ輸入品ヲ用、井、明和安永年間(西一千七百二十年代)東地養蠶ノ事起リテヨリ、輸入ヲ減シ、開國以後ハ、反テ我ヨリ歐米ニ輸出スルニ至リシナリ。

又注目スベキハ當時ノ貿易品中輸出品ハ粗雜ハモハ多ク、輸入品ハ貴貴ハモハ多キコトナリ。

慶長十六年、越中守長岡忠興亦其商船ヲ暹羅國ニ遣ル、歸ルニ及ンデ象牙、白絹、孔雀、豹皮等ヲ幕府ニ呈ス。此年幕府ハ京都ノ豪商茶屋四郎次郎晴次(幼名又四郎)ヲ長崎ニ遣シテ外舶貿易ノ實況ヲ探ラシム、四郎次郎思ヘラク、凡ソ糸類ハ織物ノ原料ナルベシト、乃チ同志相結ンデ支那人等ノ舶齋シ來ル所ノ蠶糸ヲ一手ニ買ヒ入レ、以テ之ヲ各自ニ分付セシニ、京都ノ商工大ニ之ヲ便トス、數人ノ商人生糸專賣ノ事

〔貿易物品〕



ハ此頃ニ始マル當時ハ生糸ノ製造尙ホ未ダ發達セズシテ、多ク之ヲ外國ニ仰ギシ  
ヲ以テ知ルベシ。四郎次郎又自ラ奮フテ交趾ニ至リテ大ニ貿易ノ業ヲ開カント  
欲シ、翌年同國航海ノ朱印ヲ受ケテ彼地ニ渡航ス。同時京都ノ豪商角倉與一年々  
商船ヲ南洋ニ發ス。慶長十七年、其商船歸着シ、紅糸、緋羅紗、綾、沈香、斑猫、葛上亭長等  
ヲ德川氏ニ呈ス。

〔安南國トノ交渉〕

安南國トノ通信其他ノ交渉ハ慶長ノ初年ニ始マル、而シテ事皆ナ通商貿易ニ關ス。  
慶長六年、同國都統元帥阮敬瑞國公ト稱ス、都統元帥ハ猶ホ我大將軍ノ如キモノ  
カノ信使來リ、書翰ヲ德川家康ニ贈ル、其略ニ曰ク、(訓點ハ素ヨリ原文ニ無キ所、皆ナ  
追加ニ係ル、下之ニ倣フ)  
茲屢蒙家康公貴意、前差白濱顯貴發船往販通商結好、又蒙賜文翰、乃前任都堂往復、  
今我新任都統元帥欲依前年兩國交通、不幸至舊年四月間、顯貴船泊在順化處、海門  
被風、船破無所依云々

家康之ニ答書ヲ贈ル。

日本國源家康、復章安南國統兵元帥瑞國公、信書落手、卷舒再三、自本邦長崎所發之  
商船於其地逆風破舟、凶徒殺人者、國人宜教誠之云々

爾後我國ト安南國貴顯トノ往復連年絶エズ、薩藩主島津義久ト同國ト書翰ヲ往復  
シタルヲアリ、慶長末年、家康又書ヲ同國ニ贈ル、其書頗ル貿易論トシテ見ルベキ者  
アリ(藤原惺窩ノ  
起草ニ係ル)。

日本國源家康致書安南國頭目黃公、比年鴿舶往還、二國之情好稍可徵矣、感佩深、甲  
辰六月、我舟人亡恙、歸辱復書、添以嘉幣若干、青貝肆疋、白絹大疋五疋、牙屬  
二件、香燭一瓶、薰香一瓶、厚意不可言  
焉、書中所謂一止於信之一語、誠是家國治教之要矣、乎、夫信者吾人性中之固有、而感  
乎天地、貫乎金石、無以不通、豈啻交隣通好而已哉、雖是千里不同其風也、所以五方皆  
不殊此性者也、歟、由是觀之、則其不同者、特衣服言語之末而已、然則千里萬里、雖遠衣  
服言語雖殊、有其不遠者、不殊者、而存是以所謂一信也、前使不德往還彼此之間、上下  
其手、表裏其言、而多誤事情、故處之以國刑、想在貴國亦如此乎、凡舟人者、命市見販夫  
之徒、而僅見小利、則忘大辱、其言多任喜怒之恣、而不足取其信、自今而後、二國之信者



在書書之信者在印以是爲證耳矣故今附舟人以今夏之復書貴國子細檢焉方物數事聊寓綏好之禮書中又言貴國者詩書禮義之國而非市貨會集之地荷市貨商賣之事惟利是務真可鄙焉然亦通論之則四民孰非民入政孰非政安民爲政之外無詩書禮義詩書禮義之外無安民爲政是亦五方固有之定性信之所主在也貴國之所誠者在彼失信而屢生不好之事而已二國不失其信則雖雖有小人何至生不好之事乎然亦不可以不誠若生事則二國各有刑法乎哉 (イ)

此書ハ即チ通商ノ理ヲ彼ニ教ヘ我ヨリ進メテ貿易ヲ求ムルモノニシテ論旨寔ニ瞭然タリ然ルニ二百數十年ノ後ニ及ンデ却テ通商ノ理ヲ外國ニ諭サレ貿易ヲ彼ヨリ求メラルニ至レリ何ゾ先人ノ智ニシテ後人ノ不智ナル畢竟亦鎖國政略ニ怯懦政略ノ弊ナルノミ。又此頃貿易商人角倉與一(名ヲ貞順字ヲ子元ト稱ス)ガ商船ヲ安南ニ發セシト船中規約ト云ヘルモノヲ作レリ(亦僅當ノ代草ニ係ル)。

貞實安南國船中規約

一凡回易之事者通有無而以利入己也非損人而益己矣共利者雖小還大也不共利者雖大還小也所謂利者義之嘉會也故曰貪賈五之廉賈三之思焉

一異域之於我國風俗言語雖異其天賦之理未嘗不同忘其同怪其異莫少欺詐慢罵彼且雖不知之我豈不知之哉信及豚魚機見海隅惟天不容僞欽不可辱我國俗若見他仁人君子則如交師敬之以問其國之禁諱而從其國之風教  
一上堪下輿之間民胞物與一視同仁况同國人乎哉况同舟人乎哉有患難疾病凍餒則救焉莫欲苟獨脫  
一狂瀾怒濤雖險也還不若人欲之溺人人欲雖多不若酒色之尤溺人到處同道者相共匡正而誠之古人云畏途在衽席飲食之間其然也豈可不慎哉  
一瑣碎之事記於別錄日夜置座右以鑑焉

日本國慶長 年 月 日

回易大使司馬貞子元誌 (ロ)

慶長年間ノ人が斯クモ通商ノ要務ヲ明ニシ貿易ノ要ハ共ニ利スルニアルヲ審ニシタルヲアルヲ見ルベシ或ハ之ヲ評シテ歐洲ニ於ケル「アダム・スミス」ヨリモ殆ド百年前ニ在リテ貿易ノ眞理ヲ發見シタルモノナリト云ヘリ。

當時邦人ノ海外ニ航スル者皆ナ勇胆ナラザルハナク其弊ヤ放恣暴惡ニ流レ外人大ニ之ニ苦ミタルハ恰モ我國開港以來我ノ歐米人ニ於ケルノ狀況ニ等シク全



ク、其位地ヲ顛倒セリ。安南人等ガ我ト通商ヲ好マザルハ、前ニ載スル家康ノ書翰ニモ見ユル如ク、邦人ノ暴行ニ因ルモノニシテ、屢バ我ニ對シテ苦情ヲ訴フル所以ナリ。安南國政府ハ又我慶長十一年ヲ以テ其國在留ノ日本商人ニ諭示スル所アリ。

天南國欽差雄義營副都督將行下順化廣南等處大尉瑞國公爲曉示日本國客商等蓋聞爲國九經、一日柔遠人、吾於上年見日本商人有船參艘遠來吾國販賣、以恩撫之、厚燕待之、欲存信義、使自感吾德也、彼等乃自逞惡橫行國中、虜掠福建商人貨財、劫斫傍近居民、婦女、傲物肆志、越法乖常、吾使人以義諭之、欲其改過遷善、彼乃非違吾命、願自決戰、吾不得已、加以兵威、非貪彼等貨利也、惡其無禮也、茲爾等亦日本富商大賈、再就販賣、欲得方物大利、爾等忽遇艱患、吾見之、於中心有憾焉、吾當嚴戒國人勿爲侵掠、爾等各自謹守、所存財物再整船艘、待順風回爾本國、以存吾恩信、慎勿疑懼、云々

弘定、崇年、肆月、十五日。

又五月八日ヲ以テ、更ニ本邦商客ニ諭告ス、其文大同小異ナリ。其後、居留地人民ノ事ニツキテ、幕府ノ執政本多上野介正純土井大炊助利勝ヨリ安南ノ大臣ト往復シ、

相互ニ居留人民ヲ處分スルコトセリ。元和四年本多土井ノ兩執政ヨリ交趾在留ノ船本彌七郎ニ命令ヲ與ヘ、『自日本到交趾國渡海之諸商人、可爲船本彌七郎計付於交趾非法之輩在之者、屋形次第可被成敗者也、右相背者於有之者、歸朝之刻、隨言上曲事可被仰付旨、執達如件。』トアリテ、其地居留人ノ處分ヲ委任セルコト猶ホ領事ニ裁判權ヲ附スルガ如クナリ、即チ今ノ謂ハユル治外法權ノ端緒ヲ茲ニ開キタルモノト云フベシ。

### 〔東埔寨國トノ交渉〕

慶長六年、東埔寨、呂宋ノ兩國人始テ來リ、信書并ニ方物ヲ德川家康ニ贈ル、家康之ニ謁見ヲ與ヘテ物ヲ酬并、返書ヲ與フ、其東埔寨國ニ與フル所ノ書ハ左ノ如シ。

日本國源家康復、章東埔寨國主麾下、遠傳信書、披之讀之、如連華床而聽、雪語、矧又贈諸般奇產、感欣交臻、抑貴國有英雄鬪諍之患難、不勝嗟嘆、和同將士、撫育黎庶、而不及干戈、敵邦兵甲、可應貴國所求、更不可制止、本邦商人欲赴貴國、可遣寡人此書所押之信印、不持此印書之輩、吾不可允容焉、懷廷大官商船、即今告歸國、他日雖到、陋邦海涯



陸地不可有寇賊、島嶼諸國嚴加制命、其他縱雖隔遠、其交親切則不作四海兄弟、思乎、云々

當時外國ニ發スルノ文書ハ概テ漢文即チ和漢混合文ヲ用井ニ希ニハ日本文ヲ用ウ大抵僧徒ノ手ニ成ル其漢文ノ拙劣ナル措字ノ顛倒多キ外國人ニハ解シ難カラント思ハルモノ十ノ八九ニ居ル文學ノ未熟想フベシ何故ニ固有ノ邦文ヲ棄テ、故ヲニ未熟不通ノ文ヲ用井タルカ。

慶長十年東埔寨國主浮羅王嘉ハ其國居留ノ日本商人原彌二右衛門ヲ以テ其國ノ信使トナシ、同國握雅招花(宰相ナラン)ハ長井四郎右衛門ヲ以テ其國ノ船長トナシテ、我國ニ來聘セシム、家康之ニ返書ヲ酬ユ。

東埔寨國握雅招花托本邦商人長井四郎右衛門所寄贈之書翰披而見之、則紙上記、蜂蠟虎皮之方物、實不意之芳信也、於日本逸馬、銅鐵刀銃等之土宜、可隨所求、何作鄙怯乎、陋國於貴國雖隔千萬重之海陸、兩國士民年々作往來者、於異域日本之商客若作災害、究盡是非、而可用貴邦憲政也、太刀脇刀贈進之、以述賀儀、餘緒付在異時之船便、云々

書中日本人ノ東埔寨ニ於テ罪惡ヲナス者アラバ、其國ノ法律ヲ以テ處罰スベシト

云ヒ、其安南等ト例ヲ異ニセルハ、其地ニ執法タルベキ者ノ居留セザリシガ故ナラシ。慶長十一年東埔寨國主握雅老輔父子又其國居留ノ日本商人河野喜三右衛門ヲ以テ使トナシテ來聘セシム。此時ニ當リテ、日本人ノ南洋印度諸國ニ横行スル利益甚シク、爲ニ彼我ノ交際ニモ關係セントスルノ勢アリ。東埔寨、呂宋ノ二國頗ル之ヲ憂ヒテ、更ニ我國ニ其制止ヲ請求ス、徳川家康乃チ二國ニ制札ヲ贈ル(今東埔寨國主ニ贈レルモノヲ錄ス。呂宋太守ニ贈レルモノモ同文ナリ)。

近年到其國日本人作惡逆輩、如東埔寨法度可被致成敗者也、於日本無隔心、在此印札可被申付也、仍狀如件。

慶長十三年戊申八月六日。

家康(印)

東埔寨國主足下

是レ即チ日本人處罰委任狀トモ云フベキニシテ、亦家康ノ邦人ヲ域外ニ保護スルノ念薄キヲ察スベシ。

〔呂宋トノ交渉〕

〔呂宋トノ交渉〕



呂宋ハ近時西班牙國之ヲ占領シ(元龜三年、四曆一五七二年)フ井、ビソ群島ト稱シ、太守ヲ置キテ之ヲ統轄セリ。慶長年間、邦人ノ呂宋ニ至ル者頗ル多ク、竟ニ一區ノ居留地ヲ開キテ日本町ト稱ス(交通事歴參看)。徳川家康夙ニ外國貿易ニ着眼シ、群島及ビ「濃毘數般」即チ墨西哥國トノ交通ヲ開カント欲ス。時ニ呂宗太守ヨリ書ヲ以テ日本入支那ノ海賊ト合シ、沿海ヲ侵犯スルニヨリ之ヲ防止セシメ、并ニ日本ヨリ群島ニ渡航ノ船多キニ過グルヲ以テ之ヲ制限セシメテ請求ス。家康之ニ返書ヲ贈リテ其請求ニ應ス。

日本國源家康回章呂宋國郎巴難至昔高提腰足下舊年於貴國之海邊大明弊邦惡徒作賊之輩可刑者刑之明人者異域民也不及刑之令歸于本國定知於大明被誅罰如本邦者去歲凶徒雖作反逆一月之間無遺類誅戮之故海陸靜安國家康寧自本朝所發之商船不可用多者可隨來意他日本邦之船到其地則以此書所押之印可表信印之外者不可許焉弊邦與濃毘數般欲修隣好非貴國年々往來之人則海路難通所希求者依足下指示舟人船子時一令往返貴邦土宜納受之遠方之信厚意難謝孟冬漸寒順序保商

慶長六年辛丑冬十月 日

呂宋太守ハ更ニ此書ニ對シテ其請求ノ容レヲ謝スルノ書ヲ贈ル然レモ我請求即チ墨西哥開航ノ便ヲ與フルコトニツキテハ未ダ確答ヲ得ズ是ニ於テ家康ハ其翌年更ニ書ヲ贈リテ其意ヲ致シ且ツ爲ニ關東ニ一港ヲ開キ又支那近海ニ横行セル八幡船(所謂倭寇ニシテ海賊ナリ)ヲ一掃スベキヲ并ニ其地ニ於テ暴行ヲナス者アラバ之ヲ戮スルモ妨ナキヲ云フ。

日本國源家康回翰呂宋國太守麾下遠人得來而傳足下音書說貴國政化况又投贈五般方物雖不對容顏不聽辭語交情作四海一家思者不勝感荷本朝與濃毘數般欲作商船往來者不必爲本邦貴邦之人曾曰弊邦關東有所止宿則呂宋之舟可逃風難自關東出舟者兩國之嘉慶也云々故自貴國告彼國者期望之意可應貴邦所欲自本邦出入幡舟輩悉誅殺焉域中到遠島遐陬彌加制止之嚴命若又到其地而作暴逆可被殺戮莫怪本朝商人雖有寡人押印之書不用國政致非理者記其名字而可告報之異日不可令其舟渡海也雖爲微物贈本邦兵器以表寸忱餘事付與使者口碑不備

慶長第七龍集壬寅八月 日



家康ハ斯ク十分ノ好意ヲ表シテ墨亞哥ノ航路ヲ開カント欲スルノ際、呂宋ノ商船士佐ニ漂着セシカバ、厚ク之ニ保護ヲ加ヘ、且ツ其承租商人ノ請ニ應ジテ、八通ノ朱印狀ヲ與ヘ、日本沿岸ニ於テ之ヲ保護スベキヲ約シ、書翰ト共ニ之ヲ太守ニ贈ル。

日本國源家康謹啓、呂宋國主足下、今茲壬寅之秋、貴國商船欲赴濃毘數般、海上罹風波難到本邦土州之海濱、數年與貴國修隣交結、遠盟今也幸而寡人執國柄、旅寓商人、船中資財、何有豪奪乎、爲畏往事、偶見順風、急歸去否、船客數人到陸地者、寄贈貴邦土宜、厚意難報、自今以往、或漂逆風、縱雖謂檣傾楫摧、到弊邦則宜安心矣、兼日域中、益加嚴命、貴國商人請寡人曰、年々濃毘數般往返之舟八艘也、日本國裏、商舟所到、賜可逃災害之印書、則呂宋百世至寶也、如寡人殊愛憐遠人、爲禦士民賊心、別裁押印書者八紙、持此印紙、則弊邦之中、江海島嶼、村邑城里、栖息可康安、莫訝貴國商賈、全見國風、敢不能縷陳也、不宣。

慶長七年歲次壬寅秋九月

書中船中ノ資財豪奪セラル、一ヲナキヲ云ヘルハ、六年前秀吉ノ命ニヨリ、増田長盛ガ西班牙商船ヲ掠奪シタル事アルヲ以テ、歐米ノ部耶蘇教嚴禁ノ條ニ見ユ、今後其虞

ナキヲ示セルナリ。斯ク家康ガ熱心ニ墨西哥ノ航路ヲ開通セント欲スルニ拘ハラズ、呂宋太守ガ其求ニ應ズルニ躊躇セルモノハ、在外日本人ノ跋扈ニ恐レ、且ツ直接貿易ヲ開クニ於テハ、其利ヲ他ニ奪ハル、ヲ慮リタルニ由ルナリ。時ニ薩摩國主島津氏モ亦南洋貿易ニ着眼ス、慶長十年呂宋ノ商船偶マ難ニ遭フテ其國ニ漂着セシニ、國主厚ク之ヲ救護シ、爲メニ新船ヲ造リテ翌年之ヲ呂宋ニ送り、且ツ書ヲ裁シテ太守ニ贈ル。

日本國薩摩州刺史藤原義弘、謹復書于呂宋國王、（トシ、ロドリゴ、ド、セバロ）敝洛黎勝君足下、周易曰、日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、聖人之言、百世豈可廢哉、我聞呂宋之爲地、國富民豐、而南商北賈、往還如織、不亦繁華之地哉、我日本與貴國、（音）遙隔大洋、仰光華於千里之外、是亦山厨羅明教院巴羅之所能知也、前年憑仗巴羅、求貴國商船載貨來而富我國家、非、（音）翅欲富國家、若其遷貨之有無、國家人民各得其所、聯遠之交亦豈有離貳哉、夫玉之爲美也、韜匱而藏之、則不得天下之用、海貨蠻珍無不皆然、不以其所有易其所無、則其用不均、而其貨亦終是腐而已、伏乞足下圖之、去歲所發之一隻船、大洋波穩而着、我一島繫纜者有日矣、非不思患而豫防之、逆風俄起、折樹木、揚砂石、吁時



乎、命乎、船忽破矣、我不忍見之、新造一船、順風揚帆、令商客歸焉、云々、其貿易ノ理ヲ論ズル簡ニシテ盡セリト謂フベシ、然ルニ二百數十年ノ後ニ至リテハ、却テ斯ル卓論ヲ立ツル者ナカリシハ何ゾヤ、是レ退守ノ爲ニ迂濶ニ陥リタルニ外ナラザルナリ。

此島津義弘ノ書ハ南浦文集ニ見ユ。義弘ハ大隅日向ヲ領シ、其子家久薩摩ヲ領ス、然ルニ薩摩州刺史ト記セルハ、當時外國ニ發スルノ文書強テ事牀ニ拘ラザリシモノカ、又島津氏始、藤原姓ヲ稱ス、其源姓ニ改メタルハ、光久ノ世ニ在リ。

此時日本人ノ呂宋ニ居留スル者年々逐フテ増加シ、先ニ支那移民ノ叛亂「マニラ」市等ニ發スルヤ、太守兵ヲ指揮シテ二萬三千人ヲ屠殺セシガ、日本人ハ西班牙人ヲ助ケテ之ヲ撃チ、頗ル功アリ、然レハ粗暴放恣ニシテ政廳ノ政令ヲ奉ゼズ、政廳稍ヤ之ニ苦ム。時ニ呂宋ノ太守更迭ス、新太守「ピヅエロ」ハ其地在留ノ日本人ヲ退去セシムルコトニ決意シ、慶長十三年特ニ使船ヲ派シ、書ヲ以テ先ヅ其由ヲ家康ニ報ズ。

本國伊須波二屋之帝王、當國呂宋爲守護拙夫被仰付、今度致渡海候、然者前々守護人御懸意之段令承知候、到我等無御異儀候様可忝候、雖隔雲山萬里候、心中先非

其儀候、彌々可申談候、次又拙夫此國參着之砌、當所數年逗留之日本人徒者候て、所々騒に罷成候間、當年は一人も不相殘、歸國之儀申付候、雖每年渡海之商客、何も無疎意人等候之間、何所へ成共、風次第可入津之由申付候、此加飛丹同船中の者共御馳走奉仰候、兼又貴國居住の「フ」の儀、如前々被加御哀憐候様、是又奉仰候、少進物、以目錄申上候、奉表寸志而已、恐惶謹言、

慶長十三年五月廿七日

ドンロドリゴ フ ピヅエロ

進上

日本御主 大御所様

太守ハ別ニ又一書ヲ大將軍秀忠ニ贈リテ、呂宋ニ渡船スル日本船ヲ毎年四艘ニ限ラシメテ求メ、同シク日本居留ノ傳教師ヲ保護センコトヲ請フ。太守ハ日本人退去令ヲ布クニ當リテ、日本ノ憤怒ヲ招カンコトヲ恐レ、豫テ家康ノ墨西哥ノ航路ヲ開クノ希望アルヲ機トシ、今回渡航ノ船長ヲシテ、其船ヲ相州浦賀ニ寄港セシム、家康大ニ喜ビ、其安全ヲ保護スル爲ニ有司ニ命ヲ制札ヲ建ツ。



定

三浦の内浦賀津

對呂宋商船狼藉の儀、堅令停止之訖、若於違背之輩者、速可處嚴科之旨、依仰下知如件、

慶長十三年七月

對馬  
大炊

(對馬、大炊ハ時ノ執政安藤對馬守、土井大炊助ナリ。)

家康又呂宋太守ニ返書ヲ與ヘテ、日本人退去ノ處分ヲ承認シ、且ツ其處刑ヲ委任ス。

日本國源家康報章呂宋國太守足下、芳書落手、卷舒圭復、如書、而從伊須波二屋爲呂宋國守護、渡海珍重至祝、如前々不可有疎意也、然而今歲被着船於相州浦川津、欣悅不淺、抑如貴國者、上下安寧、人民相親、諸邦懷其惠者也、本邦亦正法度、正禮義、故無惡逆賊徒、雖然本邦者、於其地致無道者、盡可被誅戮也、次渡海加飛丹船中者、心安申付也、貴邦方物、如目錄納受、厚意難報、又吾邦信物、雖爲菲薄、以別福獻之遺餘、期後音不備、

慶長十三年戊申八月六日

同時ニ日本人處分ノ委任狀ヲ送ル。

近年到其國、日本人作惡逆輩者、如呂宋法度可被成敗候、於日本無隔心、任此印札可被申付也、仍狀如件、

慶長十三年戊申八月六日

朱印

呂宋國太守足下

是レ治外法權ヲ廢シテ在留國ノ法律ニ從ハシムルモノナリ、此時大將軍秀忠ノ名ヲ以テ、亦一書ヲ贈ル、其書ハ家康ノ書ト同意義ニシテ、渡航商船制限ニ對シテハ一言之ニ應答セズ、是レ蓋シ暗ニ非認ノ意ヲ示セルモノナリ。呂宋太守ハ家康ノ委任狀ヲ得テ、直ニ粗暴ノ日本人放逐ニ着手セシニ、此類ノ日本人ハ家康ノ旨ナルヲ以テ、命令ニ服從シテ皆ナ退去セリ。太守ハ此處分ヲ了リタレ、在日本傳教師ノ身上ニツキ、頗ル憂フル所アリ、其翌年又書ヲ贈リテ、其頗末ヲ報シ、兼テ教師ノ保護ヲ請フ、家康之ニ返書ヲ與フ。

日本國源家康報章呂宋國主麾下、來書披見、忻然、抑本邦之人等於貴域行非法之旨

[呂宋トノ交渉]



就達聞制書相渡之處、被任其趣、平均安靜尤可然、貴國守護相替舊年、永可有逗留段、珍重、如例年、黑船至關東、可被相渡之由、其節委曲、可承知、次住居之バテレン、聊不可有疎意、猶期後音者也、

慶長己酉孟秋六日

(バテレン)伴天連ハ羅馬語「バテレ」ノ轉訛ニシテ、天主教ノ師父ヲ云フ、古來或ハ誤リテ人名ト認メシコアリ、近來ノ刊書ニ於テモ、史局ノ史徵墨實ガ、ヒセロイ(總督)ヲ人名ト誤リ、外務省ノ外交志稿ガ、バテレン及ヒ、アンサン(按針)ヲ人名ト誤リタルカ如キノ例少シトセズ、

書中云フ所ノ黑船ハ三ヶ月ノ後我相州ニ來着セシカハ、家康ハ其期望セル墨西哥航路ノ開通緒ニ就クヲ喜ビ、返書ヲ贈リテ満足ノ意ヲ表ス。

日本國源家康回章呂宋國太守麾下、芳翰飛來、披閱珍重、抑爲貴國之守護渡海、政化至安、而如例年被投、數般方物、雖不及閑談、如對容顏、誠作四海一家思者、交情不淺、彌不可有疎意也、餘附船主舌頭、不宣、

慶長十四年己酉十月六日

朱印

又墨西哥通航ノ船長ニ保護狀ヲ付與ス。

呂宋船ノビスパニヤへ渡海之時分、逢逆風、著何之湊共、相違有間敷者也、仍如件、

慶長十四年己酉十月六日

朱印

セラレ シユワシ ヌスクラ

是ニ於テ我國ト呂宋及ヒ墨西哥トノ通航開ク、同時ニ日本船始テ墨西哥ニ航海ス、事ハ歐米ノ部ニ詳ニス。

時ニ肥前大村ノ人西類子ト云フ者、屢々呂宋ニ往來シタルヲ以テ、家康之ヲ駿府ニ召ビテ、彼地ノ狀況ヲ問ヒ、特ニ呂宋渡航ヲ命ジ、此舟歸朝之時、雖何之浦着岸、不可有相違者也、トノ朱印狀ヲ與ヘテ之ヲ保護シ、且ツ之ニ羽織ヲ給フ、蓋シ特典ナリ、亦以テ家康ガ南洋航通ニ熱心ナルヲ見ルベシ。

慶長十八年、呂宋太守ハ書ヲ家康ニ贈リテ、其地ヲ逃亡シテ我國ニ來リシ者ヲ還付センコトヲ求メ、併セテ呂宋在留ノ日本人中ノ暴行尙ホ止マザルヲ以テ、其處分ヲ請ヒシニ、家康之ヲ領シ、復書ヲ贈ル。

日本國源家康報章呂宋國主麾下、遠書到來、披閱數過、三般之方物領納惟幸、其地逃



亡之士來住于吾邦之示諭、即依所求、其身下可還鄉之命也、吾邦之商士於其地、有非法者、任國政、可有其沙汰、彌商船往來、互不可有隔礙、悉委付上野介正純筆舌而已、順

慶長十八歲舍癸丑季秋上旬

家康が此ノ如ク呂宋太守ノ請求スル所ヲ悉ク許容シタルモノハ、其意專ラ通商ニ依リテ利ヲ得ルニアリシガ故ニ(歐米ノ部參看)其他ハ深ク利害ヲ究ムルニ違アラザリシヲ以テナリ。

〔暹羅國トノ交渉〕

暹羅人自、其國ヲ稱シテ「タイ」ト云フ、自在國ノ義ナリ、ポリーノ氏ノ「暹羅國及人民」ニ暹羅ハ明代以來屢々支那ニ朝貢シタルヲ記ス(山田長政ノ條參看)。此時ニ當リテ西南諸國トノ通商益々盛ナリ、徳川家康安當仁(外人)ニ托シテ一書ヲ暹羅國ニ贈ル。

日本へ商船被渡候者不可有疎客候國々所々雖何津港如何様ニ商賣候共可被心

安候、押買押賣、違亂有之間敷間、船何程成共渡海可然候、委細從安仁(安仁)方可申候也、

是レ通商ノ爲ニ全國ヲ開放スルモノニシテ、今日ノ開港場ノ如ク制限ヲ設クザルナリ、其船何程ナリ、ハ渡海然ルベクト云フニ至リテハ、僅ニ數年後ノ鎖國主義トハ殆ド入テシテ別天地ノ思アラシム。慶長十五年、家康又書ヲ暹羅國ニ贈ル。

日本國源家康謹啓暹羅國王殿下、夫海山雖隔萬里、親則不異咫尺之地、抑夏日付商船便爲貴國之信、不移寸步、如對高顏、歡并有餘、特予大望之鐵砲鹽硝去歲家臣本多上野介以短書達于貴國、即來歲之船可被投惠、趣握雅普控自今以後、貴邦與鄙國每歲於有貿易商舟之往來者、兩國和本、人民豐熟、遠方如比隣、可修厚盟者也、云々

當時山田長政等暹羅ニアリテ(別ニ記アリ)、兩國間ノ交通ニ力ヲ盡ス、依テ元和年間ハ兩國ノ往來最モ頻繁ヲ極メタル也(元和七年并ニ九年暹羅ノ聘使來リ、幕府ノ之ニ與ヘタル返翰ハ異國日記并ニ和漢三才圖會卷十四ニ見ユ)、外交遮斷以後、其往來亦殆ド絶ユ。後凡ソ二百四十年、明治八年ニ至リテ、我官吏大島圭介、川路寬堂、河野通猷ノ一行其國ニ赴キテ國王ニ謁見シ、暫ク留リ、國情ヲ視察シテ歸ル。同廿年中、暹羅國ト修好通商ノ宣言ヲ爲ス、其緒言特ニ記シテ「嘗テ兩國間ニ存在セシ友誼親睦ノ關係ヲ再起

〔暹羅國トノ交渉〕



シ云々』ト曰フ、亦以テ昔時ノ交際ヲ回想スベキナリ。

### 〔媽港トノ交渉〕

近古邦人ノ南洋ニ往來スルヲ盛ナルニ當リテ媽港ニ至ル者亦少カラズ。媽港即チ阿媽港ハ邦人之ヲ天川ト稱ス、英ノ舊稱アマガオ(A-ma-gao)ヨリ出デシナラン。又葡萄牙ニマカウ(Macau)ト云ヒ、英佛ニマカオ(Macao)ト云フ。支那ノ明代、清初ニ香山澳、又濠境ト云ヒ、今澳門ト云フ、廣東省ノ沿岸、香山島ノ南東ヨリ突出セル半島ニシテ香港ノ西ニアリ、長サ二英里、幅ハ最モ廣キ處ニ於テ一哩ニ滿タズ。天文六年(明嘉靖十六年、西一五三七)、葡萄牙人始テ此地ニ來リテ商家ヲ建ツ、是ヲ歐羅巴ト支那トノ直接交通ノ始トナス、後葡人竟ニ此地ヲ占領ス。

此年代ハ露人著「露清關係論」ニ據ル、近藤重藏(守重)ノ「外蕃通書」ニハ大永五年トス、即チ其十二年前ニアリ。

葡人ノ始テ我國ニ來リシハ其後四年ニアリ、基利斯督實記ノ説ク所ニ從ヘバ、葡人ノ媽港ヲ占領セシハ、其目的支那貿易ヲ開クニ在リシト雖モ、一ハ日本ト交通ヲ策

スルニ在リシト云フ。媽港ト我肥前ノ平戸トノ交通開クルニ及ンテ、邦人ノ其地ニ渡航シ住居スル者頗ル多ク、天川ノ名人口ニ膾炙シ、之ガ貿易ニ從事スル商人ニ天川屋アリ、以テ當時我西南洋貿易ノ盛ナリシヲ知ルニ足ルベシ。

慶長十三年、長崎奉行長谷川左兵衛藤廣、徳川家康ノ旨ヲ奉シ、占城ノ名香ヲ求メシムル爲ニ、肥前原城主有馬氏ノ船ヲ發シ、船手久兵衛及ビ按針(航路師)トシテ、外人ヲ遣ル、船偶マ媽港ニ寄ル、船人港民ト争鬭ス、港民夜ニ乗ヲテ旅宿ヲ襲ヒ、久兵衛等六人ヲ殺シテ悉ク貨物ヲ奪フ、按針獨リ脱シテ歸リ、變ヲ報ズ。

本文ハ外交志稿ニ據ル、然ルニ藩翰譜ノ有馬家譜、台徳院殿御實記、當代記ニ、我船阿媽港ニ泊セシ、我水手等土人ト争論ヲ起シ、七十餘人ヲ殺ス、シノニヨリ、(商人頭)カビタン(船長)等大ニ怒リテ本邦人三百餘人ヲ焚殺シ、悉ク貨物ヲ掠奪ス、其内三人僅ニ免レテ歸ル、阿媽港人此脱歸セル者アルヲ知ラズ、其船長崎ニ至ル云々トアリ。

是ヨリ先、元和九年、長谷川ヨリ占城ニ贈リタル書翰ハ、和漢三才圖會卷十四ニ見ユ。

此事一時ノ争論ニ起ルト雖モ、其實ハ葡人ガ我船ノ占城地方ニ至リテ自ラ貿易ヲナスヲ嫉憎スルニ基ヅクナリ。此鬭争アリシヲ以テ、翌年媽港年寄ハ幕府ニ向ヒテ、



日本人ノ其地ニ渡航スルヲ禁ゼン<sup>ト</sup>ヲ請願ス、蓋シ再ヒ事ヲ生ズルヲ恐ルレバナ  
リ。家康其請求ヲ容レテ承認狀ヲ與フ。

日本人天川津へ寄船候ニ付、其處迷惑候由、尤ニ候於其儀者、堅令停止了、若於背此  
旨者、如其地法度、可致成敗者也。

慶長十四年七月廿五日 家康 朱印

天川港年寄中

天川港年寄トアルハ同港ノ市長ノ如キモノニテ(但シ一人ニ限ラズ數員ヲ置ク)、  
葡語之ヲ「レアルセナドール」ト云フ、即チ王國貴紳ノ義ニシテ、同港ニ於テ公選セ  
ラル、所ノ公職ナリ。下ニ載スル幕府ノ返書中知府事トアル亦同シ。

家康ハ彼ノ請求ニ依リ、已テ得ズ此承認狀ヲ與ヘタルモノニテ、蓋シ心ニ不快ヲ感  
シタルナラン。此時恰モ葡國ノ一船媽港ヨリ長崎ニ來ル、家康乃チ有馬晴信ニ命  
ジテ前年ノ警ヲ報ゼシム。晴信自ラ兵ヲ率非テ長崎ニ至リ、葡船ニ迫ル、彼大砲ヲ發  
シテ我數船ヲ壞ル、我兵力戰シ、火ヲ敵船ニ放ツ、火彈藥庫ニ入りテ其船忽チ破裂シ、  
乗員二百餘人皆ナ沈死ス。船ノ長サ四十八尋、廣サ十八尋、船中ノ貨物概チ燒沒ス。我

兵死スル者僅ニ十餘人ニ時ニ慶長十四年十二月九日、實ニ日本ノ歐人ト交戦ス  
ルノ始ニシテ最モ記憶スベキノ一事件ナリ。

其後二百餘年文化年間蝦夷地ノ邊寇アリ。後又五十餘年文久年間下ノ關并ニ  
鹿兒島ノ外寇アリ。何レモ小關ニ過キザレドモ、是ヲ日本人ト歐人トノ交戦ト  
ナス。

晴信則チ外船擊沈ノ狀ヲ報ズ、前將軍家康、大將軍秀忠厚ク其功ヲ賞ス。其後媽港ノ  
使者、東魯直來リ、書ヲ呈シ、曲直ヲ爭ヒタレ、遂ニ辭屈シテ罪ヲ謝ス、依テ媽港人ノ  
長崎ニ在ル者ヲ悉ク使者ト共ニ還リ去ラシム。是ニ於テ、我國ト媽港トノ貿易大ニ  
衰退セリ。其後十二年、元和七年ニ至リ、媽港ノ年寄使ヲ遣シ、書ヲ執政土井利勝ニ  
贈リテ荷蘭船ノ平戶海口ニ横行スルヲ制止シ、且ツ生糸ノ強買ヲ禁ゼン<sup>ト</sup>ヲ請フ、  
其譯文左ノ如シ。

乍恐一書申上候、然は去年以使札御禮申上候處に、上様へ御懇の御取成故、御  
服など拜領仕、外聞と申、忝次第奉存候、殊更御手前様より御懇の御書被下候、拜見  
致し、皆々辱奉存候、當年も使札進上候、就夫先年は黒船渡申候へ、其近年はオラソ

〔媽港トノ交渉〕



ダのバ<sup>(譯音)</sup>ハ<sup>(譯音)</sup>ン舟十三艘海中にうかめ居申候に付て、大黒船は不罷成、小舟にて渡り候、何共迷惑仕候間、ねなじくはバ<sup>(譯音)</sup>ハ<sup>(譯音)</sup>ン舟平戸に不召置候様に被仰付被下は、忝可存候、オランダはバ<sup>(譯音)</sup>ハ<sup>(譯音)</sup>ン計仕候に付て、餘國には置不申候故、平戸に居申候、又白絲なども近年はをしがい申候様に嚴成、迷惑仕候、右之通被聞召分候様に天川中奉仰候、恐惶謹言、

酉六月廿五日

天川 年寄 三人

土井大炊頭殿

執政之ニ返書ヲ贈リ、照會ノ事ノ如キハ既ニ國法ノ禁制スル所ナルヲ答フ

日本國臣大炊助藤原利勝、報章天川港知府事三員、披芳帖窺來意、眷々之志趣已見于辭矣、使節來謁、諸臣相與奏吾日本國主大樹源君、而面禮肅爾、去歲之來使蒙恩榮、而歸鄉各滿懷、尤珍重、抑黑船之渡海、先是雖無寇警之妨、至近年者、賊船數艘相浮于海上、大船之往來不任其心、并白絲之賣買及押奪之示諭、日本近々之海上者、依國主之命、堅制止海寇矣、付市易之利潤、宜任商主之心、聊不可成非義之趣、先制已嚴重也、國中爭有違犯輩、哉、莫訝、餘付使節之口陳矣、不備、

元和七歲在辛酉九月

大炊助藤原利勝

媽港トノ貿易ハ尙ホ斷續ノ間ニアリシガ寛永年間幕府ガ鎖國ノ政略ヲ執ルニ及  
ンテ終ニ全ク跡ヲ絶テリ。

媽港ノ言語中日本ト相類似セルモノアリ、飯ヲこめト云ヒ、水をあこ(あか)ト云  
フガ如キ是レナリ、語原或ハ同一ニハ非ルカ。

〔外國渡航ノ禁止〕

邦人ノ域外ニ對スル勢力ノ旺盛ナルニ當リテヤ、薩摩國主島津家久(前名忠恒)ハ琉  
球ヲ征シテ其王ヲ擒ニシ、原城主有馬晴信ハ呂宋船ヲ撃テテ之ヲ沈ム(並ニ慶長十  
四年)此頃又西南ノ諸侯類ニ大船ヲ製造ス、家康其竟ニ自家ノ爲ニ利ナラザルヲ慮  
リ、有司ニ命ヲ五百石以上ノ軍船ヲ檢シテ之ヲ政府ニ收メ、以後諸藩ヲシテ五百  
石以上ノ船ヲ造ルコト得ザラシム、寛永十三年耶蘇教ヲ嚴禁シ、其徒ヲ國外ニ逐ヒ、  
我商船ノ外航ヲ禁ズルニ至リテ、大船ヲ禁益ス、嚴ナリ、我船舶ノ年來支那、安南、暹羅、  
東埔寨、媽港、呂宋等ノ諸國ニ至リテ貿易シタル者ヲ悉ク抑止シ、長崎長官末次平藏

〔國外渡航ノ禁止〕



ノ如キ海外密商ノ事露ハレ、延寶四年(二千三百三十四年)末次父子ハ隱岐島ニ流サレ、屬吏三人長崎ニ於テ磔刑ニ處セラレ、其幼子モ皆ナ死刑ニ處セラル。此前後海外貿易ノ禁ヲ犯シテ刑ニ處セラレタル數人アリ(歐米ノ部參看)。爾來諸國ヨリ屢バ通商ヲ求ムレド、徳川幕府ハ斷乎トシテ之ヲ許サズ、爲ニ西南洋諸國トノ貿易遂ニ絶ユルニ至リタルハ、眞ニ遺憾ニ堪ヘザルナリ。

### ○大洋諸島ニ於ケル日本人ニ征略ニ探檢ニ移住。

#### 〔琉球征略〕

琉球三十七島ハ薩摩ノ南海二百里ノ處ニアリ、一名ヲ南島或ハ沖繩島ト云フ。始テ日本ニ通ゼシハ、推古天皇廿四年(皇紀千二百七十六年)ニシテ、其後屢バ朝貢シタルヲアリ。保元年間(千八百十年代)源爲朝(鎮四八郎)其敵黨平氏ノ爲ニ伊豆ノ大島ニ放タル。後數年永萬元年(千八百廿五年)爲朝喜界島(一名鬼ガ島、此邊大小十餘島ヲ支那人ハ小琉球ト稱ス(イ)ニ渡リ、其地ニ住セル熊襲ノ遺族ヲ征服シテ之ヲ占領シ、尋テ琉球ニ至リ、後六年嘉應二年其地ニ自殺ス。爲朝曩ニ大里按司ノ妹ヲ納レ、一男一女ヲ生ム、其男文治三年(千八百四十五年)ニ至リ、天孫氏廿五世ノ王ヲ弑セル利勇ヲ誅シ、遂ニ立チテ琉球王トナル、之ヲ舜天王尊敦トス。舜天王ノ孫義本ニ至リテ王位ヲ天孫氏ノ裔ナル英祖ニ禪リ、其後文明年間(二千百三十年代)王統再ヒ舜天王ノ裔ナル尙圓ニ歸セリ。

舜天王ノ事ハ支那人ノ著書ニモ記ス、中山傳信錄ニ曰ク「舜天日本人皇後裔大



里按司朝公男子也、淳熙七年庚子年十五、續弘簡錄ニ曰ク「宋淳熙十四年舜天即王位、舜天爲朝公之男子、未詳何許人。」

是ヨリ先、文中二年(二千三十三年)中山王察度時ニ琉球亂アリ分レテ中山、山南、山北ノ三國トナリ、永享元年(二千八十九年)ニ至リ復タ一統ス、使ヲ支那ニ遣シ、始テ其(明ノ太祖)ノ封冊ヲ受ク、是ヨリ琉球ハ日本支那兩屬ノ形ヲ存ス。應永廿三年(二千七十六年)中山王尙巴志聘使ヲ足利大將軍ニ送り、爾來屢、使ヲ遣シ入貢ス。嘉吉元年(二千百一年)足利大將軍島津氏ニ琉球ヲ加封ス、琉球ハ仍ホ支那トノ關係ヲ絶タズト雖モ應仁以後(二千百廿年代)琉球王連年薩摩ニ聘問ス。文明三年(二千百三十一年)足利大將軍島津氏ノ請ニ依リ、内地船舶ノ擅ニ琉球ニ往來スルヲ禁ズ。文龜十三年(二千百七十五年)備中人三宅國秀琉球ヲ襲ハント欲シ、兵船十二艘ヲ率井テ坊津ニ至ル、島津氏之ヲ聞キテ大ニ怒リ、幕府ニ聞シ之ヲ撃ツ。豊臣秀吉ノ興ルヤ、部下龜井茲矩(津和野藩主ノ魁)琉球ヲ奪ヒ取ラント請ヒ、命ニ依リテ琉球守ト稱ス、舟糧ヲ給セラレテ出發ス、海路通ゼズシテ止メ歸ル。其後島津氏使ヲ以テ其來聘ヲ促ス、琉球聽カズ(一ニ文錄征韓ノ役琉球糧食ノ輸送ヲ關クヲ以テトス、今島津藩屆書ヲ

取ル)島津氏因テ慶長十四年琉球ヲ征シ、國王尙寧ヲ擒ニス、爾後薩藩大ニ治權ヲ其國ニ行フ、然レモ琉球仍ホ密ニ支那ニ通ス。(一)維新ノ後ニ至リテ、政府ハ琉球ヲ以テ藩ト爲シ(明治五年)後又藩ヲ廢シテ沖繩縣ト爲ス(十二年)當時支那政府ノ大ニ異議ヲ唱へ、偶々東洋ニ來遊セル米國、グラントノ參與ヲ煩シタレモ、尙ホ熟議ニ至ラザリシニ拘ラズ、今ヤ名實共ニ我版圖ニ入レリ(臺灣ノ條參看)。

琉球ノ地タル歴史上ヨリ云フモ、地理上ヨリ云フモ、我版圖タルヘキモノニシテ、一タヒ機ヲ失フトキハ、復タ恢復ヲ期スヘカラズ、其樺太ノ轍ヲ陷マザリシハ、實ニ幸ナリト謂フベシ。

琉球ノ略史、風俗、處分始末、支那ノ關係、グラントノ周旋ハ余ガ所著「琉球事件」ニ載ス、就テ看ルベシ。

〔小笠原島ノ發見〕

小笠原貞頼ガ伊豆ノ南海ニ無人島ヲ發見シテ之ヲ日本ノ版圖ニ入レ(其名ヲ取リテ小笠原島ト名ツケラル)タルハ文祿三年(二千二百五十四年)ニアリ、即チ西曆千五

〔小笠原島ノ發見〕



百九十四年ニシテ濠洲ノ全陸ノ未タ歐洲ニ知ラレザリシ時ニアリ其功寔ニ偉ナリト云フベシ唯惜ムラクハ尙ホ南方ノ大洋ニ進ミテ濠洲其他大洋洲中ノ土地ヲ占取セザリシヲ。

小笠原貞頼ハ故ノ信州深志城主長時ノ曾孫ナリ徳川家康ノ幕下ニ屬シ小田原ノ陣ニ從ヒ戰功アリ其後征韓ノ役ニ軍檢使トシ渡韓シ文祿三年ニ歸陣シ肥前ノ名古屋ニ到ル家康則チ豊臣秀吉ニ謂テ曰ク貞頼數度ノ軍功アリト雖モ今ヤ國內ニ封スベキノ地ナシ宜シク無主ノ島嶼ヲ探ラセ之ヲ彼ニ領セシムベシト秀吉之ヲ聽ス家康依テ貞頼ニ航海免狀ヲ與フ貞頼深ク喜ビ名古屋ヨリ發船シ其年七月廿六日八丈島ノ東南ニ方リ數島ヲ發見ス貞頼全島ヲ跋涉シ木標ヲ島中兩處ニ建テ我版圖タルヲ表ス其ニ曰ク――

日本國天照皇太神宮地島長源家康公幕下小笠原正四位少將民部少輔源貞頼朝臣

貞頼歸リテ該島探檢ノ始末及ヒ其地ノ形勢ヲ詳述ス家康之ヲ嘉シ秀吉ニ稟ス秀

吉亦深ク貞頼ガ勇敢ト偉功トヲ賞シ群島永ク貞頼ノ所領タルベキノ親書ヲ授與シ家康之ニ小笠原島ノ名ヲ與フ。其後貞頼屢バ小笠原島ニ渡リ寛永二年(二千二百八十五年)又赴キテ拓地植民ノ計畫ヲナシ遂ニ病ニ罹リテ歿ス。

是ヨリ先元和六年伊豆ノ代官佐野平兵衛今宮總左衛門芝山小兵衛命ヲ承クテ南海諸島ヲ巡視ス今宮八丈島ニ留ルヲ三年島中ニ歿ス此時ノ巡視モ蓋シ八丈小笠原諸島ノ間ニ止リシナリ。延寶三年(二千三百三十三年)伊豆ノ代官伊奈兵右衛門前年紀州ノ船人が無人島ニ漂着シタルヲ聞キ唐制ノ船ヲ造リテ其島ニ至リ珍禽奇木ヲ得テ歸リ之ヲ幕府ニ呈ス。

貞頼ノ子長直父ノ志ヲ繼キテ拓植ノ業ヲ成サント欲ス偶々海外渡航ノ禁令出デタルニ由リ遠洋出船ノ許可ヲ得ズ小笠原島ハ終ニ無人島或ハ異無人島ノ稱ヲ得ルニ至ルハ外人亦之ヲ「ブニン島」又ハ「ボニン島」ト稱ス。長直ノ孫宮内貞任ハ當時所謂浪人タリハ享保十五年(二千三百九十一年)ノ頃官許ヲ得テ島地ニ航シテ歸ラズ或ハ云フ其舟覆没シタルヲラント。

天保九年(二千四百九十八年)無量壽寺ニ住スル奥州ノ僧某無人島渡海ヲ企テ同志ヲ



募リテ幕府ニ請ハントス、之ヲ密告スル者アリ、譴責セラル(同時渡邊登、高野長英亦海外ノ事ヲ言フヲ以テ罰セラル)。

小笠原島ノ事歴并ニ歐米人トノ關係ハ小笠原島要覽、日本近事紀事、小笠原島誌纂(島鹿版)ニ載ス。

### 〔グアム島ト日本民族〕

往古、日本人ガ東京灣ヲ距ルコト一千餘哩、即チ小笠原列島ノ東南四百餘哩ノ間ニ散布セル北太平洋、マリアナ群島中ノグアム島ニ渡リタルコトアラシク同島ノ土人、シヤモロ民族(西班牙人及ヒ土人自己モ斯ク稱呼ス、元來西班牙語ニシテ坊主頭ノ義ナリ、往時ノ土人ハ短斷髮多カシヨリ此稱アリ)ノ骨格容貌等日本人ニ類スル者アリ、且ツ土人中ニ奇ナル傳説ヲ存ス、曰ク『我等、シヤモロノ住居セル此島ハ上古無人ノ地ナリシニ、神人アリテ、アツボン國(日本ト云フ轉訛土音ニシテ猶ホ歐米人ノ「ジャパ」ニ於ケルガ如シ)ヨリ降臨ス、其夫婦ヨリ子孫繁殖シテ此民族ヲナセリ。我等、マリアナノ「シヤモロ」ハ、アツボン國ヨリ降臨セル神人ノ胤裔ナリ、我等ガ先祖ハ「アツボン」

神ナリ。』此口碑ハ現ニ數多ノ土人ノ傳フル所ニシテ、且ツ口碑ニ止マラズシテ、西班牙人ノ著書中ニモ之ヲ載スルモノアリテ同島ニ秘藏スト云フ(「グアム島」實檢誌の著者田代某ガ親シク聞ク所)。此ハ往古ヨリ土人間ニ流布セルモノカ、將タ外客ノ流説ナルカ、其詳ナルコト得テ知ルベカラズト雖モ、眞ニ奇聞ト云フベシ。而シテ此説タル強チ荒唐不稽トシテ抹殺シ難シ、何トナレバ古來日本トノ關係甚ダ多ク、近クハ慶應三年(二千五百廿七年、西一八六七年)、日本人二十名此島ニ漂着シ、内一名ハ死亡シテ、其墓碑同島内ニアリ、餘ノ十九名ハ四年間此地ニ住居シテ、土人ニ米作等ノ事ヲ傳授シ、内一名ハ土婦ト結婚シテ、小笠原島ニ赴キタルコトアリ、且ツ其前日本人ノ「グアム島」ニ漂着シタル者一二ニ止ラザルベクレバナリ。

土人「シヤモロ」民族ノ風習ノ我ニ似タルハ、長上ノ者ニ對シテ敬禮スルニ、我日本人ノ如ク、俯拜ヲナスコト大抵相似タリ。又農業上ニ於テモ、米作、水田ノ制、插秧耕耘ノ方法、農具及阡陌ノ狀況等日本風ニ彷彿タリ、是ハ數十年前漂着ノ日本人ヨリ傳習ヲ受ケタルコト、土人自ラ云フ所ナリ。又器具ヲ見ルニ、土人ノ使用スル臼、杵、櫛、魚網等能ク日本風ニ類似スト云フ。



南洋ヲ巡檢シタル田口某ノ説ニモ、グアム島ニ住スル「チヤムロ」(又「シヤモロ」)人種ハ其骨格容貌等殆ド日本人ニ類シ、日本人ニシテ始テ此島ニ至ル者ハ、日本人ガ斯ル島ニ住スルカトノ感ヲ起サシム。其色ハ日本人ヨリ稍ヤ淺黒シ、又唇モ淺黒色ナルガ如シ、此島人ハ日本人ヲ以テ其先祖トナスト云フ。言語ハ日本語ニ類スルモノハ無ク、唯群島中ノ「バラオ島」ニテ用ウル米ト云フ語ハ日本語ト同一ナリト。

〔布哇島ト東洋人〕

我日本ト米洲トノ中間ニ位セル布哇島、即チ「サンドイッチ」群島、モ亦東洋人ト幾分ノ關係ヲ有セルナラン。天保三年(西一八三二年)日本船布哇國「オーホー島」ニ漂着ス、布哇人ハ日本人ヲ見テ、其容貌風俗ノ已ニ類似スルヲ識リ、我等布哇人ハ亞細亞洲ヨリ渡來セシハ明白ナリト云ヘリ。布哇土人ノ相貌、骨格、性質、舉動ノ能ク東洋人ニ近似スル者アリ、古事神談亦互ニ相似タル者アリ、言語モ相似タルモノアリ、則チ土人ハ洞穴ヲあなト云ヒ、岡丘ヲまおかト云フガ如キ是ナリ。

徳川幕府敗滅ノ際、其一族布哇、ニ移住セ、ト之ヲ新政府ニ内請シタルニ許サレズ(勝安芳ノ直話)、蓋シ新政府ハ尙ホ顧慮スル所アリテ之ヲ放任スルノ勇氣ナカリシナリ。

〔臺灣島ト日本國〕

更ニ眼ヲ西南ニ轉シテ觀察スルニ、我琉球ノ八重山、宮古諸島ニ連接シテ支那ノ南海ニ蟠屈セル臺灣島ニモ、近古通商ノ盛ナリシ頃、日本人ノ往來シタル者少カラズ、當時邦人其地ヲ呼ンテ「タカサゴ」ト云ヘリ。臺灣ノ口碑ニ云フ、日本人始テ臺灣ニ至リ、其地形ノ日本、播州高砂浦ニ酷ダ相似タルヲ見テ、竟ニ該島ヲ「タカサゴ」ト名ケタリト。又單語モ我ニ同キモノアリ、神ト長上ヲかみト云ヒ、目ヲめト云フカ如キ是ナリ、然レモ言語ノ順序ハ全ク相反ス。

土人自ラ其地ヲ「バクア」ト稱ス、西人ハ之ヲ「フォルモサ」(Formosa)ト稱ス、美麗ノ義ナリ、往昔西班牙ノ航海者島邊ニ至リ、森林鬱蒼トシテ、山嶽ノ風景描クガ如キヲ稱シテ、此名ヲ下セリト云フ。

〔布哇島ト東洋人〕 〔臺灣島ト日本國〕



豐臣秀吉、原田孫七郎ノ説ヲ用井、呂宋太守ノ入朝ヲ促ス爲ニ、文祿二年（二千二百五十三年）再々原田ヲ呂宋ニ派遣ス（原田ノ條ニ詳ナリ）其途次臺灣ニ寄ラシメ、一書ヲ贈ル、其意朝鮮征伐ノ餘威ヲ示シテ我ニ歸服セシメント欲スルニ在リ（其頃呂宋并ニ朝鮮ニ贈リタル書ト文意相同シ）。

夫日輪所照臨、至海岳山川草木禽虫、悉莫不受他恩光也、予際欲處慈母胞胎之時、有瑞夢、其夜已日光滿室、室中如晝、諸人不勝驚懼、相士相聚占筮之曰、及壯年、輝德色於四海、發威光於方方之奇異也、故不出十年之中、而誅不義、立有功、平定海內、異邦遐陬嚮風者、忽出鄉國、遠泛滄海、冠蓋相望、結轍於道、爭先而服從矣、朝鮮國者、自往代於本朝有牛耳盟、久背其約、况又予欲征大明之日、有反謀、此故命諸將伐之、國王出奔、國城付一炬也、聞事已急、大明出數十万援兵、雖及戰鬪、終依不得其利、來勅使於本邦肥之前州、而乞降、絲之築數十个城營、收兵於朝鮮域中慶尙道、而屢決真偽也、如南蠻琉球者、年々獻土宜、海陸通舟車、而仰我德光、其國未入幕中、不庭之罪彌天、雖然不知四方成莫、則非其地疎志、故原田氏奉使命而發船、若是不來朝、可令諸將攻伐之、生長萬物者日也、枯渴萬物亦日也、思之不具、

文祿二歲星集癸巳十一月初五日

日本國 前關白

印

高山國

「高山」ハ即チ「タカサゴ」ナリ。此書華族前田氏ニ傳フ、而ノ其文學傳ノ異國日記ニモ載スレバ、此僧ノ草スル所ナラン。印ハ方三寸九分五厘、篆書ニテ豊臣ノ二字アリ、用紙ハ鳥ノ子ノ厚キモノニテ、堅一尺七寸六分、横五尺二寸二分、表面ニハ金銀泥ニテ全面ニ櫻花ヲ畫キ、裏面ニハ銀ノ薄ヲ散セリ。

原田ガ此使命ヲ如何ニシタルヤハ傳ハラズ、思フニ或ハ臺灣ニ至ラザリシナラン、然ズンバ當時臺灣ニ駐在官ナク、土人未開ニシテ此書意ヲ解スル者ナキニヨリ、或ハ之ヲ與フルニ由ナクシテ齎シ歸リシナラン（此書現ニ我國ニ在ス）。

西人ノ説ニ據レバ、一五九九年（慶長四年）頃、即チ明代萬曆ノ中ゴロニ當リテ海盜顏思齊ナル者アリ、日本人ト同盟シテ共ニ臺灣ヲ侵略ス、ト云フ支那人ノ記ニモ「天啓元年、漢人顏思齊爲東洋國甲螺、引倭屯於臺」トアリ（甲螺ハ嶺南首長ト云フガ如シ海

〔臺灣島ト日本國〕



外異傳ニ邦語ノ「カシラ」ナリト云ヘリ、明ノ天啓元年ハ我元和七年、西曆千六百廿一年ニ當リ、其間凡ソ廿年ノ差違アレモ、共ニ同一ノ事ヲ指シタルヤ疑ナシ（濱田彌兵衛ノ事ハ下ニ記ス）。

外交志稿ニ慶長四年十一月、臺灣ヨリ人ヲ（日本ニ）遣シ、貿易ヲ乞フトアレモ、其事詳明ナラズ。又清人ノ蓉州文稿ニハ、此時ヲ以テ支那人ノ臺灣ニ居ルノ始トシ「明萬曆間、海寇顏思齊踞臺灣、有其地、臺灣有中國民、自思齊始」ト記セリ。

一説ニ「我元和六年（西一六二〇年、支那明ノ末、日本ハ臺灣ヲ占有セシニ、日本往來ノ荷蘭人ハ貿易ノ中繼場トナサン爲ニ、臺灣ノ一部ヲ得テ日本ニ求メタレモ、日本ハ之ヲ許サズ、蘭人依テ更ニ一策ヲ按シ、我々ハ敢テ廣キ土地ヲ望ムニアラズ、唯僅ニ牛皮一枚ノ大サホドノ土地ヲ得バ則チ足レリト、因テ日本ハ之ヲ許シタルニ、蘭人ハ狡猾ニモ牛皮ヲ割キテ長キ絲トナシ、其絲ヲ以テ取巻クダケノ土地ヲ領シタリ」ト云フ。此説ハ佛人ノ著書ニモ見ユト云ヘドモ、信ズルニ足ラズ、何トナレバ當時域外ニ於ケル勇敢ノ日本人ガ甘ンシテ此等ノ喘着手段ニ乗ルベクモアラザレバナリ。或ハ此事ヲ以テ、蘭人ガ臺灣生蕃ノ無知ニ乘テ土地ヲ欺キ取リタルノ手段トナシ、又或ハ此事ヲ以テ媽港ニ有

リタル事トナス又、海寇始末ニハ、永祿七年（一五六四年）西班牙人ガ呂宋ヲ取リタル時ノ事トナセリ。是レ果シテ何レノ地ニ有リタル事ナルヤ知ルベカラズ、斯ク其有リタリト云フ土地ノ一定セザルヲ見レバ、或ハ事實ナクシテ、一ノ構造説ニ過キザルモ亦知ルベカラズト雖モ、呂宋ノ出來事ナリト云フノ説眞ナルニ似タリ。

明人鄭芝龍慶長十七年長崎ニ來リ、幕府ニ雇ハル、平戸ノ人田川某ノ女ヲ娶リ、寛永元年子福松ト七左衛門ヲ生ム、其後芝龍臺灣ニ至リ、顏思齊ノ黨ニ入ル、顏死スルノ後、芝龍之ニ代リテ首長タリ、明ニ仕ヘテ平國侯ニ封ゼラル、七左衛門ハ長崎ニ留リ、福松ハ亦田川氏ト共ニ明ニ至リ、朱姓ヲ賜リ、成功ト改メ、御營中軍都督ニ任ゼラル、是ヨリ世人呼ンテ國姓爺ト云フ、田川氏モ亦國夫人ニ封ゼラル、尋テ芝龍清人ニ降ル、清兵ノ泉州城ヲ陷ルヤ、田川氏憤然自ラ到レテ死ス、清人驚歎シテ曰ク、婦女尙ホ然リ、倭人ハ勇知ルベシト、成功援兵ヲ日本ニ乞フテ成ラズ、時ニ蘭人隙ニ乘シテ臺灣ニ占據ス、寛文元年（一六六一）成功兵ヲ率井テ至リ、其地ヲ復ス。此年明主執ハレテ清將ノ手ニ歿シ、明亡テ、成功憤慨病ヲ得テ翌年死ス、年三十九、其子經仍ホ臺灣ニ據リ、孫克塽ニ至リテ遂ニ清兵ノ爲ニ滅サル。日本婦人ノ國外ニ功名ヲ顯



シタル者ハ蓋シ田川氏ヲ以テ最トス、故テ以テ我邦劇場ニ演シ入口ニ贈矣  
ス。

「臺灣ノ基隆キリン又雞籠キリント書ス」ヨリ淡水ノ間ニハ、往時日本人西洋人ト共ニ住居シタルヤ疑ナシ、現ニ土人ノ着スル上衣ハ我昔時ノ陣羽織ニ異ラズ、聞ク我慶安年間（西一六五〇年頃）荷蘭人ノ東洋貿易最モ盛テ極メシト、臺灣ノ南部ニ在勤セシ荷蘭ノ駐留官ハ毎年地方ノ大會ヲ開キシガ、其集會ノ終ニ於テ、各部落ノ軍卒ノ最モ功勞アルモノニ日本ノ笠ト軍衣トヲ賞與スルノ例アリ、此賞與ヲ得タル者ハ無上ノ榮譽トシタリト云フ。今日生蕃ノ用ウル陣羽織ノ如キモ、或ハ其頃ヨリ傳ハリシモノニハ非ルカ（ル）。

明治ノ初年、琉球及ビ備中ノ人民臺灣ニ漂着シ、土民ニ殘害セラレ、因テ此ヲ名トシテ、明治七年ニ日本軍臺灣征伐ノ事アリ。此時日本ノ國旗ヲ其地ニ樹テタルガ、爾來日本ノ風化ニ從ヒ、今日ニテモ家々ニ日本ノ國旗ヲ立ツルノ風殘レリト云フ（ナ）。明治七年臺灣征討ノ役ハ實ニ文祿征韓以來日本軍ノ外征ニ係ル（島津氏ノ琉球征服ハ姑ク之ヲ例外トス）。陸軍中將西郷從道都督トシテ鹿兒島ノ壯兵ヲ率井テ蕃

地ニ進撃シ、悉ク蕃人ヲ征服ス。此役ヤ實ニ已テ得ザルニ出デタリ、征韓論ノ破裂以來世上紛々、將ニ不測ノ變ヲ生ゼントス、是ニ於テ議者以爲ラク、寧ロ其氣焰ヲ外國ニ洩スニ若ズト（那破命ハ、故智ニ做フノ意カ）乃チ遂ニ此外征師ヲ起セシナリ。是故ニ前後ノ計畫全カラザルアリテ、爲ニ外國公使ノ異言ヲ招キ、又支那政府ト葛藤ヲ生シ、同政府ハ臺灣ノ其所屬ナルコトヲ主張シタルニヨリ、僅ニ償金（七十餘萬圓）ヲ收メテ事務局ヲ結ビ、其地ヲ占領スルコト能ハズシテ退軍シタリ。此役ヤ實ニ五百人ノ生命ヲ失ヒ、七百萬圓ノ金ヲ費ス、得失相償フニ足ラズ、當時ノ執政者ガ輕卒此舉ニ着手シ、東洋ノ大計ニ至リテハ、却テ支那政事家ニ一歩ヲ讓ルガ如クナリシハ、頗ル慨歎ニ堪ヘザルナリ。現ニ「明治十二年、日光ニ於テ、米國前大統領、グラント」ガ支那政府ノ眞意ヲ語リテ云ク、臺灣征討ノ如キハ、既ニ支那ヲ侵凌シタリト思フノ狀ナキニアラズ、支那ハ日本ノ琉球占有ヨリシテ、又延イテ臺灣ニ及ハンコトヲ恐ル、支那ハ此等ノ諸島ヲ以テ、太平洋ノ貿易上欠クベカラザルハ、通路トナス、故ニ此等ノ諸島ヲ占領スルハ、即チ支那ノ貿易ヲ障碍スルモノナリトハ、是レ天津ノ總督李鴻章ノ余ニ陳述シタル所ナリ、蓋シ此論ハ自國ノ安寧ヲ企圖スル政事家ノ口ヨリ出ヅ



ト此一條ハ日本内閣諸員ノ尙ホ了解シ難キヲアラハシテ恐レ其子佐官グラント  
 傍ニ在リテ石筆ヲ執リテ琉球其他支那近海ノ線路ヲ畫シ以テ其貿易ノ盛衰ニ關  
 係アルノ理由ヲ精細ニ説明ス。當時支那政事家ガ慮リタル東洋貿易ノ關係ハ未  
 ダ我内閣員ノ深ク想ヒ及バザル所ナルガ如クナリシハ亦奇ト云フベシ抑モ我國  
 ノ臺灣ニ於ケル歴史上ノ關係頗ル深シトス之ヲ爲サズンバ則チ己ム苟モ之ヲ爲  
 スニ於テハ善ク謀リテ善ク斷ズル所ナカルベカラズ夫ノ征討軍ヲ出スニ當リテ  
 計畫其宜キヲ得テ且ツ斷行スル所アラバ之ヲ我版圖ニ入ルノ事敢テ爲シ難カ  
 リシニアラズ又此島ヲ領有スルノ國防上ト經濟上トニ大利アルヲ論テ待タザル  
 ニ既ニ一タヒ機ヲ失フ復タ如何トモスルヲナシ後ノ執政タル者深ク省察セザル  
 ベクンヤ。

臺灣征討ノ始末ハ之ヲ記スルノ書ニ乏シカラズ(日本近代紀事、征臺記事等)、  
 故ニ之ヲ諸書ニ讓リテ茲ニ其概略ヲ載スルニ止ム唯當時征臺ニ關スル内閣  
 ノ議ハ未ダ世上ニ詳明ナラザリシニ余ハ曾テ石川縣人某々ガ當時鹿兒島ニ  
 至リテ親シク桐野利秋ニ聞キタル談話ノ筆記ヲ得タルヲ以テ之ヲ左ニ録シ  
 其事實ニ相違セル所アリヤ否ハ固ヨリ之ヲ知ラザレモ併セテ柳原特命

全權公使ヘノ委任狀ヲ掲ゲ以テ此事實ヲ觀察スルノ便ニ供ス。

征臺論ノ始末 桐野利秋說話(別ニ征臺論ノ始末アリ今之ヲ畧ス)

征臺ノ事ハ其議ノ由テ起ル明治四年辛未ニアリ同年彼ノ土人琉球人ヲ暴殺ス  
 其頃支那福州在留柳原前光ヨリ此事ヲ鹿兒島縣ニ報告ス此時樺山資紀ハ鹿兒  
 島ニ在リテ此報ヲ聞キ直ニ熊本ニ來リ鎮臺在任ノ余(即チ桐野)ニ就キ征臺ノ兵  
 ヲ擧ケテ琉球人ノ怨ヲ霽サンコトヲ謀ル余モ亦之ニ同意シ共ニ熊本ヲ發シ東上  
 シテ臺灣問罪ノ事ヲ西鄉隆盛ニ質ス西鄉大ニ之ヲ然リトシ問罪論ヲ廟堂ニ出  
 ス廟議以爲ラク臺灣ハ支那ノ版圖ニシテ琉球ハ和漢兩屬ノ國タリ故ニ我ヨリ  
 琉球ノ爲メニ罪ヲ支那版圖ノ國ニ問フハ名義ノ得タルモノニアラズトテ之ヲ  
 拒ム因テ更ニ議ヲ起シ琉球ノ支那ニ於ケル唯正朔王位ヲ受クルノミ然ルニ我  
 日本ニ於ケル昔島津義久ノ彼國ヲ征服シタル以來百年貢聘絶エズ彼ノ人民保  
 護教育ノ事一切日本ニ於テ之ヲ處スルノ事實ヲ明ニシ以テ其兩國何レノ所屬  
 ト認ムベキヤヲ同盟各國ハ公使ニ諮問ス公使皆答ヘテ曰ク夫レ正朔爵位ハ名



ノミ保護教育ハ施政ノ實要ナリ、二者輕重厚薄判然タリ、是ニ由テ之ヲ觀レバ、琉球ノ日本ニ屬スル固ヨリ論ヲ待タズト、廟議乃チ一決シ、琉球王ヲ藩王ニ封シ、臺灣征討ヲ議決ス、實ニ明治五年ノ事ナリ、既ニシテ廟議又曰ク、琉球ヲ藩王トシ、征臺ノ兵ヲ擧グル、名義アリト雖モ、必ス先ツ之ヲ支那ニ謀リ、我カ征討ニ於テ支那政府ノ異議ナキヤ否ヲ質シ、然ル後出師ニ及ブベシト、因テ副島外務卿ヲ全權大使トシテ同國ニ遣シ、大婚ノ賀ヲ表セシム、時ニ明治六年三月ナリ、副島ノ支那ニ至ルヤ、婚儀ヲ賀シ、併セテ日本ノ琉球王ヲ藩王トセシ事、及ヒ臺灣問罪ノ師ヲ發スルノ事ヲ告ケ、以テ支那政府ノ議ヲ問フ、彼レ答ヘテ曰ク、臺灣南部ノ地未ダ我政令教化ノ及ハザル所、故ニ貴國ニ於テ其罪ヲ問ヒ、之ヲ伐ツモ、我ニ於テ異議アルナシト、副島歸朝シ、其旨ヲ復命ス、是ニ於テ廟議益ス、征臺ニ決シ、將ニ發令ニ及ブントス、然ルニ陸軍省ヨリ異議ヲ出シテ曰ク、征臺ノ事副島ノ支那ニ於ケル處置甚ダ粗略ナリ、斷乎タル應接アリテ、支那政府ヨリ我ガ征臺ヲ承認スル證書ヲ取リタルニアラズ、唯使命ノ傍談適マ之ニ及ビ、彼モ亦輕々聽過シタルモノ、如シ、然ルニ今輕擧兵ヲ起シテ之ヲ討ゼハ、彼レ之ヲ非トスルノ辭アリト、是レ大隈ガ

陸軍省ト密謀シテ此說ヲ爲スモノナリ、西郷之ヲ聞テ曰ク、嗚呼武官ニシテ此ノ如キ遲疑ノ言ヲ爲ス、何ソ其怯且ツ迂ナルヤ、夫レ兩國ノ大臣相對シテ談判スルモノ、證之ヨリ確ナルハナシ、彼亦人心アリ、何ソ反覆異言ヲナサン、假令ヒ彼レ其證書ナキヲ以テ違約スルモ、是レ自ラ曲ヲ負フテ直ヲ我ニ與フル者ナリ、我ニ於テ天幸トス、復タ何ノ憚ル所アラント、然レモ廟議固ヨリ征臺ヲ欲セザルヲ以テ、言ヲ左右ニ托シ、遂巡果サズ、以テ同年十月ニ至ル、是ニ於テ廟論一時征臺ノ擧ヲ緩クセンカ爲メ、之ガ辭ヲナシテ曰ク、朝鮮ノ事ハ征臺ノ事ヨリ重シ、宜シク之ヲ先ニスヘキガ如ク然リト、依テ西郷及ヒ余ハ此廟論ニ因テ大ニ征韓ノ議ヲ主張シ、自ラ使命ヲ乞フニ至リ、一時征韓ノ議盛トナリ、征臺ノ事ハ自ラ論ゼサルニ至ル、時ニ同縣人坂本某ハ西郷參議ノ辭職後、其舊所屬ノ選卒ヲ率非テ國ニ歸ランヲ欲スレトモ、一同辭スルノ名義ヲ得ス、因テ自ラ計ルニ、漫ニ征韓論ヲ主張シ、言納ラレザルヲ以テ、其去就ヲ決スヘシト、乃チ黒田開拓長官ノ家ニ往キ、面語シテ曰ク、僕ガ舊部下ノ者等征韓論ヲ主張ス、僕以テ至當トナス、因テ之ヲ建議シ、廟決ヲ仰カント欲ス、廟議若シ納ラレズンバ、部下皆ナ勤ヲ致シテ國ニ歸ラント欲ス、



願クハ足下爲メニ要路ニ就テ此事ヲ計レ、黒田曰ク、征韓ノ事ハ今日ノ急務ニアラズ、子未ダ樺太ノ動靜ヲ聞カズヤ、魯人ノ暴狀日ニ甚シ、政府爲メニ急ニ處スル所アラントス、征韓ノ事ノ如キハ即今之ヲ議スルニ暇アラスト、坂本ハ樺太ノ事既ニ平クト聞クモ、未ダ確説ヲ得ザルニヨリ、黒田ヲ辭シテ直ニ前外務卿ノ邸ニ至リ、面シテ樺太ノ事平クヤ否ヤヲ問フ、副島答フルニ既ニ平クノ事ヲ以テス、坂本奮然副島ヲ辭シ、又黒田ノ邸ニ至リ、其詐言己ヲ欺クヲ面折シ、罵詈頗ル極ム、黒田知ラザル狀ヲナシ、大ニ怒テ曰ク、吾開拓官ニ在リ、彼ノ地方ヲ管ス、彼地方ノ狀何ソ與リ知ラザルモノアラソ、而ソ吾眞ニ未タ此事既ニ平クヲ聞カズ、副島ノ言甚タ疑フベシ、今ヨリ共ニ副島ニ至リ、以テ其信否ヲ極メント、乃チ相伴フテ又副島ノ邸ニ至ル、黒田勵聲副島ニ云テ曰ク、吾開拓ノ職ニアリ、北海道内地ノ事與知セザルハナシ、而ルニ魯人ノ樺太ヲ暴掠スル事既ニ平クヲ知ラズ、足下既ニ其事平クト云フ、其義如何、副島從容トシテ答ヘテ曰ク、是レ余ガ外務在職ノ間自ラ之ヲ處裁スル所ナリ、足下ノ未タ知ラザル、余カ得テ知ル所ニアラザルナリ、黒田曰ク、足下既ニ之ヲ處裁セバ、何ソ其旨ヲ開拓官ニ告グザル、副島曰ク、是レ外務卿ノ

敢テ開拓官ニ告クベキニアラズ、余カ決裁スル所、既ニ之ヲ政府ニ上申セリ、足下政府ニ就テ之ヲ聞クベシ、黒田語塞リ憤懣措カズ、坂本ヲ顧テ曰ク、然ラバ則チ政府ニ出テ、其事ヲ糾サソ、坂本之ヲ諾ス、相共ニ副島ヲ去リ、正院ニ出テ、右大臣ニ面シ、其事ヲ質ス、右大臣曖昧確答ナシ、黒田亦敢テ之ヲ究極セズ、唯々トシテ將ニ退ントス、其狀陰ニ相結托シテ苟合密和スル者ノ如シ、是ニ於テ、坂本勃然黒田ヲ罵テ曰ク、足下何ソ副島氏ニ於テ陳スル所ノ言ヲ記セザル、今岩倉公ノ言曖昧不明、僕ニ於テ一ノ了スルナシ、而シテ足下唯々トシテ將ニ退キ去ラントスルハ何ソヤ、意フニ足下モ亦廟論ト、合シテ征韓ノ事ヲ阻マントスル者ナラント、激論奮聲、頗ル凌辱ヲ極ム、黒田汗顔答フルノ辭ナシ、左右ノ諸官吏黒田ガ爲ニ辨解ス、坂本其人々ニ問テ曰ク、樺太ノ事ハ實ニ既ニ平クヤ否、皆曰ク、既ニ平ク、坂本因テ機ニ乘シ、論ヲ轉シテ曰ク、樺太ノ事既ニ平ク、復タ憂フル所ナシ、願クハ廟論前參議五名ヲ復職セシメ、征韓ノ事ヲ果サソ、是レ僕カ舊部下ノ者一同ノ立論ニシテ、僕以テ至當トナシ、敢テ廟議ヲ請フ所ナリ、速ニ決セズハ、僕朝ヲ退ク能ハスト、其狀貌豪然トシテ殺氣色ニ見ハレ、將ニ右大臣ニ迫ラントスルガ如シ、舉朝爲ニ



危ム。右大臣意ヲ決シテ曰ク、前參議ハ各疾ヲ以テ職ヲ辭ス、之ヲ職ニ復ラシムル  
ヲ難シ、然リト雖モ、征韓ノ事ハ將ニ不日ニ發令セント、坂本意解ク、欣然トシテ曰  
ク、然ラハ則チ退テ發令ヲ待タント、乃チ筆ヲ探リ、右大臣演述ノ旨ヲ手記シ、之ヲ  
懷ニシテ退出ス、然ルニ坂本歸宿シテ其手記ヲ出シテ之ヲ讀ムニ、只廟議不日發  
令云々トノミテ、肝要ナル征韓ノ二字ヲ脱セリ、是ニ於テ坂本大ニ驚キ、他日ノ證  
トナスニ足ラザルヲ以テ、直チニ大久保參議ノ邸ニ至リ、面シテ曰ク、前ニ手記ス  
ルノ際、征韓ノ二字ヲ脱スルヲ以テ、今足下ノ目前ニ於テ其二字ヲ加書シ、以テ後  
日ノ證ト爲サン、大久保之ヲ聞キ、心竊ニ喜ビ、因テ給テ曰ク、子前ニ岩倉ト朝ニ於  
テ聞ク所ヲ以テ征韓ノ事トスルヤ、曰ク然リ、曰ク然ラズ、廟議近日發令スベキモ  
ノハ征臺ノ事ナリ、子ハ之ヲ誤聞シタルナリ、坂本之ヲ聞キ、且ツ驚キ、且ツ憤リ、反  
覆論究スト雖モ、大久保益ス辯シテ肯セス、坂本其事果スニ由ナキヲ以テ辭シテ  
舍ニ歸リ、翌日國分某ヲ誘ヒ、再ヒ正院ニ出テ、右大臣ニ就テ論追スト雖モ、右大臣  
ノ言亦大久保ニ同シ、坂本其脱字ノ故ヲ以テ、今ヤ言論遂ニ立チ難キヲ知り、自ラ  
其失ヲ悔ヒ、以テ論ヲ止ム、暫クシテ右大臣ニ問フテ曰ク、然ラハ則チ臺灣ノ舉、發

令ノ期何ノ時ニアルヤ、右大臣明年ノ春ヲ待チテ發スルヲ答フ、坂本乃チ筆ヲ探  
リ、委細ニ其旨ヲ手記シテ之ヲ右大臣ニ示シ、而シテ國府某ト共ニ退出ス、其後幾ク  
モナク、坂本ノ舊部下凡三百人一同辭職ス、時ニ陸軍大輔西鄉從道坂本ヲ招キ、竊  
ニ諭シテ曰ク、征臺ノ舉實ニ明年三月ニアルベシ、其時子ノ部下ノ者ヲシテ其役  
ニ充ツベシ、子宜シク之ヲ諭シ、部下ヲシテ尙ホ暫ク職ヲ奉セシムベシト、坂本答  
ヘテ曰ク、征韓ノ廟議決セザルニ於テハ、則チ職ヲ辭ス、是レ曾テ部下ノ共ニ誓約  
スル所ナリ、今ヤ其言ヲ踐マンノミ、然レモ征臺ノ事ノ如キハ亦敢テ努力セスン  
バアラズ、明年出師ノ期ニ臨ミ、再ヒ部下ヲ率井テ來會スベシト、西鄉大輔諭スニ  
言ナク、復タ之ヲ爭ハス、是ニ於テ一同職ヲ免サレ、坂本之ヲ率井テ鹿兒島ニ歸ル、  
而シテ今年(明治七年)三月ニ至リ、坂本自ラ出京シ、昨年ノ廟議ヲ促スヲ頻ナリ、政府  
已ムヲ得ズ、其言ヲ履ミ、匆率出師ノ舉アリ、然レモ其事世評ニ涉リ、論議囂々沸起  
スルヲ憚リ、只管沈密ニ之ヲ計畫セルモノナリ。



## 征臺談判ニ關シ清國駐劄特命全權公使柳原前光

ヘノ委任狀。

(カ)

明治四年十一月我琉球ノ民漂流シ臺灣ノ蕃地ヘ至リ土人ニ劫殺セラレ、者五十四名又六年三月我小田縣下備中淺口郡ノ住民佐藤利八等四名漂到シテ土人ノ爲メニ衣類器財ヲ掠奪セラル其暴ヲ爲スヤ如此其土人蕃域ヲ分チ嶋ヲ負ヒ暴ヲ恣ニスルヤ久シ然レモ清國ノ政權遠ハスシテ其化外自肆ニ任セシハ邇年米國政府ノ所行ニ因テ徵知シ且去年特命全權大使副島種臣ヲ清ニ遣シ換約ノ際曾テ此事ニ談シ及シ該國大臣ノ所答ニ據リテ證據判然タリ若シ弄テ問ハスノハ後患何ソ極ラン今膺懲ヲ行フ意ハ野蠻ヲ化シテ其民ヲ安ニスルニ在リ敢テ覺隙ヲ隣國ニ開クニ非ス公使トシテ清國ニ駐マルノ際論此事ニ及ハ、宜ク此意ヲ以テ答フベキ事

清國ノ政權蕃地ニ及ハサル如是蕃人ノ兇暴ヲ我民ニ加ル如是我今務テ安民ノ義ヲ行フ詎ソ他國ノ異議ヲ容レンヤ但蕃地ハ清國府縣ノ治ト接壤スルヲ以テ恐クハ干係ヲ生セン其尋常當務ハ我カ派遣スル理事官ノ責任ニ歸スト雖モ事

若シ重大ニ涉ラハ公使ノ職ニ據リ須ク關切辯論シテ始終兩國ノ和好ヲ保護スヘキ事

琉球藩ハ自古我控禦スル所ニシテ既ニ冊封ヲ奉シ政化ニ服ス其清國ニ貢キ以テ貿易ヲ營ムカ如キハ未タ舊套ヲ脱セス若故ニ縁テ或ハ疑議ヲ來サバ須ク該藩従前我ニ歸服スルノ證例ヲ辯明スヘシ事兩屬等ノ名ニ涉リ枝節ヲ生スヘカラサル事

臺灣ノ事ニ係リ以上各件ヲ訓諭ス若シ事情ノ意表ニ出テ至重ニ涉ラハ政府ノ指令ヲ請ヒ進止ヲ遵行スヘシ

(御璽)

明治七年四月八日

## 〔媽港呂宋等ノ地方ト日本人〕

西南貿易ノ盛ナルニ當リテ日本人ノ媽港ニ往來シタル者多キハ前媽港トノ交渉ノ條ニ記セルガ如シ。慶長十九年幕府畿内及ヒ西國ニ於ケル耶蘇教ノ寺堂ヲ燒



キ、其教徒ヲシテ改宗セシメ、改宗セザル者ハ之ヲ媽港ニ追放ス。此時攝州高槻城主高山南坊(入道。七萬石)、志州鳥羽城主内藤飛彈守如安(一萬七千二百石)、耶蘇教ヲ奉スルノ罪ヲ以テ、其封ヲ收メテ、京都ハ獄ニ下シ、細川越中守忠興(初丹後國主、後小倉ニ轉ス)ノ臣加賀山隼人佐前田利久ノ臣宇喜多久閑、品川右京、柴山權兵衛等、信教ノ徒男女百餘人ト共ニ之ヲ大船ニ乗シテ、媽港ニ送ル。翌元和元年、大坂城陥リシト、及ビ其後廿四年島原ノ亂平キシト、其殘黨媽港并ニ呂宋群島ニ逃ル、其數凡ソ三千餘人ニ及ベリ。此等ノ日本人ハ國外ニ出ヅルモ、本國ノ言語風俗ヲ守リ、呂宋群島ニ移レル南坊如安ノ如キ紳士ハ出入双刀ヲ挟ミ、鞍馬ニ跨リ、從者ニ長槍ヲ執ラシメ、儼然トシテ大名ノ態ヲ存セリ。其後海外トノ交通絶エタルヲ以テ、被追放者ノ消息ヲ得ザリシガ、七十年ヲ過キ、寶永五年(西一七〇八年)、天主教師羅馬人シロテト云フ者布教ノ爲ニ日本ニ來リ、大隅ノ屋久島湯泊村ニ上陸ス、シロテ日本服ヲ着シ、日本刀ヲ帶ビ、日本ノ貨幣ヲ携フ。翌年幕府之ヲ江戸ニ送致シ、新井君美(白石)之ニ應接ス、語次何レノ地ニテ日本語ヲ學ビ、日本ノ風俗ヲ習ヒ、日本ノ物品ヲ得タルヲ問フ、シロテ皆ナ呂宋在住ノ日本人ヨリ之ヲ受ケタルヲ答ヘ、且ツ呂宋ノ事情ヲ説キテ曰ク、

「ヤアパンサス(日本人)ノ子孫此國ニ住スル者三千餘人アリテ一部落ヲナセリ、其民族國風ヲ變ゼス、士人ハ刀槍ヲ執リ、其餘ノ者亦一刀ヲ帶フ、西班牙官吏之ヲ支配シテ妄ニ部落外ニ出ツルヲ許サズ、四年前此地ニ漂着シタル「ヤアパンサス」十二人モ同ク其部落内ニ入ラシメタリト(新井ノ著、西洋紀聞)ハ多ク此「シロテ」ノ說話ニ據リテ記セシモノナリ。今群島中ノ「ホーロー」島ニ住セル「ホーロー」人種ト云ヘルハ、其身幹骨格大ニ日本人ニ類シ、性質勇悍ニシテ、能ク利劍ヲ製シ、擊劍モ亦巧ナリ、故ニ西班牙人等之レヲ以テ往昔移住セシ日本人ノ後裔ナリト云フ者アリ、或ハ然ラゾ。

媽港ニハ往時日本人ノ建立セル寺院今ニ存シ、當時ノ遺民尙ホ住スルアリ、又安南ノ「ホンエン」地方、東埔寨ノ邊ニモ日本人ノ子孫現存スルモノ勘カラズト云フ。







〔始テ印度ノ臥亞ニ赴キ、耶蘇教并ニ製革法ヲ傳習シタル日本人〕

天文十二年(二千二百九年、西一五四九年)大和人了西(基利督教實記ニ「アンシラウ」名ハ了西トアリ)ト云フ者印度ノ臥亞ニ赴キ、天主教ヲ受ク、因テ伴天連(傳教師)ニ告ケ、其法ヲ日本ニ行ハントス、伴天連大ニ喜ビ、同十八年其弟子數人ヲ率井、了西ヲ先導トシテ九州ニ入ル。了西ノ歸ル、印度ノ製革ヲ輸入シ、并ニ其製造法ヲ傳フ、之ヲ「インヂヤ革」ト稱ス、後ニ訛リテ印傳革ト云フモノ即チ是ナリ。(イ)

臥亞ハ孟買ノ南ニアリ、葡萄牙國ノ屬地タリ、當時頗ル繁盛ニシテ、印度ノ羅馬ト稱ス、東洋ノ傳教通商ハ概テ此地ヨリセシ「猶ホ西班牙ノ呂宋ニ於ケルカ如シ。

華族大村家ノ秘録ヲ見ルニ「天文十二年ノ頃、和州ノ醫者種子島ニアルヲ誑シ、蠻國ニ連レ行キ、バテレンニ仕立再ヒ連レ來リ、密ニ法ヲ弘ム」トアルハ此事ナラン。

又荷蘭人「ケンフル」ノ日本記事ニ「一五四九年(天文十八年)日本ノ一壯士アリ、商船ニ乘リ、葡領ノ臥亞ニ至リテ、委ニ日本ノ事情ヲ述ベ、天主教ヲ開クノ難事ニ非ルヲ説キタレバ、セス、井「派」ノ教師「フランシス・サ・ホー」(Francis Xavier)

ハ其年ヲ以テ日本ニ至リ、布教ニ從事セリ」ト。歐南遣使考ニハ「了西ヲ以テ亡命シテ臥亞ニ至リシ者ト爲シ、而シテケンフル」ノ云フ所ノ壯士ハ了西ヲ指スナランカトアリ。又一八五六年米國政府刊行ノ書中ニモ類似ノ記事アリ「葡人「ピント」ガ日本ヲ發見セシ後七年、即チ一五四九年、日本人「ハンショラウ」ナル者罪ヲ遁レテ、臥亞ニ至リテ天主教ノ信徒トナリ、其地ノ商人ニ告グルニ日本トノ貿易ヲ營マ、バ大利アルヲ以テシ、教師ニ告グルニ宗教ノ弘メ易キヲ以テス、是ニ於テ葡國人ハ爲ニ臥亞ヨリ一船ヲ發シ、施物ヲ齎シテ日本ニ赴ケリ。此時宣教師「フランシス・ザビエル」等大友「氏」ノ領内ニ至リテ教法ヲ傳フ、是レ葡國人ガ弘教ト通商トヲ日本ニ專ラニシタル始ナリ云々。」又日本西教史ニ「鹿兒島人「アンゲル」ト云フ者アリ、富貴ノ家ニ生ル、性頗ル豪放ナリ、一五四三年(天文十二年)ノ頃、貿易ノ爲ニ同港ニ來ル、葡萄牙人ニ接シテ印度地方ノ事ヲ聞ケリ、後チ人ヲ殺シ、其地ニ居ル「能」ハズ、從者二人ト共ニ去リテ葡國商船ニ投シ、「マラッカ」ニ至リテ耶蘇教ヲ修メ、一五四八年三月廿日(天文十七年)葡領臥亞ニ赴キテ洗禮ヲ受ケ、「ポール・ド・サント」ト云フ法名ヲ與ヘラル、此人聰明ニシテ暫時ノ間ニ羅旬語ニ通シ、又聖書ノ馬太傳ヲ日本語ニ譯ス、臥亞在留ノ教師「ザビエル」ハ此人ヨリ日本ノ事ヲ聞キテ、始テ同國ニ天主教ヲ傳フルノ意ヲ決シ、教師二人、并ニ「ポール」及「ビ」既ニ信徒トナリタル其從僕二人ヲ伴フテ日本ニ到リ、共ニ傳教ニ從事シタリ」ト。蓋シ此ニ「アンゲル」ト云フ者ハ即チ「ハンショラウ」ニシテ、西洋字ノ「Hangeron」ヲ佛音ニテ讀ミ、「アンゲル」ト轉訛シタルナラ

〔始テ印度ノ臥亞ニ赴キ、耶蘇教并ニ製革法ヲ傳習シタル日本人〕



ソカ。又同書ニ千五百五十一年十一月即チ天文廿年傳教師ザビールガ豊後ヨリ歸國スルニ際シ、日本ノ信徒、ベルナル及ビ、マルチ、ユト、本名明ナラズ、ノ二人ヲ同行セシニ、マルチ、ユトハ、臥亞ニ死シタルヲ載ス、(歐米ノ部天文中日本人羅馬ニ至ル條參看)。

其後三十年天正九年、又印度ニ行キタルモノアリ。日本西教史ニ曰ハク、一五八一年、基督教信者ナル日本ノ一少年其主人ノ不滿ヲ蒙リテ大ニ落膽シ、去リテ印度ニ歸ル葡國船ニ投シテ、フ、アンダ國ニ至リ、暫ク同地ニ留リテ此野蠻國民ト貿易シ、一時、マホメット教ヲ奉ズ、後又葡國船ノ來ルニ遭ヒテ其地ヲ去ラントセシニ、國王ハ少年ノ、マホメット教ヲ廢スルヲ惡ミ、之ヲ抑留シテ糾問ス、少年今ハ耶蘇教信者ナルヲ堅ク主張シタルヲ以テ、官吏ニ毆打セラレ、又其喉ヲ扼シテ鐵鉤ニ懸ケラレタルト、竟ニ心ヲ變ゼズシテ絶息セリ、是レ現場ニ在リテ目撃シタル葡人ノ說話ニ係ルト。

〔原田孫七郎呂宋群島ヲ略取セント欲シ、策ヲ豊臣秀吉ニ進ム〕

近古西班牙王國ガ世界ノ各地ヲ領シテ其勢力ヲ振フニ當リ、其屬地ニシテ殆ド、日本ノ幅員ニ同シキ、呂宋群島ヲ略取セント企テタル原田孫七郎ハ性頗ル機智ニ富ミ亦膽略アリ、天正ノ初年、屢バ呂宋ニ往來シ、マニラニ住シ、西班牙語ニ通シ、西人ト交リ、深ク其事情ヲ察シ、以爲ヘラク彼ノ宗教ヲ以テ他國ヲ侵掠スルノ跡ヲ以テ見レバ、我呂宋ヲ取ルニ非ンバ、彼竟ニ我國ヲ奪ハント、乃チ太閤秀吉ノ好名心ニ投シ、遠征軍ヲ起サシメ、メント欲シ、日本ニ歸リ、其近臣ニ由リテ秀吉ニ勸說シ、呂宋太守ノ入貢ヲ促サシム、蓋シ太守ヲ激シテ事ヲ起サシメ、之ニ乘ツテ爲スコトアラント圖リシナリ。秀吉直ニ其說ヲ容レ、太守ニ書ヲ贈リ、入貢ヲ嚴命ス、其文左ノ如シ

夫吾邦百有餘年、群國爭雄、車書不同、軌文予也、際誕生之時、以有可治天下之奇瑞、自壯歲領國家、不歷十年而不遺彈丸黑子之地、域中悉統一也、繇之、三韓琉球遠邦異域、款塞來亨、今也欲征大明國、蓋非吾所爲、天所授也、如其國者未通聘禮、故先雖欲使群卒討其地、原田孫七郎以商船之便時來往、此故紹介近臣、曰某早々到其國、而備可說、本朝發船之趣、然則可解辨獻筮云々、不出帷幄而決勝千里者、古人至言也、故聽禍夫

〔原田孫七郎呂宋群島ヲ略取セント欲シ、策ヲ豊臣秀吉ニ進ム〕



言而暫不命將士來春可營九州肥前不移時日可偃降幡而來服若匍匐膝行於運遠者速可加征伐者必矣勿悔不宣

天正十八年秋季十五日

原田ハ此奇ナル書ヲ得テ其甥某ヲシテ呂宋ニ使セシム。秀吉ノ書辭實ニ傲慢無禮ヲ極ムト雖モ時ノ太守ダスマリニアスハ本國ノ強盛ナルニ似ズ之ニ畏怖シタルニヤ謹テ之ヲ受ク天主教師フアンゴホーヲ答使トシテ日本ニ至ラシム。時ニ秀吉征韓ノ軍ヲ起シ肥前ノ名古屋ニ營ス原田モ亦隨テ營中ニアリ使節ヲ導キテ秀吉ニ謁セシム使節ハ太守ノ書翰及ヒ方物ヲ呈シ曩ニ受クタル書ノ果シテ太閤ノ書ナルヤ否ヲ究メン爲ニ來リタルヲ云フ其使旨頗ル曖昧ナリト雖モ當時秀吉全カテ征韓ニ用ウルノ際ナルヲ以テ敢テ之ヲ責メズ原田ガ南蠻ヲシテ始テ入貢セシメタルノ功ヲ賞シ之ヲ幕臣ノ列ニ加ヘテ年祿五百俵ヲ與フ然レモ原田ハ尙ホ足レリトセス更ニ太守ヲ確答セシメント欲シ文祿二年(二千二百五十三年)自ラ呂宋ニ至ル然ルニ何ソ圖ラン前ノ使節フアンゴホー等ハ歸路船難ノ爲ニ溺死シ秀吉ノ復書太守ニ達セザリキ是ニ於テ原田ハ又一策ヲ按シ天主教長ニ説クニ日本

ニ至ラバ必ズ秀吉ノ優待ヲ受ケテ布教ノ便トナルベキヲ以テス教長大ニ喜ビ則チ太守ト相議シテ日本ニ使節ヲ發スルニ決シ教師ゴザルゴバチストノ二人ヲ正副使トナス使節日本ニ達ス原田復タ之ヲ導キテ秀吉ニ名古屋本營ニ謁見セシム此時使節ハ鞍馬一頭衣服一領大玻璃鏡一面鍍金墨池一箇及ヒ西班牙銀五百マールヲ呈シ使旨ヲ述ベテ曩ニ前使節ニ與ヘラシタル答書ノ趣意如何ヲ問フ秀吉之ヲ聞キ聲ヲ勵シテ曰ク然ラバ予今卿等ニ答辭ヲ與ヘ予之ヲ聞ク呂宋ノ太守ハ予ヲ奉シテ其地ノ君主ト爲サンガ爲且ツ予ガ兵ヲ差シ向ケザルヲ謝センガ爲ニ來朝セント欲スト予ハ其請ヲ容ル速ニ來朝セヨト使節ハ温言之ニ答ヘ呂宋太守ハ西班牙國王ノ臣ナルヲ以テ私ニ外國ノ人ヲ君主トシテ奉戴スルヲ能ハズト雖モ先ヅ之ヲ太守ニ報告セン其間副使バチストハ日本ニ留リテ人質タラント云フ其自ラ求メテ日本ニ留リシハ國情ヲ窺ヒ宗教ヲ弘メンガ爲ナリ乃チ那古屋ヲ發シテ京都ニ至リ洛外ニ殿堂ヲ建立シノートルダムヲナルチユヌキユールト稱ス。

日本西教史ニ關白殿下ハ其大業ヲ擴張シ西班牙人ヲシテ己ヲ君主ニ仰キテ

〔原田孫七郎呂宋群島ヲ略取セント欲シ鐵ヲ豊臣秀吉ニ進ム〕



入貢セシメント企テタリ、其葡、葡、牙、人、等、ト、通、商、セ、ル、モ、利、益、ノ、爲、ヨリ、ハ、寧、ロ、功、名、ノ、爲、ニ、シ、テ、萬、國、ヲ、服、從、セ、シ、メ、ン、ト、希、望、セ、シ、ガ、故、ナリト。又支那日本宗教史(英人著)ニ、バチスト「カ正使ニ代リテ、太閤ノ、フ、井、リ、ツ、ヒ、ン」群島ニ君主タラント欲スルノ意ヲ太守ニ告グ、其報ヲ待ツノ間、日本ニ人質トナリテ留リシ其豪膽亦驚クニ堪ヘタリト。

『群島日本人』ニハ、原田が群島ニ赴キシヨリ、殆ト七十年ノ後、鄭成功(國姓爺)ガ僅ニ數万ノ兵ヲ以テ、呂宋ノ、マ、ニ、ラ、ヲ、襲、ヒ、シ、ニ、兵、力、強、盛、ノ、西、班、牙、鎮、臺、モ、之、ヲ、禦、ク、ヲ、能、ハ、ズ、偶、マ、鄭、成、功、ノ、死、ニ、依、リ、テ、僅、ニ、退、去、ヲ、免、レ、タ、ル、ノ、例、ヲ、引、キ、元、龜、天正ノ士人ニ取リテハ決シテ恐ルベキノ敵ニアラズ、一萬以下ノ兵ヲ以テ之ヲ抜クヲ得ベシト云ヘリ。

其後、バチスト等ハ窃ニ書ヲ呂宋太守ニ贈リテ日本ノ事情ヲ報マ、且ツ教師ヲ送ラシメテ求メシニ、文祿四年教師三人來着ス。此時西班牙船土佐ニ漂着ス、増田長盛其船長ニ接シテ彼ノ他邦ヲ侵略スルニ、宗教ノ力ヲ假ルノ説ヲ聞キ、秀吉其復命ヲ得テ、大ニ西洋人ヲ憎惡スルノ念ヲ生ズ(歐米ノ部耶蘇教嚴禁ノ條ニ詳ナリ)。原田孫七郎ハ此機ニ乗マテ、呂宋太守ノ野心圖ルベカラズ、教師ノ所爲亦疑フベキヲ云

フ、秀吉乃チ慶長元年ヲ以テ教師等廿六人ヲ捕ヘテ長崎ニ送り、其呂宋ノ使者ト詐リ、官准ヲ經ズシテ日本ニ在留シ、國禁タル天主教ヲ傳ヘタルノ罪ヲ聲ラシテ磔刑ニ處ス。而シテ僅ニ二年ノ後秀吉歿シ、原田ガ期望セル呂宋出征ノ事ハ竟ニ其成果ヲ見ルニ及バズ、又原田ガ其後ノ事蹟モ亦詳ナラズ。

原田孫七郎ガ呂宋經略ニ熱心ナル、其機智膽略ニ富メル、眞ニ驚歎スベシ、若シ其畫策ヲシテ秀吉征韓ノ前ニアラシメバ、之ヲ成スト決シテ難カリシニアラズ、又之ヲ征韓ニ比セバ、勞少ウシテ功之ニ倍セルヤ必セリ、原田ノ雄圖其時機ヲ得ザリシハ實ニ惜ムベキナリ。

〔呂宋助左衛門呂宋ヲ侵掠ス〕

原田孫七郎ト殆ト同時ニ魚屋(又納屋)助左衛門アリ、呂宋ヲ攻掠シテ歸リ、自ラ呂宋助左衛門ト稱ス。助左衛門ハ泉州堺ノ豪商ナリ、其家海外貿易ヲ業トス、天正年間、國內騷亂ノ機ニ乗シ、烏合ノ衆百餘人ヲ率井テ呂宋ヲ侵ス、其地守兵少ク、太守寶器物產ヲ贈リテ和ヲ請フ、助左衛門等之ヲ諾シ、悉ク贈品ヲ携ヘ、文祿三年七月廿日ヲ以

〔呂宋助左衛門呂宋ヲ侵掠ス〕



ヲ歸ル。時ニ石田木工頭政澄堺ノ代官タリ、助左衛門之ニ由リテ其携ヘ歸リシ麝香、蠟燭ヲ豊臣秀吉ニ呈シ、又壺五十箇ヲ覽ニ供ス、秀吉諸士ヲシテ隨意ニ之ヲ買ヒ、以テ茶壺トナサシム、助左衛門依テ大利ヲ得タリ。和州信貴城主松永彈正久秀其才ヲ聞キ、聘シテ家士トナサント欲ス、助左衛門辭シテ就カズ、其後秀吉ノ命ニ違ヒテ其怒ヲ招キ、遂ニ其亡ス所トナリシト云フ。初メ助左衛門過分ノ富ヲ得テ、居宅最モ奢侈ヲ極ム、傳ヘ云フ、今堺ノ大安寺ハ即チ其居宅ヲ移セルモノニシテ、狩野元信ノ書クル西湖ノ圖及ヒ永徳ノ『技添ノ松』ハ皆チ其所有タリシモノナリト。

魚屋助左衛門ノ如キハ私利惟營ムノ徒ニシテ、其侵掠タル、毫モ國ニ益ナシト雖モ、事域外ニ關スルヲ以テ、茲ニ之ヲ錄スルノミ。

〔松倉重政呂宋ヲ探檢セシメ之ヲ征略センコトヲ圖ル〕

原田孫七郎ガ志ヲ遂ゲザリシヨリ殆ト廿年ノ後、伊達政宗亦呂宋征服ヲ企テタルモ、事故アリテ其企謀ヲ棄テタリ(歐米ノ部ニ詳ナリ)、後又十餘年、松倉重政アリ、更ニ呂宋征伐ヲ謀ル。松倉豊後守重政ハ大和ノ人、徳川家康ニ從フテ軍功アリ、家康之

ヲ肥前ノ島原(六萬石)ニ封シ、特ニ命シテ耶蘇教徒ノ餘黨ヲ除カシメ、爲ニ一切ノ課役ヲ免ス。重政人トナリ勇武ニシテ、常ニ精兵三千ヲ備ヘ、銃彈兵器之ニ稱フ。封ニ就キテヨリ、遍ク教徒ヲ搜查シ、一々之ヲ斬戮ス、尙ホ其根據地タル呂宋ノ實況ヲ探ラシメ、耶蘇教ノ根據地ヲ征シ、以テ我國ニ於ケル該教ヲ勦絶シ、又其地ヲ占領セントノ企望ヲ起シ、書ヲ幕府ニ呈シ、手兵ヲ率テ呂宋ニ出征シ、其地ヲ得テ十萬石ノ領主タルヲ許サレシコトヲ請フ、其書ノ略ニ曰ク、

(西洋)西洋ハ呂宋を支配シ、呂宋と南蠻を與ミ、本朝を窺ヒ候故、動もすれば我國動搖之機有之、都<sub>ニ</sub>西洋より本朝來候者、必<sub>テ</sub>呂宋着岸候間、某一分之人數を以テ呂宋を攻取り、在番之者を遣し置キ、西洋之足掛、を指止、候は、永々本朝之御安堵、可有御坐候、御免<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>者某呂宋押渡、退治可仕候、依之其領内草高十萬石之御朱印被<sub>レ</sub>成下候様奉願候云々、

幕府ハ此請願ニ對シテ可否ノ指令ヲ下サズ、既ニシテ重政又家士吉岡九左衛門、木村權之丞ノ二人ニ呂宋視察ヲ命ズ、二人ハ曾テ廿四回南洋ニ航シタル長崎人糸屋隨右衛門ヲ船長トシテ一船ヲ艤シ、寛永七年十一月十日ヲ以テ藩領地ノ樺島ヨリ

〔松倉重政呂宋ヲ探檢セシメ之ヲ征略センコトヲ圖ル〕



發シ、商賈ノ裝ヲナシテ呂宋ニ至ル、然ルニ僅ニ六日ヲ隔テ、其月十六日重政急ニ病ミテ歿ス、木村モ亦呂宋ニ死シ吉岡獨リ視察ヲ遂ケ翌年六月歸國シタルニ、出征ノ事ハ竟ニ徒空ニ屬シタリ。

近古呂宋群島略取ヲ企ツル者三人、就中松倉重政最モ歩ヲ進ム、幕府徒ニ退縮シテ決セズ、天亦之ニ年ヲ假サズ、傑士空シク雄圖ヲ肅シテ逝キ、南洋一ノ日本國ヲ空ウス、眞ニ千載ノ遺憾ナリ。

〔津田又左衛門、木谷久左衛門暹羅國ニ功ヲ樹ツ〕

慶長中長崎人津田又左衛門商業ノ爲ニ暹羅ニ至ル、時ニ其國臥亞ト戰ヒ、利アラズ、援ヲ又左衛門ニ求ム、當時日本人ノ其國ニ居留セル者數百人アリ、其居留地ヲ日本町ト稱ス、又左衛門乃チ山田長政等ト議シ、此等ノ日本人ヲ糾合シテ出戰シ、忽チ臥所ノ大兵ヲ破ル、國王其功ヲ賞シ、王女ヲ以テ又左衛門ニ妻シ、官職ヲ長政ニ授ク（山田長政ノ條參看）、其後數年、王女男子ヲ生ミ、三右衛門ト稱ス、寛永四年（一ニ二年トナス）又左衛門其子ヲ伴フテ長崎ニ歸ル、長崎奉行之ニ乙名役（市中事務廳）ヲ命ジ、後又

暫ク暹羅通事ヲ兼テシム。

同時、長崎ノ人木谷久左衛門ト云フ者アリ、暹羅ニ至ル、時ニ亞華國（緬甸ノ別名、暹羅ノ西ニアリ）強盛頗ニ隣邦ヲ破リ、勢ニ乗テ暹羅ヲ侵ス、暹羅王之ヲ憂フ、久左衛門奇計ヲ以テ大ニ亞華ノ兵ヲ破ル、功ヲ以テ重賞ヲ受ク、國政ニ參與ス、後數年、長崎ニ在ル弟某ニ書翰ヲ贈リテ父母ノ靈ヲ弔ス。

津田、木谷等一市人ノ身ヲ以テ、忽チニ外兵ヲ破ル、亦以テ當時邦人ノ氣風ト西南洋諸國ノ弱兵トヲ察スルニ足レリ。

〔山田長政暹羅國ニ事ヘ、侯ニ封セラルル日本町ノ商民暹羅人ト戰ヒ退還ス〕

山田長政ノ事蹟ハ我國ノ諸書ニ散見シ、口碑ニ藉々タレド、其書多クハ俗本ニシテ冗漫ニ失シ、然ラズンバ簡略ニ過キテ其實ヲ詳ニセズ、又其國ニハ歴史備ハラズ、外國人ノ著書亦隔靴ノ憾ヲ免レズ、今暹羅ニ於ケル長政ノ事業ハ、長政ト共ニ暹羅ニ住シ、後ニ長崎ニ歸リタル智原五郎八（剃髮シテ宗因ト稱ス）ノ所著「暹羅國山田氏興亡記」ニ據リ、其敷演ニ過グルハ聊カ之ヲ取捨斟酌シ、傍

〔山田長政暹羅國ニ事ヘ侯ニ封セラルル日本町ノ商民暹羅人ト戰ヒ退還ス〕



(山田長政ノ肖像)

(河駿ニ傳フモノヲ模ス)



(世外ニ於ケル日本人第二部八九頁)

ラ諸書ヲ参考シテ此傳ヲ記ス、而シテ材料ノ撰擇ハ多ク青江秀ノ『中古外交志』  
 (地學協會報告)ヲ取ル(同志ニ山田長政ガ事蹟ヲ記スルモノ、齋藤拙堂ガ海外異  
 傳及平田篤胤ガ氣吹殿ノ書アリト雖モ、何レモ誤謬ヲ免レズ、並ニ之ヲ取ラズト)。  
 日本人ノ暹羅ニ至リ、其國人ニ就テ質シタル者ハ、大島圭介等ノ官遊、其他佛  
 門ノ留學生等アリト雖モ、長政ノ事蹟明ナラズ、又其國及外國史書ノ記スル  
 所詳ナラザルモノハ、未開ノ國、記録ヲ闕キ、且ツ長政ノ外國人タルヲ以テ、憚ル  
 所アリシガ故ナラシカニ此ノ如キ事情アルハ何レノ國ト雖モ、古昔ニ於テ、異  
 アルヲナシ、右大島等ノ說并ニ西書ノ所記ハ本文ノ間ニ挿録ス。

山田仁左衛門長政ハ駿河安倍郡藁科郷ニ住ス、其本姓詳ナラズ、母ハ寺尾氏ナリ。初  
 府中馬場町ノ染工ニ山田九平次ト云フ者アリ、伊勢ノ人九左衛門ヲ養フテ嗣トナ  
 ス、是ヨリ津田屋ト號ス。時ニ寺尾氏先夫ノ子長政ヲ抱キテ九左衛門ニ再婚ス。長政  
 長ズルニ及ブテ、九左衛門ノ女婿トナリ、因テ山田ヲ名乗ル。長政夙ニ大志ヲ抱キ、  
 常ニ自ラ織田信長ノ遺裔ト稱ス。

長政ガ信長ノ遺裔ト云フハ固ヨリ信ズルニ足ラズ、而シテ其生地并ニ家系ニ就  
 キテハ、諸書ノ說一ナラズ、今關口氏山田長政傳引ク所ノ山田氏過去帳、駿河志  
 料、駿河府志、山田事跡及ヒ口碑ニ從テ、青江氏中古外交志ニハ暹羅國風土記等  
 ニ據リ、蓋シ山田ハ織田ノ別姓ニシテ、本國尾州ノ人ナリト、天竺德兵衛物語ニ、山



田仁左衛門長政ハ勢州山田御師ノ手代ナリシガ、武州江戸ニ來リテ徒事ヲナセシヲ以テ、御吟味ニ逢ヒテ、長崎へ逐電シ、彼地ニ住ス云々。『長崎事始見聞録ニ』本轉多町ノ乙名山田仁左衛門云々。碎玉話止戈談叢ニ駿河志ヲ引キテ、駿河ノ國府馬場町ニ山田仁左衛門長政ト云フモノアリ、又紺屋仁左衛門ト云フ云々。『異國日記ニ』大久保治左衛門六尺山田仁左衛門暹邏へ渡ル云々。別本天笠徳兵衛物語ニ、伊勢國山田ノ産ニテ、後駿河國府中驛ノ淺間ノ神社前ニ住居セシ山田仁左衛門長政ト云フ人アリ云々。

長政性豪放ニシテ任俠ヲ好ミ、家業ヲ營マス、常ニ人ト共ニ兵法ヲ談ズルヲ以テ樂トス、人ト爲リ直實ニシテ才識アリ、人多ク之ト親睦ス。我邦寛永ノ中頃ニ至ル迄ハ、外國通航自由ナレバ、京都、大坂、奈良、泉州、堺、長崎等ヨリ唐渡ト稱シテ交趾、暹羅、東京、東埔寨、呂宋等ノ國々ニ渡航スルモノ多ク、肥前長崎ニ於テ商船ヲ整へ、毎年海外ニ往來セシ商人二十餘家アリ、元和五年（或ハ慶長年間トス）駿府ノ商家、瀧佐右衛門、太田治郎右衛門ノ二人南洋ニ航セントス、山田長政之ト共ニ往カンコト望ム（山田長政傳ニ淺間詣ヲ引キテ長政人ト聞ヒ數人ヲ殺シ、事露レ禍ノ及ハンコト恐レ、海外ニ航セントスト）然レモ從來家業ヲ營マス、且ツ其志操異常ナルヲ以テ、同伴

〔山田長政暹羅國ニ事ヘ候ニ封セラルル日本町ノ商民暹羅人ト戦ヒ退還ス〕



スルモ商家ニ益ナシトテ之ヲ諾セス、長政早クモ其意ヲ悟リ、先ヅ家ヲ出テ、大阪ニ至リ、瀧、太田兩人ノ來ルヲ待チ之ヲ迎ヘテ便船ニ乘ラシメテ請フ、二人止テ得スシテ之ヲ許シ、同航シテ臺灣ニ至ル(一書ニ元和元年四月ノ事トス)商事終ルニ及ンテ長政獨リ彼地ニ留ラシメテ乞フ、兩人其意ニ任シテ歸朝ス、時ニ長政年二十七、或ハ云フ二十八ナリト、長政尋テ臺灣ヲ去リテ暹羅國ニ入ル。

慶長元和ノ間關ヶ原大阪等ノ落武者多ク商人トナリテ渡海ノ商船ニ乘リ、其身ヲ外國ニ匿シ、モノ多ク本邦ノ武名之ガ爲ニ海外ニ著明ナレハ、外人ハ海賊ニ至ルマテ日本人ヲ恐ル、一恰モ鬼神ノ如シ、依テ暹羅國王モ亦日本人ヲ畏敬シ、其王城ノ下ニ居留ノ地ヲ與ヘテ日本町ト名ヅク、日本町ニ數百軒ノ町家ヲ建テ、其妻子ト共ニ此ニ住ス、町ニ首長ヲ置キ、坤采耶(歐語ノ「コンシユル」ヲ取リシナランカ)ト稱ス、日本ノ廻船更ル々々此ノ地ニ往來ス。暹羅國特ニ鄰邦ノ來侵アリ(長崎記ニハ阿華國亂チナスニ作リ、暹羅國山田氏興亡記ニハ六昆國亂チナスニ作ル)暹羅王在留ノ日本人ヲ招キ、防禦ノ術ヲ求ム、長政進ミ出テ曰ク、我等ハ日本町ノ商賈ナリト雖モ、三百餘人此地ニ在レハ、敵軍ヲ却クルヲ難カラズト、暹羅王依テ軍事ヲ以テ

日本人ニ委任ス、津田又左衛門ト共ニ出軍シタルハ此時ノ事ナラン、敵ハ暹羅ヨリモ、駿國ナレバ、皆裸體ニテ攻メ來リ、武器ハ唯斧、山刀ノ類ナレド、我ハ甲冑ニ身ヲ裝ヒ、名刀ヲ以テ之ニ當リ、且ツ勇戦シタレバ、敵ハ一戦ニシテ敗走ス。此頃長政又國王ノ命ヲ以テ屢バ呂宋船ヲ攻掠ス、元來呂宋ノ船舶ハ「カンパン」ト名ツクテ、四五寸角ノ格子ヲ組ミテ船舷ヲ覆ヒ、敵兵船ニ乘リ移ルルハ、鈎鏈ヲ以テ「カンパン」ヲ鎖閉シ、其「カンパン」ノ格子ノ下ヨリ矛ヲ以テ近ヅク敵ヲ突クナリ、故ヲ以テ常ニ此船ニ勝ツコト能ハズ、長政一計ヲ案出シ、灰ヲ以テ器ニ入レ、之ヲ携ヘテ船ニ乘リ、直ニ其灰ヲ散布ス、敵兵仰キ見ルヲ能ハズ、則チ大斧ヲ以テ「カンパン」ヲ打チ碎キ、以テ全勝ヲ得タリト云フ。

長政ノ暹羅ニ至ルヤ、屢バ彼ノ地ノ官人ト會ス、長政生來才智アリテ粗ボ兵事ニ通シ、經史ヲ談ズルヲ以テ、官人等皆大ニ長政ヲ尊敬ス、元來暹羅ハ支那ノ謂ハユル西南夷ノ一部ニシテ國人總テ佛教ヲ奉ズ、支那ノ文學未ダ傳來セズ、經學ノ士ノ往來セシコトモナク、レバ、長政ノ説ヲ聞キテ其才識ヲ稱賛シ、之ヲ國王ニ奏ス、國王乃チ長政ヲ召シテ其談話ヲ聞キ、亦深ク其才識ニ感シ、遂ニ之ヲ登用シテ、官人トシ、其食



邑ヲ給ス、之ヲ本邦ノ俸祿ニ比セバ凡ソ三千石ニ當ルト云フ。其後累進シテ太子ノ傳トナル、時ニ我が寛永四年ナリ。幾バクモナクシテ又凡ソ二萬石ヲ領ス、日本町ノ者多ク長政ノ家人トナル、長政其器ヲ撰ンテ其職ヲ授ク、勇士四十餘人、兵卒百餘人、僕二百餘人ヲ得タリ、何レモ日本風ノ服裝ニテ、行列ヲ整ヘ、新封地ニ入ル、暹羅人ヲ見テ益ス長政ノ威風ヲ歎賞セリ。其後一年ヲ經テ入京シ、常ニ國王ニ侍シテ之ヲ補佐シ、政務多クハ長政ノ手ニ出テシト云フ。一日國王長政ニ語テ曰ク、予汝が説ク所ヲ聞クニ、日本漢土共ニ其子ヲ以テ世嗣トナス、獨リ我暹羅國ハ否ラス、古來父ニ子アリト雖モ、之ヲシテ世系ヲ繼ガシメス、必ズ先ツ其弟ヲ立ツルヲ例トス。故ニ常ニ其正統ヲ亡ヘリ、余深ク之ヲ憂フ、今國憲ヲ更革シ、子ヲ以テ繼嗣タラシメントスト、王依テ其弟ヲ僧トナシ久留園精舍ノ弟子タラシメ、此改正ノ事ヲ國中ニ公布ス。時ニ暹羅ノ内ニ逸比留トイヘル侯國アリ、(中島ノ南端ニアリ「ホル子オ」島ト相對ス)是ヨリ先侯年老ヒタルヲ以テ、其弟、吟亞(吟亞ハ敬稱、猶ホ公ト云フガ如シ)チヤベルヲ立テ、嗣子トス、チヤベル今回ノ公布ヲ聞キ、使ヲ派シテ暹羅王ニ懇訴シ、其一代ヲ限リテ兄ノ王位ヲ繼ガシトテ請フ、暹羅王之ヲ許サズ、且ツ強テ違背ス

ルニ於テハ兵威ヲ以テ其罪ヲ問フベキヲ告ク、使節恐怖シテ歸リ、之ヲ復命ス。逸比留侯父子仍ホ其命ニ從ハス、是ニ於テ暹羅王大ニ怒リ、吟亞山田ヲ召シ、逸比留侯國憲ヲ遵奉セザルニヨリ、兵ヲ率井テ之ヲ征伐シ、取リテ之ニ代ルベキヲ命シ、之ニ附スルニ兵二萬餘ヲ以テス、長政其部下ノ兵五千餘ヲ合シテ三萬ト號ス、行程七日ニシテ逸比留ニ達シ、使ヲ遣リテ降ヲ勸ム、チヤベル之ヲ拒ミ、使節ヲ逐ヒ還シ、城門ヲ鎖シテ防戦セントス、長政日本兵ニ大砲及ヒ小銃三百餘挺ヲ付シテ進攻シ、大ニ城兵ヲ破ル、逸比留人ノ戦死スルモノ一萬有餘人ニシテ、長政ノ兵ノ戦死ハ僅ニ四百人ニ過キズ、逸比留ノ隣境ナル琵琶牛國主ノ一族ニ吟亞、チヤキリト云フ者アリ、亦逸比留侯ノ親族タリ、逸比留侯ヲ説キテ城ヲ出テ、孟留國ニ退カシム、長政因テ城ヲ收メ、家士大塚十左衛門ヲ以テ城代トシ、降人其他ノ土人ヲ屬セシメ、總計二萬餘人、悉ク祿ヲ給ス、是ニ於テ長政日本形裝ノ手兵二千餘人ヲ從ヘ、其身ハ甲冑ヲ着ク、大麩ニ曳カセタル國王ノ車輿ニ乘リ、官人二萬人前後ヲ圍繞シ、天竺風ノ音樂ヲ奏シテ暹都ニ凱陣ス、國王大ニ喜ビ、其功ヲ賞シテ、直ニ長政ヲ以テ逸比留侯ニ封ズ、然レモ其職ハ仍ホ太子大傅ニシテ、國政ニ參與ス。



長政既ニ志ヲ得テヨリ本邦ト通交セシメテ欲シ之ヲ王ニ勸ム王亦之ヲ容レ信使ヲ派遣ス元和七年暹羅國ノ信使江戸ニ至リ徳川大將軍ニ謁ス長政之ニ托シテ書翰ヲ執政土井大炊助利勝ニ致ス訓點ハ皆ナ追加シタルモノナリ。

乍恐欽奉言上候。爰元從屋形

御上様迄以金札被申上之條萬々

御上様可

然様ニ御取成奉願候爲使者暹仁二人並伊藤久太夫被差遣之條乍恐可被得尊意候爰元從屋形 御上様ニ御進物以注文申上之條御披露奉願候隨而乏少之儀

ニ御座候得共較二本鹽硝二百斤致進上候能奉御祝儀計候誠惶敬白。

元和七年 卯月十一日

山田仁左衛門 長政(印)

從暹羅國

進上

大炊様 御小姓衆中御披露

幕府ノ執政之ニ答書ヲ與フ。

音耗披閱 貴國之兩使捧

王書來

朝並土宜如件々到來奏上

大樹

源君兩使拜禮則賜 返翰飯

國譯使伊久口陳附之較貳本鹽硝二百斤至兩

臣惠來厚意多々晒布貳拾疋充投贈之聊補空書耳不宣。

元和七年 九月吉辰。

土井大炊助 利勝(朱印)

答 山田仁左衛門尉

本多上野介 正純(朱印)

曩ニ長政ヲ伴ヒテ臺灣ニ至リシ太田治郎衛門瀧佐右衛門ノ二人ハ其後長政ノ消息ヲ得ザリシガ寛永ノ初年ニ至リテ二人又臺灣ニ渡リ更ニ暹羅國ニ至ル土人太田等ノ來ルヲ見テ之ヲ吏人ニ告グ吏人又之ヲ大臣ニ報ツ二人ヲ警護スルヲ甚タ嚴ナリ居ルヲ數日吏人來リ二人ヲ城中ニ護送ス接待甚ダ厚シ日ヲ經テ逸比留城ニ達ス官吏命シテ曰ク汝等宜シク國產ヲ獻シテオソアラテ拜スベシト(オソアラハ暹羅語ニシテ此ニ譯シテ候ト云フ)乃チ宮中ニ入りテ候テ拜ス侍官前後ニ周匝シ其威儀甚タ儼然タリ候盛服シテ出テ二人ヲ見ル衣冠皆ナ金銀珠玉綾羅錦繡ヲ以テ之ヲ飾ル謁見畢ルニ及ンテ命ヲ別館ニ休息セシメ饗スルニ盛饌ヲ以テス夜闌ナルニ及ンデ一貴人便服シテ來訪シ其左右ヲ退ク直チニ二人ノ肩ヲ打チ手ヲ握リテ哄然大笑ス二人仰キテ之ヲ視レバ即チ先ニ拜スル所ノ候ナリ二人大ニ

〔山田長政暹羅國ニ事ヘ候ニ封セラル日本町ノ商民暹羅人ト暇ヒ退還ス〕

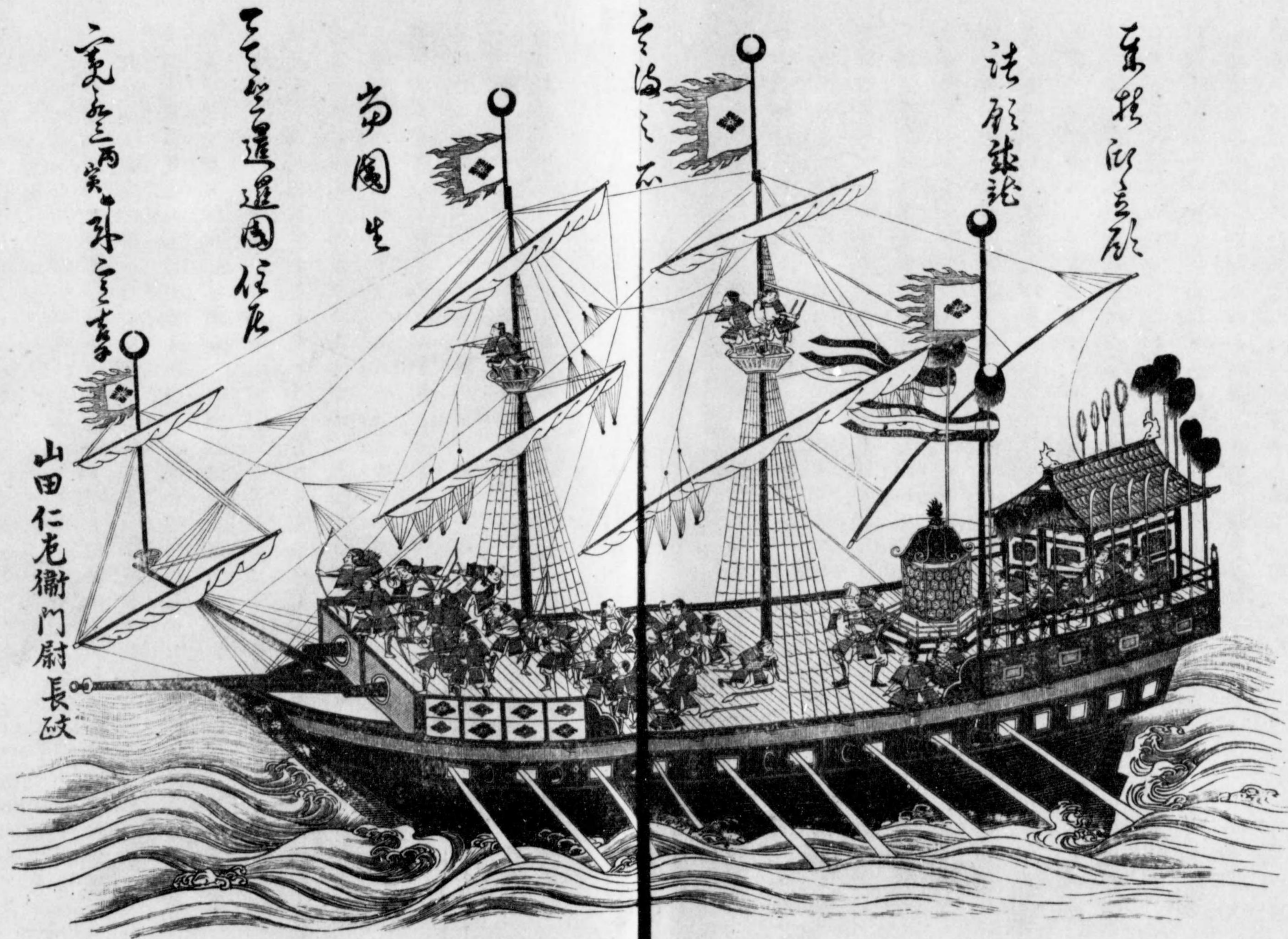


驚キ、伏シテ之ヲ拜ス、其人曰ク、我ハ是レ山田仁左衛門長政ナリ、舊恩何レノ日カ忘  
 レン、余卿等ト共ニ本國ヲ去リ、卿等ノ慈愛ヲ以テ臺灣ニ至リ、終ニ此國ニ來ル、時ニ  
 隣國ト交戦中ニテ國內騒然タリ、余ハ則チ在留ノ日本人ヲ團結シ、且ツ土人ヲ募リ  
 テ日本ノ軍裝ヲナサシメ、之ヲ日本國ノ援兵ト稱シ、屢バ奮闘シテ終ニ敵國ヲ破リ  
 タリ、王ハ余ガ功勞ヲ賞シテ、妻スニ其女ヲ以テシ(長崎志ニハ津田又左衛門ハ王女  
 ニ配セラレ、長政ハ官職ヲ授ケラレタリト又左衛門ノ條參看)或ハ其後長政更ニ王  
 女ニ配セラレタルモノカ、終ニ此國ニ封ゼラル、唯恨ムラクハ、本國ノ舊好ニ逢ハザ  
 ルヲ、依テ令ヲ臺灣ニ傳ヘテ和商ノ來ルヲ待テリ、今卿等ニ遭フテ平生ノ宿願此  
 ニ満足セリ、希クハ余ガ名ヲ以テ本邦ニ傳ヘヨ、我日本ノ武名ノ盛ナルニ頼ルニア  
 ラズンバ余豈ニ敢テ此勳功ヲ成スヲ得ンヤ、余ノ微賤ニシテ日本ノ武威ヲ異域  
 ニ發揮スルヲ得タルモノハ、生前ノ悦喜何事カ之ニ如ン、二客下座ニ退キテ平伏シ、  
 答ヘテ曰ク、我等尊公ニ見エテ、始ハ大ニ之ヲ疑フ、今尊公ノ言ヲ聞クニ及ンテ、疑團  
 悉ク氷釋セリ、我等謹テ其盛業偉勳ヲ賀ス、俟又曰ク、卿等余ガ今日ヲ以テ昔日金蘭  
 ノ交意ヲ忘ル、ヲナク、益々兄弟ノ好親ヲ厚ウセヨ、余令テ國中ニ傳ヘテ、日本商客ノ



〔山田長政戰艦ヲ指揮ス〕

(淺間神社ノ願願ヨリ傳寫ス)



東洋の海軍

法政の礎

海軍の

海軍

海軍の

海軍の

山田仁老衛門尉長政



出入居留ヲ安カラシメ、且ツ其貿易ヲ獎勵シ、卿等ヲシテ利益ヲ得ルヲ自由ナラシ  
メ、卿等國ニ歸ラバ、余ガ言ヲ以テ本邦ノ商客ニ傳ヘヨト、快談遂ニ黎明ニ及ブ。二  
人辭シ去ルノ日ニ至リテ多ク金銀及ヒ國產ノ名器ヲ授ク、旅館驛馬ヲ供ス。太田等  
其搭載貨物ヲ以テ貿易シ、大利ヲ得テ本國ニ歸ル。

寛永三年本邦ノ商人(一説ニ長崎商人井上太郎兵衛ナリト)暹羅ニ至ル、長政之ニ囑  
シテ曰ク、余本國ニアリシト、深ク駿州ノ總社淺間神宮ノ威徳ヲ奉信ス、今他國ニ在  
リト雖モ、仰慕遙拜一日モ怠ルコトナシ、余ガ此國ニ來リテ軍艦ヲ造リ、數回ノ戰爭ニ  
勝利ヲ得タルヲ、全ク日本神徳ノ冥護ニ由ルナリ、故ニ余今其戰艦ノ圖ヲ以テ額面  
ニ畫キ、之ヲ彼ノ神殿ニ奉納セントス、卿宜シク持チ歸リテ、余ガ爲ニ寄納セヨト、則  
チ畫圖ヲ製セシメ、同國在留平田仁左衛門ヲシテ題言及ヒ本邦ノ曆日并ニ其姓名  
ヲ書セシム、淺間神社ニ納ムル所ノ異國軍艦ノ畫圖是ナリ。

此圖ハ天明八年十一月(二千四百四十八年)淺間神社火災ニ罹リシ際燒亡シタ  
レ、幸ニ其摸圖庫中ニ存セルニヨリ、今日ニ傳フルコトヲ得タリ、其軍艦ハ兩桅  
ニシテ、舷窓ニ大砲數門ヲ排列ス、甲冑ヲ被リ、双刀ヲ帶ヒテ、或ハ銃ヲ把リ、或ハ  
弓ヲ持ツ者ハ日本兵士ナリ、金兜綵鎧、中央ニ竝立シ、扇ヲ披キテ指揮スル者ハ



山田長政ナリ。

寛永四年武藏ノ人森田長助暹羅ニ至リテ長政ニ事フ、長政厚ク之ヲ遇ス。同六年暹羅國再ヒ信使ヲ我國ニ派遣ス、長政又之ニ托シテ方物ヲ徳川大將軍ニ呈シ、書翰ヲ執政酒井雅樂頭忠世ニ贈ル。

御書謹而頂戴仕候。去年奉捧少分之處、被達。上聞之趣、無冥加仕合、忝奉存候、殊ニ從貴公様御皮袴五、下被仰付、辱拜領仕候、扱此國之國王舊冬不慮違行被申付、而從當新王御次目以金札御禮被申上候、則爲使者をろわんさこんでつな一人、をこんわつけい一人、をこんよこはつ一人、通事一人ニ五右衛門尉ト申者、從拙者船差渡被申候、御前可然様ニ御披露被爲成可被下候、然ハ拙夫船去夏差渡可申上處ニ、南蠻之海賊妨通路自由不罷成、遅々仕儀ニ御座候、則如例年船渡海之儀奉願存候、此上哀以御影御朱印頂戴仕度念願ニ御座候、寔ニ縷國之外聞ニ御座候、條偏奉願存候、雖近來憚多御座候、兩上様ニ奉捧少分候、可然様ニ被思召候者、被達。上覽可被下候、聊輕微之至御座候、得共、紅ちりめん十端並花毛氈二枚、奉進上候、奉表御祝儀計ニ御座候、尙此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言。

寛永六巳年三月三日

山田仁左衛門尉

關主稅助殿 御披露

當時暹羅國ノ門閥ニ、<sup>ト</sup>亞<sup>カ</sup>ウ<sup>ハ</sup>ム<sup>ト</sup>云フモノアリ、其位長政ガ上ニ在リ、大ニ長政ガ昇進ヲ嫉ム、而シテ相共ニ政事ニ參與スルヲ三年ナリ。時ニ國王病篤シ、乃チ、カウハム長政ノ兩相及ヒ其ノ他ノ重臣ヲ召シ、新王即位ノ上ハ、カウハムト長政ノ兩相隔年ニ交替シテ政務ヲ執行スベシ、今年ハ先ツ、カウハムノ在京トシ、長政ハ本領逸比留ニ歸ルベク、明年本月ニ至ラバ、長政出京シ、カウハムハ其本領ナル東利宇國ニ歸ルベシト、遺命終リテ王歿ス、時ニ寛永五年ナリ(山田氏興亡記ニハ寛永九年五月十六日トス、今長政ノ書翰及ヒ采覽異言ニ從フ)。暹羅國新王即位ノ禮既ニ畢ル、長政ハ先王ノ遺命ヲ奉シテ、國都ヲ去リテ其采地ナル逸比留ニ歸リ、カウハム暹都ニ在リ、新王ヲ補佐シテ政務ヲ執行ス、カウハム今年二十五歳容姿衆人ニ勝ク、王后深ク之ヲ寵シ、醜聲アリ、終ニ夫婦ノ約ヲナス、新王ハ其年纔ニ十三歳ナリト雖モ、頗ル英邁ノ聞ニアリ、此事ヲ知リテ大ニ憤リ、竊ニ、カウハムヲ失ハントテ謀ル、母后之ヲ察シ、新王ヲ後宮ニ招キ、宮女ニ命シテ之ヲ毒殺セシメ、王ハ急病ヲ以テ逝キタマ

〔山田長政暹羅國ニ事、候ニ封セラル日本町ノ商民暹羅國人ト戦ヒ退還ス〕







ニ當ル、但シ王ノ出處系統ハ曖昧ニシテ之ヲ詳ニスル人ナシト云々。上ノ暹史所記ノ事蹟ハ其時代相應シ、事蹟亦相似タリ、然ラバ夫ノ「アラチヨウソク」ヲ王ノ寵臣ニテ攝政官トナリ、終ニ王位ヲ踐シハ長政ナルモ未ダ知ルベカラズ、而シテ其出處系統詳ナラズト云ヒシハ、記者長政ノ履歴ヲ忌ミ、之ヲ曖昧ニ附セシモノナラン乎、疑ナキ能ハズ云々。

右所說中暹羅國史ニ記スルト云フ「アラマター」ナル者コソ、姓氏モ相似テ「アマター」即チ山田ノ轉訛ナラン、其事蹟モ粗同シクシテハ、長政ヲ指シタルナランカ。暹羅國舊都史(翻譯寫本、地學協會所藏)ニモ「ソク」王統ノ「アラビマラタム」王立チ「アラボロマラー」ト稱ス、此王ノ時日本人數百名侵入ス、「アラマ、ハー、アンマタ」率テ之ヲ防ギ、功勞アリシヲ載ス、同書又是ヨリ前ノ「チエンラーイ」王統第十四代「アラヨイツ」ハ年十四ニシテ立チテ王ト爲ル、母后侍衛ノ「クワンテンラー」(官名)ニ奸通シ、遂ニ幼王ヲ廢シ、クンオロオンサーヲ立テ、王ト爲シ、私生ノ幼子ヲ太子ト爲シタルヲ載ス、本文ノ事ト相似タルハ、年代少シク古キガ如シ。

「ボーリン」氏(曾テ香港領事アリ)ノ著「The Kingdom and People of Siam(暹羅國及人民)ニ曰ク「一六〇年白王ト稱スル暹羅王ノ死後宮中ニ大亂起リ、其長子先王ノ寢室ニ於テ叛人ノ爲ニ殺サル、是ハ王位ヲ窺フ貴族ノ陰謀ニ出ツト云フ。白王ノ第二子立チテ王トナリ、直ニ此叛人ヲ誅ス。此時叛人ニ從ヘル日本人二百八十人アリ、其主ノ死ヲ聞キ、王宮ニ闖入シテ復讐ノ爲ニ四人ノ大臣ヲ殺サシメテ求メ、之

ニ代アルニ誓書ト高僧四名ノ人質ヲ收メ、尙ホ許多ノ殘暴ヲ恣ニシ、悠然其俘囚ヲ率テ去ル。此國ヲ去ル。時ニ暹羅ノ敵國ニ「サナ」アリ、其王先ニ日本人ト通謀スル所アリ、今ヤ内亂ヲ聞キテ其翌年侵寇シタル也、此時日本人ハ既ニ去リテ其土地ヲ沒收セラレタル後ナルヲ以テ失望シテ退軍セリ。一六二八年(寛政五年)第二朝ノ末王「タヤウホン」其臣「ユリバン」ノ爲ニ殺サレシ、ユリバン王位ヲ奪ヒテ自ラ「アラチヤウ」プロサツトタシト稱ス、是テ第三朝ノ初王トナス。茲ニ「アラチヤウ」プロサツトタルハ即チ暹羅紀行引ク所ノ「アラチオ」アラサアトウアン」ニシテ、王號(稱)ホ露帝ノ「サア」、獨帝ノ「カイセル」、土帝ノ「サルタン」ト云フガ如シ、ナルヲ知ルベシ、而シテ大鳥氏ハ之ヲ以テ長政ナラント推考シタルトモ、余ハ紀行ニ引ケル西書ノ攝政官即チ「ボーリン」氏ノ書ノ「シ、ユリバン」ハ本文ノ「カウハム」ト年代事跡相合スルヲ以テ、是レ長政ニアラズシテ「カウハム」ナラント推考スルナリ。又外交志稿ニ長政六坤國王タリトシ、其他暹羅國王タリトスルハ、共ニ誤ニシテ、實ハ暹羅國ノ一侯タリシモノナリ。

長政逸比留ニ在リテ都下ノ凶報ヲ聞キテ憤激シ、兵ヲ發シテ奸徒ヲ誅戮シ、久留園精舍ノ王弟ヲ迎立シ、以テ亡君ノ怒ヲ休メントス、此事都下ニ聞ユ、女王大ニ驚怖シ其寵臣「チヤントホウ」ト云フモノヲ使者トシテ逸比留ナル長政カ許ニ遣シ、僞リ諭

〔山田長政暹羅國ニ事ヘ侯ニ封セラレ日本町ノ商民暹羅國人ト戦ヒ退還ス〕



シテ曰ク、我子新王急病ノタメニ死シ、日夜悲涙ニ堪ヘス、汝早ク都ニ來リテ朝議ヲ定メ、後主ヲ立テヨ、妾速ニ政務ヲ讓リテ、以テ佛道ニ皈入セン、汝妾ガ新王ヲ毒殺セルノ流言ヲ妄信シ、兵ヲ集ムルト聞ク、畢竟是等ノ流言ハ虛隙ニ乘シテ國家ヲ亂サントスル奸徒等ノ所爲ナルヘシ、妾今誓書ヲ以テ之ヲ盟フ、汝宜シク其疑ヲ氷解セヨ、且ツ汝カ一子、オイン（外蕃通書、氣吹庭ニ「オイン」ヲ女子トセルハ誤ナリ）ヲシテ新ニ六昆、太泥（タニ）ノ兩國ヲ領セシメン、是レ亦妾カ寸志ナリト、賜フニ書ヲ以テス、長政疑心茲ニ解ク、盛宴ヲ設ケテ其使者ヲ饗應ス、チヤントホウ（旅館ニ皈ルノ後、長政使節ニ謝禮ノ爲メ其旅館ニ至リテ饗應ヲ受ク、夜ニ入り、辭シテ城中ニ歸リ、チヤントホウハ明曉ヲ以テ都ニ歸ル。）長政長子、オイン（ヲ呼ビ、之ニ告グテ曰ク、國王汝ニ大泥、六昆ノ二國ヲ賜フ、汝兩國ニ入りテ其政ヲ行フベシト）王ノ令書ヲ與フ、オイン（謹ミテ之ヲ承ク、先ツ太泥國ヘ赴ク、太泥國主ハ婦人ナレバ、オインハ妄ニ城中ニ入ラスシテ、城下ニ投宿シテ其ノ長臣等ガ禮ヲ受ク、即日太泥ヲ發シテ六昆ニ入ル、六昆國主城ヲ出テ、之ヲ迎ヘ、長ク臣屬タラント云フ、オイン乃チ暫ク六昆ニ留リテ兩國ノ政務ヲ行ヒ、要地ヲ撰ンテ城塞ヲ築カントス。）使節、チヤントホウハ暹羅ニ歸

リテ、女王ニ奏シテ曰ク、長政陽ニ王命ヲ奉ズト雖也、心中未ダ服セザルノ色アリ、臣其叛心アルヲ知ルヲ以テ、旅館ニ招キテ之ヲ饗應シ、密ニ與フルニ毒ヲ以テセリ、今ヨリ三月ヲ出デズシテ、長政必ズ死スヘシト、女王ハ、カウハム（ト共ニ大ニ喜ビ、果シテ汝ガ言ノ如ク、長政死スルニ至ラバ、六昆、太泥ヲ并セテ共ニ汝ニ與フヘシト、乃チ早クモ吟亞、チヤントホウト稱ス。）長政ハ逸比留ニ在リテ毒ニ中リ、病日々ニ篤シ、是ニ於テ密ニ近臣ヲ招キ、遺命シテ曰ク、我、オイン（ガ六昆、太泥兩國ヲ服シテ歸ルヲ待チ、大軍ヲ以テ暹羅ヲ擊チ、女王ト、カウハムガ罪ヲ問ハント思ヒシニ、圖ラズモ國使、チヤントホウガ爲ニ毒ヲ飼ハレ、終ニ起タザルニ至ル、汝等、オインニ力ヲ添ヘ、阻勉シテ以テ余カ素志ヲ達スヘシト、終ニ翌年ノ春即チ女王ノ二年ヲ以テ、長政逸比留ニ歿ス、時ニ寛永十年ナリ。）オインハ六昆ニ在リテ、父ノ死ヲ聞キテ大ニ悲憤シ、天地ニ誓ヒテ君父ノ讐ヲ報セント欲シ、六昆ニ於テ大ニ軍兵ヲ募リシニ、一國擧リテ之ニ應ズ、事遲都ニ聞ユ、女王驚キ、則チ、チヤントホウニ付スルニ大軍ヲ以テシ、六昆國ニ向ハシム、チヤントホウ、六昆ニ至リ、使ヲ以テ、オインニ恭順ヲ勸ム、オインハ僞リテ之ヲ領シ、軍禮ヲ以テ城地ヲ授受セントテ、三日間ノ猶豫ヲ請ヒ、竊ニ戰爭ノ



準備ヲナス。三日ヲ過キテ「チヤントホウ」ハ僅ニ二三百騎ヲ率テ入城セントス。時ニ伏兵左右ヨリ起リ、前後ヲ斷チテ突進ス。事意外ニ出デシヲ以テ、敵兵悉ク敗レ、チヤントホウハ戰死ス。「オイン」既ニ父ノ讎ヲ復シ此機ヲ誤タズシテ都ヲ襲撃シ、新王ヲ立テ、國家安全ノ基ヲ定メント、直ニ檄文ヲ發シテ、六昆十三ノ領主ニ告示ス。女王之ヲ聞キテ又恐怖シ、群臣ノ說ヲ聽キ、先ツ日本町ノ商賈等ノ内應ヲ防ガン爲ニ、其商賈ノ船ヲ奪ヒ、之ヲシテ遁逃ノ道ヲカラシメ、然シテ後軍兵ヲ以テ之ヲ燒カンゴコン最上ノ策ヲラメト、則チ使者ヲ以テ日本町ノ船長二人ヲ召ス（此ニ船長ト云フハ航海船長ノ謂ヒニアラズ、此ノ地商賈ノ首長ニシテ貿易ノ主幹タルモノナリ）。時ニ鈎屋庄左衛門、玉屋忠兵衛、日本町ノ船長タリ、頗ル機敏ノ者ナレバ、突然此使ヲ得タルヲ以テ、大ニ之ヲ怪ム。總元、締岩倉平左衛門ノ曰ク、頃日「オイン」六昆ニ在リテ義兵ヲ起スト聞ク、女王我輩ガ内應センゴトヲ恐レテ、突然兩人ヲ召シ、若シ其命ニ應ゼズンバ、即座ニ之ヲ殺スノ計策ナラン、果シテ然ラバ、往クモ大事、往カザルモ亦大事ナリ、速ニ日本町屈指ノ面々ヲ會合シテ、其利害ヲ議スベシト、則チ金屋源三郎、大阪屋助作、綿屋市兵衛、岸部屋九郎、左衛門、岸部屋甚太郎、谷久兵衛、今村左京、山田

仁太夫、山田仁兵衛、及ヒ參謀有賀門太夫、能役者速水又三郎、智原五郎八（此智原五郎八ハ即チ暹羅國山田氏興亡記ハ著者ナリ）ノ諸人ヲ會ス、衆相議シテ曰ク、船長二人ヲ城中ニ招クハ、即チ人質ノ爲ニシテ、蓋シ日本ハ義ヲ重ゾズル國ナレバ、二人ヲ見殺シニシテ「オイン」ガ城ヲ攻ムルゴトナキヲ察シ、其間ニ國軍ヲ徵集シテ「オイン」ガ軍ヲ討タシメントノ謀計ナラン、然ラバ容易ニ往クベキニアラズト雖モ、若シ行カズンバ、必ズ急ニ都下ノ兵ヲ以テ攻撃セン、如カス速ニ殿軍ヲ備ヘテ以テ此地ヲ去リ、海ニ浮ブノ準備ヲナサンニハト。時ニ城中ノ使者再ヒ來リテ船長ヲ召スト、既ニ四五度ニ及ベリ、衆曰ク今ハ逃ル、ニ路ナシ、潔ク戰死シテ、日本ノ武名ヲ輝スベシト、庄左衛門、忠兵衛ハ鎧砲二十五挺、弓十張、槍十柄ヲ以テ共ニ城中ニ入り、總元、締岩倉平左衛門ハ日本町ニ於テ兵ヲ整ヘ、城中ノ砲聲ヲ合圖ニ待チ居タリ。斯クテ船長二人ハ城中ニ至リ、召ニ應シテ參レル旨ヲ門外ヨリ傳ヘシニ、カウハム内ヨリ其體ヲ伺ヒ、兵器ヲ携ヘ來ルヲ知り、人ヲシテ詰問セシメテ曰ク、汝等王命ヲ奉サテ城中ニ入ルニ武器ヲ携フルハ何事ゾヤ、速ニ之ヲ棄ツベシト、二人曰ク、此度「オイン」ハ六昆ニ於テ王師ニ敵シ、剩ヘ國使ヲ殺害スト承ル、我等日本人タルヲ以テ、「オイン」ニ黨



與スト疑ハレ今日死ヲ賜ハルガ爲ニ斯ク我等ヲ城中ニ召サレタルコトナルヘシ然  
ラハ日本人ノ作法トシテ最後ノ一戰セシモノト準備此ノ如クナリト答フ吏人又  
曰ク「オイン」ハ官兵ヲ以テ之ヲ誅スベシ汝等何ゾ此事ニ關カルベクゾヤ然レド汝  
等此地ニ滞在セバ内應ノ疑ヲ免レズ依テ速ニ日本町ノ借地ヲ返還シ悉ク日本ニ  
歸帆スベシ但シ汝等ニ日本船ヲ與ヘナバ運動自由ナルヲ以テ我邊海ノ地ニ於テ  
或ハ暴行アルモ圖リ難シ故ニ日本船ハ悉ク之ヲ官ニ出サシメ其代船トシテ當國  
ノ大船六七艘ヲ以テ交趾近海ニ送ルヘシト庄左衛門答ヘテ日本町ノ地ハ固ヨリ  
借地ナレバ命ニ應テ奉還セン船ハ我々ガ所有ナレバ官沒セラルベキ謂ハレナ  
シ又其代トシテ乘リ習ハヌ此國ノ大船ヲ給ハルモ如何ニシテ日本ニ歸ラルベキ  
唯日本船ヲ以テ歸國スルコト望マシクレト斷言シ二人城ヲ出ヅルト雖モ一人  
トシテ支ヘ止ムルモノナシ二人ハ日本町ニ歸リテ右ノ始末ヲ一同ニ語りケレバ  
何レモ大笑シ扱モ無用ノ事ニ死ヲ極メ兵具ヲ調ヘタル事ナルゾ然シナガラ永ク  
留マルベキ地ニアラズ近日此地ヲ引拂ヒ一同日本ニ還ルノ外ナシトテ歸裝ニ着  
手ス。此時暹羅女王ノ命トシテ日本町ヲ盡シテ一同歸國セシムル上ハ自今日本

人ハ一人タリモ城中ニ入ルベカラス若シ此禁ヲ犯スモノハ處スルニ重刑ヲ以テ  
セント云ヘリ暹羅ノ王城ハ港口ヨリ河渠迂回シテ廓中ニ通シ其外廓ノ内ニ市街  
アリ外廓ノ外ニ外國人ノ居留地アリ日本町モ亦此一部分ニシテ別ニ一區域ヲナ  
セリ其外廓ハ廣大ニシテ練堀ヲ以テ之ヲ圍ミ數ク所ニ練上クノ唐門アリ外廓ニ  
接シテ大河アリ之ニ架セル橋ノ上ニ廊下ノ如クナル家ヲ造リ多門(城壁)ノ如ク廓  
壁ニ砲門ヲ開ケリ而シテ諸官人モ亦此内ニ雜居ス王城内ハ庶人ノ出入ヲ禁ズ平  
常日本人モ外廓ノ内マテ往來スルコトヲ得タレモ今回外廓ノ内ニ入ルコトヲ禁ゼリ。  
或夜長崎五島町ノ源藏トイヘルモノ竊ニ出デ娼家ニ遊バントテ獨リ廓内ニ入  
リシニ吏人之ヲ知リテ捕縛セントス源藏之ヲ拒ミ短刀ヲ拔キテ吏人四名ヲ殺シ  
其他ノ九人ニ重傷ヲ負ハシ源藏モ亦終ニ殺サル翌日官吏日本町ニ來リ責メテ曰  
ク昨夜源藏法令ニ背キテ城中ニ入り四人ヲ殺シ九人ヲ傷ケタルヲ以テ源藏ハ既  
ニ之ヲ殺スト雖モ更ニ十三人ノ解死人ヲ出スベシト岩倉平左衛門其非理ヲ唱ヘ  
テ之ヲ拒絕ス時ニ孟留國ノ將校ニ吟亞インルト云フ人アリ曾テ其國ノ信使トシ  
テ暹都ニ駐在シ屢々日本町ニ來リテ商務ヲ議シタルコトアリ此頃ノ紛議ヲ聞キ總元



110  
締岩倉平左衛門及船長等ニ諭シテ曰ク、卿等女王ノ官吏ニ向ヒテ再度ノ過言ヲ云ヘリ、抑モ卿等借地シテ此國ニ住スレバ、女王ハ即チ地頭ニアラズヤ、卿等ハ當ニ其命ニ違背スルノミナラズ、兵器ヲ帶シテ城中ニ入り、且ツ其官吏ヲ罵詈ス、若シ日本ノ地頭ナラバ、忽チ汝等ヲ誅罰セン、然ルニ此天竺ハ國風温和ナル上、當今ハ女王ニシテ、且ツ宰相カウハムハ柔弱ナルヲ以テ、問罪此ノ如ク緩ナリト雖モ、竟ニハ兵ヲ以テ處スルニ至ラン、如カズ速ニ官命ノ如ク日本船ヲ獻スベシ、余之ヲ斡旋シテ卿等ノ爲ニ計畫スル所アラフ、又天竺ハ從來甚タ銀ヲ好ム國ナル故ニ、他日銀ヲ獻シテ其船ヲ求メナバ、之ヲ還スベシト、衆皆ナ其理ニ服シ、先ヅ使者ヲ以テ宰相カウハムニ就キテ、前日ノ罪ヲ謝シ、且ツ日本船ヲ獻センコトヲ乞フ、カウハム直ニ其請ヲ許シ、悉ク日本船ヲ收メ、廊内ニ漕ギ入レ、船倉ニ藏ム。時ニ「インル」ハ又「カウハム」ニ説キテ曰ク、日本人ハ當國ノ大船ニ乗ルコトヲ得ザルヲ以テ、銀若干ヲ獻シテ以テ先ニ上ル所ノ日本船ニ代ヘ、之ニ乘リテ速ニ歸國セント欲ス、貴官宜ク彼ガ請願ヲ許シテ此地ヲ去ラシムベシト、カウハム又直ニ之ヲ許ス、インル乃チ日本町ニ至リ、元締船長ト議シテ銀七拾斤（一斤ハ三百目ナリ）ヲ納レシメ、依テ船倉ノ日本船三百艘ヲ出

シテ之ヲ返シ、皆ナ日本町ノ海岸ニ繫ガシム、是ニ於テ日本人皆ナ大ニ喜ビ、速ニ此地ヲ去リテ日本ニ歸ラントス、然ルニ六昆、逸比留ニ在陣スル日本人ノ家族、僕婢ヲ并セテ男女七拾餘人此地ニアレバ、之ヲ彼地ニ送り届ケテ後ニ日本ニ歸ルベシトテ、一物モ漏サス船載ノ用意ヲナシ、準備漸ク整ヒテ、大小船舶三百餘艘、一時ニ其纜ヲ解キタルハ、暹羅女王ノ二年、即チ我寛永十年（或ハ云フ十一一年）二月十九日ナリ。暹羅兵ハ陸地ニ在リテ之ヲ望ミ居タルガ、諸船ノ日本ニ歸ルベキ航路ニ由ラズシテ、オインガ從者ノ妻子ヲ具シ、六昆ヲ指シテ漕ギ出セルニヨリ、再ヒ此國ヲ攻撃スベキ目的ナラント察シ、軍船數十艘ヲ連テ追撃ス、日本人ハ之ヲ見テ、決戦ノ備ヲナシ、總元締岩倉平左衛門ハ參謀有賀門太夫ト議リテ軍兵ヲ配置シ、又今村左京ト謀リテ諸船ノ本綿帆ヲ集メ、之ヲ横ニ張リテ敵彈ヲ防グノ楯トナシ、所々ヲ襄ケ、砲口ヲ出シテ敵船ノ來ルヲ待チタルニ、暫クシテ暹羅船ヨリハ石火矢五六十發ヲ放チ掛ケ、日本船モ亦之ニ應ズ、黒煙海面ヲ覆ヒテ、震動ノ聲百雷ノ轟クガ如クナリ。今村左京ハ、曾テ關ヶ原及ヒ大阪鴨野ノ合戦等ニ出陣シタル老武士ナルガ、水軍ハ今回始テノ事ナレバ、勇氣自ラ平日ニ數倍シ、長刀ヲ持チテ踊リ上リ、諸船ノ人々ヲ勵マシ、



金屋源三郎、大阪屋助作、綿屋市兵衛、岸部屋九郎、右衛門、同甚太郎、谷久兵衛、山田仁兵衛、同仁、太夫、速水又三郎、智原五郎、八、何レモ武器ヲ携ヘテ船ノ艦前ニ立チ、大砲、小銃、交ルミミ打立テ、敵船四艘ヲ沈メタリ、敵ヨリモ亦頻ニ石火矢ヲ打チ掛クタレド、帆幕ヲ以テ彈丸ヲ受ク流シタレバ、我船ハ大ナル破損ナシ、我兵稀ニ砲丸ノ爲ニ斃ル、モノアルモ、毫モ死ヲ恐レズ、頻ニ發砲ス、此時砲火帆幕ニ燃エ付キ、折節海風烈シクシテ、火焰敵船ヲ覆ヒ、忽チ船底ノ火藥ニ燃エ移リ、霹靂一聲、震動シテ數十ノ敵船一時ニ破裂シ、水火ノ爲ニ死スルモノ其數ヲ知ラズ、殘兵先ヲ争フテ辛クモ陸地ニ逃ル。今日日本人ノ全勝ヲ得タルヲ實ニ日本神靈ノ加護ニ因ルナラント、衆人大ニ歡喜シ、船ヲ廻シテ歸帆セントセシニ、敵ハ又忽チ廊橋ノ窓ヲ開キテ石火矢數十挺打チ出セリ、其間ノ距離稍ヤ遠クレバ砲丸我船ニ達セザレド、我兵ハ帆幕ノ楯ヲ頼ミ、廊橋ノ下ニ漕ギ近ツクテ、大石火矢ヲ發シケレバ忽チ楯ヲ打チ崩セリ。敵兵堪ヘカテ逃ク出セシカバ、我兵ハ其間ニ海中ヘ漕ギ出セリ。時ニ敵ノ兵士ニ、チシヤノギト云フモノアリ、碇泊ノ南蠻黑船ヲ借り受ク、卒數十人ヲ從ヘテ、自、小舟ニ乘リ、日本船ヲ攻撃ス、我兵再ヒ撃チテ其舟ヲ沈ム、港中復タ一人ノ敵ナシ。此戰ニ日本兵ノ戰死ハ僅ニ

四十三人ニシテ、其中惜ムベキ勇士ハ堺ノ彦太夫ト云フ者一人ナリキ。今ハ戰モ終リタレバ、港ヲ出帆シ、順風ニ乗シテ直ニ六昆ニ至リ、オインニ面會シテ戰ノ始末ヲ語リケレバ、オイン大ニ感悅シ、且ツ衆ニ謝シテ曰ク、我等生前ニ妻子ニ會スルヲ得タルハ、寔ニ諸君ノ厚意ニ由ルナリ、此上ハ一日モ早ク都ニ攻メ入り、君父ノ讐ヲ報ズベシト、直チニ檄文ヲ隣邦ニ發ス。然ルニ大泥國ハ言ヲ左右ニ托シテ出兵セズ、六昆國ハ三十酋長悉ク我ニ背キテ、暹羅政府ト連合シ、舊ノ六昆國王ニ屬シテ却テ「オイン」ノ居城ヲ圍メリ、オイン之ヲ見テ、毫モ屈セズ、直ニ城外ニ打テ出テ、大ニ敵ヲ破レリ。此時嚮ニ出セシ斥候歸リ來リ、太泥、<sup>ヌベグ</sup>牛、羅字、茶字等ノ諸國悉ク暹羅女王ノ檄ニ應ジテ馳セ集リ、總軍凡ソ三百萬來撃スルヲ報ズ、是ニ於テ衆皆ナ怖レ、先年長政ノ扶助ヲ受クタル卒僕等マデモ、其國ノ者ハ概チ遁逃シ、或ハ敵軍ニ降伏シ、僅ニ城中ニ殘レル兵ハ唯日本人ノミトナレリ、オインハ城兵ノ遁走シタルモ落膽セズ、將士ヲ集メテ云ク、此ノ體ニテハ、最早勝利モ覺束ナシト雖モ、余ハ大軍ヲ引受クテ華々シク合戰ナシ、日本人ノ勇武ヲ外國ニ殘サンノミ、余ハ必ラス明日ヲ以テ戰死スベシト、然ルニ城兵敵ノ大軍ニ聞キ怖<sup>オチ</sup>ナシ、踏ミ留ルベキ摸樣モ見エザレハ、オ

〔山田長政暹羅國ニ事ヘテ侯ニ封セラル日本町ノ商民暹羅國人ト戦ヒ退還ス〕



インハ更ニ軍令ヲ改メ余一タビハ明日ノ戰ニ擊死セント思ヒシガ餘リ小勢ニナ  
リタレバ竊ニ此城ヲ逃レ出デ一旦國外ニ身ヲ匿シ重テ謀ヲ施スベシ何レモ妻  
子ヲ伴ヒテ隨意ニ落チ去ルヘシト告グ其身ハ僅ニ腹心ノ勇士十七人ヲ誘ヒテ隣  
國東埔寨國ニ至ラント城ヲ開キテ出テ又其途中ヨリ使者ヲ以テ逸比留ノ城代大  
塚十左衛門ニ此趣ヲ告グ知ラセ有志ヲ集メテ東埔寨國へ來ルヘシト命ヲタリ。  
此時日本人ハ處々ニ散亂シ船ニ乘リテ南海ニ出デタル者ハ種々ノ艱難ヲ經テ暹  
羅ノ境界ヲ離レ占城交趾等ノ地ニ至リ其ヨリ日本ヘノ歸路ニ向ヘリ。

「山田オイン」ハ六昆國ヲ去リシ後隣國東埔寨ノ國王ハ父長政ノ舊識タルヲ以テ  
此人ヲ頼ミテ兵ヲ借り再ビ暹羅ヲ討ント欲セシニ其國王ハ既ニ死シ其弟王位ニ  
登レリ然ルニ其兄之ガ王位ヲ奪ハンコトヲ謀リ兵ヲ起セリ而シテ王常ニ戰ニ利ヲ  
失ヒ今ニモ滅亡セントスルノ際ナレバ王ハオインガ來ルヲ見テ大ニ喜ヒ之ヲ留  
メテ其兄ト戰ハシメ若シ利運ヲ得ナバ國兵ヲ擧ゲテ之ヲオインニ借シ以テ暹羅  
ヲ討タシメンコトヲ約スオイン乃チ兵ヲ勸シ屢バ敵ト戰ヘ兵疲レテ軍振ハズオ  
インハ終ニ東埔寨國ハ爲ニ戰死ス之ニ從ヘル大塚十左衛門今村左京明石舍人明

石十太夫後藤又六山田仁兵衛速水又三郎等モ亦枕ヲ共ニシテ東埔寨ノ原野ニ白  
骨ヲ曝セリ。是ヨリ先日本人ガ暹羅ノ日本町ヲ退去セントセシ際其八人檀林山  
「ロウトウ精舍トイヘル寺院ニ參詣セシニ其歸途官兵ノ爲ニ要セラレ終ニ生擒ト  
ナリシガロウトウ精舍ノ住僧ノ願ニヨリ助命シテ座敷牢ニ入レ置ケリ時ニ暹羅  
ノ南海ナル瓜哇島國ハ暹羅日本町ノ空虛ナルヲ聞キ大軍ヲ以テ暹羅ノ南洋ナル  
辨伽羅海ニ航來シ直チニ暹都ニ攻メ入ラントスカウハム曰ク前日捕縛セル日本  
人ヲ出シテ南人ニ備ヘシメ南人恐レテ退キナバ渠等モ亦之ヲ免シテ歸國セシム  
ヘシトロウトウ精舍ノ住僧ヲシテ爲ニ此事ヲ謀ラシム八士答ヘテ曰ク今官兵ヲ  
裝フニ日本ノ甲冑ヲ以テシ我等之ヲ指揮セン且ツ我等ニ大象八頭ヲ假セ海賊ヲ  
悉ク追ヒ還サントカウハム之ニ從ヒ曾テ日本町ヨリ求メ置キタル甲冑及ヒ先ニ  
日本人ノ退去ノ所其地ニ遺シ置キタル甲冑ヲ以テ七十餘人ノ土人ニ着セテ日本  
人ノ如ク裝ヒ之ニ加フルニ兵五百人ヲ以テシ八士ハ一人ツ、大象ノ櫓ニ登リ象  
背ニ裝置セル大砲ヲ發シ敵船ヲ破ル瓜哇ノ軍之ヲ見テ倉皇トシテ本國ニ退歸ス。  
「カウハム」ハ捷報ヲ得テ大ニ悦ビ八士ニ種々ノ賞品ヲ與ヘ進退其意ニ任スベキヲ

〔山田長政暹羅國ニ事ヘテ侯ニ封セラル日本町ノ商民暹羅國人ト戰ヒ退還ス〕



告ク、是ニ於テ暹羅國悉ク平定ス。後幾バクモナクシテ、カウ、ハム、ハ病ヲ以テ死シ、女王モ亦歿ス。群臣相議シテ久留園精舎ニ在ル先王ノ弟ヲ迎立シ、又王位繼承ノ法ヲ舊ニ復スト云フ。

嚮ニ暹羅ヲ退去シタル日本町ノ商民等ノ肥前ノ平戸港ニ歸リタルハ、寛永十年八月ニアリ。長政ノ姪ニ治兵衛ト云フ者アリ、商ヲ以テ業トス、是ヨリ先、暹羅ニ赴カントテ長崎マデ往キシガ、長政ノ害ニ遇ヒタルヲ聞キ乃チ止ム。長政ノ凶報駿河ニ達スルニ及ンデ、父母甚ダ之ヲ悲ミ、先登西敬寺ニ於テ祭式ヲ行フ。山田氏今尙ホ存スト云フ。

近時暹羅國ヨリ歸リシ人ノ説ニ、昔時ノ日本町ハ舊都ノ邊ニアリテ、今ハ草莽々トシテ一家屋ナク、唯土人ノ日本村ト呼ベルニテ、其地ナルヲ知ルノミト云ヘリ。

山田長政ハ一介ノ身ヲ以テ能ク異域ニ雄飛シ、既ニ榮達シテ本國ヲ忘レズ、力ヲ兩國ノ交通ニ致ス、中道非命ニ終リタルハ深ク惜ムベシト爲ス、邦人嘖々之ヲ稱スルハ寔ニ故アルナリ。

又當時邦人ノ海外ニ於ケル機敏、ナル、進退、活潑、ナル、舉動、及ヒ義俠、ナル、行爲、ハ、眞ニ歎稱スベキモノアリ、其稍ヤ輕卒粗暴ニ涉ルガ如キハ深ク尤ムルヲ要セザルナリ。

〔角屋七郎兵衛ト荒木宗太郎ノ安南貿易〕

慶長寛永ノ間、多年印度貿易ニ従事シ、終ニ安南ニ死シタル角屋七郎兵衛榮吉ハ本姓ヲ松本ト云フ、其先ハ、信州松本ヨリ出ヅ、八幡宮ノ神職タリ、其家後ニ勢州松坂ニ移住シ、農耕伐薪ヲ以テ業トス、其父七郎次郎忠榮ハ、嘗テ明智光秀ノ亂ニ、徳川家康ノ危急ヲ伊賀ニ救フノ賞トシテ授ケラル。七郎兵衛夙ニ海外貿易ニ志シ、慶長中、安南ニ往來シ、長ク交趾ニ住シ、其地ノ婦人ヲ娶リテ妻トナシ、男子ヲ生ム、吳順官ト名ヅク。當時邦人ノ同國ニ居留シテ貿易ヲ營ム者少カラズ、一域ヲ設ク日本町ト稱ス。七郎兵衛後世ノ紀念ノ爲ニ一寺ヲ其地ニ建立シ、松本寺(其姓松本ヲ取ル)ト稱ス之ニ掲グル額ハ伊勢ノ實家ニ托シテ調製シタルモノニシテ、其面ニ記セル松本寺ノ三字ハ釋乘圓ノ筆ニ係ル。七郎兵衛ハ、便船毎ニ、本邦ノ親屬ト書翰ノ往復、

〔角屋七郎兵衛ト荒木宗太郎ノ安南貿易〕



物品ノ贈答絶ユルヲナシ、寛文十二年正月九日ヲ以テ其地ニ歿シ、松本寺ニ葬ル。其死後寡婦及ビ吳順官ヨリ亦音信絶エザリシガ、海外交通禁止ノ令出ヅルニ及ンデ、遂ニ其消息ヲ得ザルニ至レリ。而シテ曾テ交趾ヨリ送リタル物品(鼎、皿、革製海圖、孔子像等)ハ今尙ホ勢州松坂ノ角屋ノ家ニ存スト云フ。

又文祿中海外貿易ノ朱印ヲ授ケラレタル八人ノ中ニ長崎人荒木宗右衛門アリ(近古南洋貿易ノ條ニ見ユ)其嗣宗太郎ハ元和八年交趾渡海ノ朱印ヲ受ケ、安南ノ西都順化ニ至リ、廣南王ニ謁ス。王其才幹ヲ愛シ、之ニ娶ス。其女ヲ以テス(一書ニ安南ノ大臣阮氏ノ女ヲ娶リテ妻トストアリ、廣南王ハ即チ阮氏ナランカ)。其後外航ノ禁令アリ、凡ソ六十年ノ後、天和元年ニ至リテ、宗太郎ノ玄孫伊太郎ヨリ朱印ヲ幕府ニ返納シタリト云フ。

〔天竺德兵衛印度ノ流沙河ヲ溯リ、釋迦ノ古跡ニ至ル〕

日本人ノ印度流沙河ニ至ル者、高岳親王ノ後八百四十餘年ニシテ米澤德兵衛アリ。德兵衛ハ播州高砂ノ人、年十五ニシテ朱印船主京都ノ角倉與一郎ノ船長前橋清兵衛

ノ書記トナリ、寛永十年(二千二百八十六年)十月十六日長崎ヨリ發船シ、三月三日南天竺、マカダ國ニ着シ、暹羅國流沙河ヲ溯ル。三里(六町チ一里トス)ハ、ンテピヤ城ニテ朱印ヲ改メタル。此ヨリ又溯ル。廿七里ニシテ、カイソウ城アリ、更ニ溯ル。廿五里ニシテ大海ト云ヘル、一都會アリ、又更ニ溯ル。四十二里ニシテ靈鷲山ニ達ス、高サ一里上ニ大岩アリ、釋迦説教ノ處トス、山ニ貝多羅葉ヲ産ス、群弟子ノ之ニ釋氏ノ説法ヲ手記セルモノ今尙ホ、テピヤタイノ寺院ニ珍藏ス、又其地ニ往昔須達長者ノ遺跡アリ、堂塔輪奐海上ヨリ望ムベシ。又四十三里ニシテ座禪石アリ、釋迦修禪ノ處ナリト云フ。流沙河ノ末流二里ノ處ハ、マカダ河(恒河ノ一名ニシテ即チカンガス河ナリト云フ)ノ川口ナリ、恒河ノ長サ千二百里ニ達スト云フ。德兵衛一年滯留ノ後、十二年四月三日此河口ヲ發シ、八月十一日長崎ニ歸ル。

一説ニ靈鷲山ハ印度ノ錫蘭島ニ在リトシ、流沙ハ河名ニ非ズシテ砂漠ナリト云フ。外交志稿ニ「恒河ハ即安日河ナレバ、靈鷲山ハ其上流、中印度ノ地ニアルベシ、然ルニ靈鷲山ヲ以テ流沙河ノ上ニアリトシ、其末流二里ノ處、恒河ノ川口トナスハ、是流沙河ヲ以テ雅魯藏布江トナシ、靈鷲山ヲ以テ西藏ノ地ニ在リトナスニ似タリ、地理方位恐クハ其實ヲ失フニ近シ」ト。著者モ亦未ダ明據ヲ得ズ。



十四年十一月十四日、德兵衛再比長崎ヲ發シテ、翌年二月十八日、マカダ國ニ着シ、八月十四日歸國ス。德兵衛ノ「ハンテビヤ」ニ至ルヤ、其止宿セル家ノ主人ヲ木下六右衛門ト云フ、嘗テ此地ニ移住シ、我商船ノ朱印檢査ヲ司ル、德兵衛之ニ「テビヤタイ」ノ經文、貝多羅葉一枚ヲ得テ歸リ、之ヲ播州高砂ノ十輪寺ニ納ム。德兵衛天竺ニ至ルノ前後二回世人呼ビテ天竺德兵衛ト云フ。實永中八十八歳ニテ剃髮シ、宗心ト號シ、大坂ニ住ス、藩主榊原氏之ニ終身五人扶持ヲ給ス、著ス所ノ紀行「渡天物語」アリ

(中ニ渡天船實、銀五百匁ト記ス、亦以テ當時ノ物價ノ一斑ヲ知ルベシ也。)

天竺德兵衛ノ探檢ハ蓋シ往昔日本人ノ亞細亞西方ニ至ルノ最モ遠キモノトス、後百數十年間宮林藏アリ、其東北ヲ探檢ス(第三部中ニ載ス)、共ニ邦人が記憶スベキノ壯事ト謂フベシ。

〔濱田彌兵衛臺灣ニ於テ荷蘭ノ駐在官ヲ懲ス〕

慶長三年(西一五九八年)荷蘭人瓜哇ヲ取り、元和七年(西一六二二年)又臺灣ノ一部ニ占據シテ、城廓ヲ築キ、大ニ威ヲ南洋ニ振フ。其土人ヲ遇スルヤ甚ダ專横ニシテ、外船ノ

其地ニ至ル、之ニ對シ頗ル無狀ヲ極ム。時ニ長崎ノ末次平藏ノ商船支那福州ニ至ラントシ、臺灣ヲ過キ、亦蘭人ノ害ヲ受ク、濱田彌兵衛偶マ其地ニ至リテ之ヲ聞キ、歸リテ事狀ヲ末次ニ報ス、末次大ニ憤リ、之ガ報復ヲ圖リ、彌兵衛ニ其任ヲ命シ、船隻及ビ人員ヲ備ヘ、之ヲ彌兵衛ニ付ス。

・濱田彌兵衛ハ長崎ノ市人ナリ、年五十餘、弟小左衛門年四十、子新藏年二十、並ニ勇敢ニシテ智略アリ、寛永五年(一六二七年)三月三日ヲ以テ長崎ヲ發シ、其十九日臺灣ニ達ス、皆ナ偽リテ農夫ノ裝ヲ爲シ、鋏鋤ヲ携フ。臺灣ノ太守蘭人「ピーテル・ニツ」(太守ノ名ハ日本亞細亞會誌第十一所載平戸ナル荷蘭商館主「コクバツカル」ノ書翰英譯ノ挿註ニ據ル、會餘錄等ニ「ゴヘタワル」又「コフヲトウル」ナド、記スルハ「イハルナドール」即チ太守ノ誤解ナリ)之ヲ怪ミ、其上陸ヲ許サズ、且ツ之ヲ抑留ス。彌兵衛守吏ニ告グテ曰ク、公等何ソ我等ヲ疑フノ甚シキヤ、日本若シ此地ヲ略セント欲セバ、應ニ國兵ヲ發スベシ、何ソ我等ノ如キ平民ヲ用非ンヤト、太守仍ホ之ヲ疑ヒ、抑留數月ニ涉ル。彌兵衛等憤然死ヲ決シ、六月朔日「ゼーラン」中ニ進ミ、三人身ヲ挺シ、居館ノ闕ヲ排シテ太守ノ室内ニ闖入ス、太守尙ホ寢牀ニ在リ、驚キ起キテ叱シテ曰

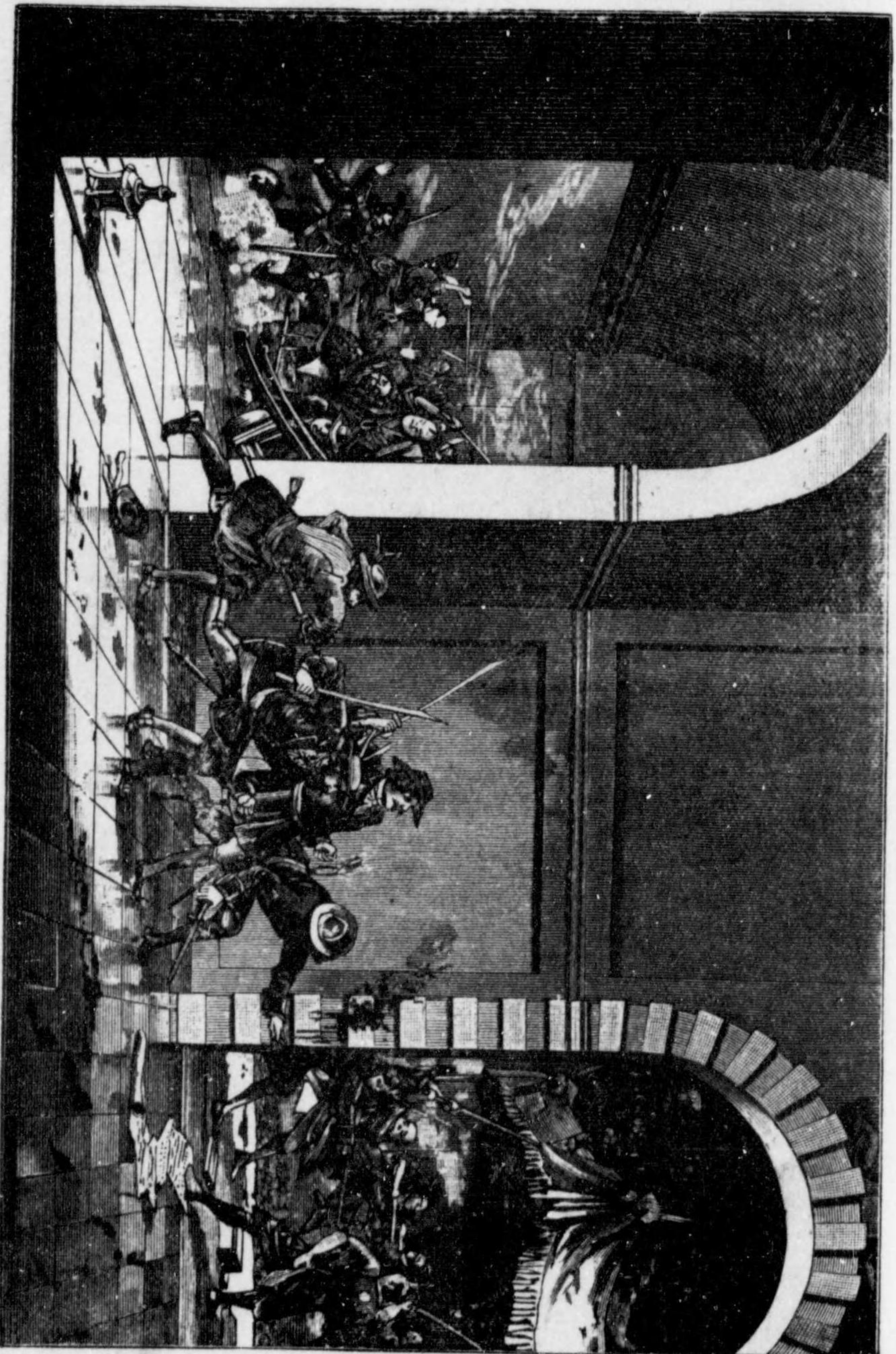
〔濱田彌兵衛臺灣ニ於テ荷蘭ノ駐在官ヲ懲ス〕



ク、汝等猥ニ人ノ室内ニ突入ス、何ゾ無禮ノ甚シキト。彌兵衛大聲疾呼、太守ヲ執ヘ、懷劍ヲ拔キ、其喉ニ擬シテ其罪ヲ責ム、左右劍ヲ拔キテ之ヲ拒カント欲ス、小左衛門新藏刀ヲ提ク、遮リ立チテ之ヲ叱ス、衆懼レテ近カズ、太守畏縮シテ哀ヲ乞ヒ、唯命是レ從ハント云フ、彌兵衛堅ク後來ヲ戒メ、嚮ニ掠奪スル所ノ貨物ヲ償還セシメ、之ヲ日本ニ拘致ス、其一子(十二歳)請フテ共ニ來ラント請フ、彌兵衛等之ト共ニ從者數十人(一ニ四十三名トナス、又百餘人トスルモノアリ)及ヒ船一艘ヲ率非テ長崎ニ歸ル、代官厚ク彌兵衛ノ功勞ヲ賞シ、俘虜ヲ獄中ニ禁錮ス、是ニ於テ彌兵衛ノ名一時ニ高シ、彌兵衛死スルノ後、肥後國主細川氏其子新藏ヲ招キテ家士トナシ、祿五百石ヲ給ス(一ニ彌兵衛ヲ祿ストナスハ誤ナラン)。其後臺灣ノ蘭人使ヲ遣シテ、平戸ノ商人取締(カセタン)、ニコラス・コクベツカル等ト共ニ罪ヲ謝シ哀願ス、時ニ往年留置セシ太守ノ子既ニ死ス、太守ハ七年ノ後(寛永十一年)始テ其從者ト共ニ赦サレテ臺灣ニ歸ル。濱田彌兵衛ノ勇敢機略、一擧ニシテ外人ノ膽ヲ寒カラシメ、爲ニ國威ヲ増シ、邦人ヲ域外ニ保護シタルノ功、小少ニ非ザルナリ。

按スルニ濱田彌兵衛ノ事ハ各書(校合雜記(濱田ト同航者九郎助ノ所説ヲ錄ス

(大坂ヲ圍ルルマサキノシタノイノ入船)



(頁二一三第一節「水口ノシタノイノ入船」)



ト云フ、長崎古今集覽、長崎先民傳、長崎志、萬國新話、昭代記、鳩巢小説等ノ記スル所互ニ異同アリ、今其最モ信ズベキモノニ據ル、諸書太守(マ、バルナドール)ノ子ヲ質トシテ拘致シタリトスレド、今蘭人が長崎奉行ニ呈シタル書ニ據リ、本文ノ如ク記ス。

〔南洋及ヒ印度ニ至リ學術ヲ傳習シタル者、并ニ移住シタル者〕

寛永四年(二千二百八十七年)、武藏ノ人森田長助暹羅ニ至ル、時ニ山田長政一侯國ノ主タリ、長助之ニ事ヘテ厚ク遇セララル、後邦人ノ外國ニ留ルヲ禁ゼラル、ニ及ンデ長崎ニ歸ル、後年暹羅國書ヲ贈リシト、邦人之ヲ解スル者ナシ、長助幕府ノ募ニ應ジテ其書ヲ譯ス、遂ニ暹羅通事ヲ命ゼラル、邦人ノ暹羅字ヲ知リシハ蓋シ是ヲ始トス。當時同國ニ往來セシ者多ク、慶長中商人與左衛門ト云フ者其地ニ移住ス、同時木下六右衛門モ亦移住シ、我商船ノ朱印檢査ヲ司ル、其後長崎ノ商人井上太郎兵衛久シク同國ニ留リ、竟ニ其地ニ死ス、其他諸國ニ移住歸化シタル者一二ニ止ラザルベキナリ。

寛永中、長崎ノ醫士吉田安齋媽港ニ赴キ、親シク葡萄牙人ニ就キテ醫術ヲ講究シ、

〔南洋及ヒ印度ニ至リ學術ヲ傳習シタル者并ニ移住シタル者〕



其業大ニ進ミテ歸朝シ、一家ヲ成ス。同時、肥後ノ人粟崎道喜、警ヲ長崎ニ避ク、十四歳ノ時、竊ニ外船ニ乗リテ呂宋ニ走リ、外科醫術ヲ學ブ。十八年、業成リテ長崎ニ歸ル。其家世々南蠻醫流ヲ以テ稱セラレ、後徵サレテ幕臣タリ。

外航禁止ノ令一タヒ出テ、ヨリ、邦人復々南洋ニ至ル者ナシ、然ルニ後二百餘年、天保六年(二十四百九十五年)六月、奥州石ノ卷ノ漁夫某ガ漂流シテ安南ニ至リ、歸リテ説ク所ニ據レバ、同國ニ於テ當時戰亂中ニテ、日本仙臺ノ士某一方ノ將トナリ居タリト、一説ニ、其士ハ十餘年前松前ニ居リ、其後去リテ安南ニ赴キタル仙臺人某ニ名ヲ記セズ。ナルベシト、又一説ニ、其士ハ即チ金忠輔(歐米ノ部ニ載ス)ナラント、其云フ所皆ナ茫漠トシテ據ル所ナシ、姑ク茲ニ附記シテ後考ヲ待ツノミ。







○第三部 日本ト亞細亞大陸東部トノ交渉。

○古昔邦人黑龍江邊ニ至リシ者アリト云フノ説。

〔阿倍比羅夫、諸鞍男、安倍賴時ノ遠征〕

往古駿河以東ノ未ダ王化ニ服セザルヤ、アイノ人種後世ノ常陸、兩總、兩野、武藏、越後ノ諸州并ニ其東北奥羽ノ地ニ居住ス、此等ノ地方ヲ東夷ト稱シ、又蝦夷ト呼ビタルナリ。史ニ記ス、齊明天皇六年（皇紀千三百二十年）阿倍比羅夫兵船二百艘ヲ率井テ肅慎國ヲ伐チ、大河ノ側ニ到リ大ニ之ヲ敗ルト。

日本書紀齊明天皇六年ノ條ニ「六年三月遣阿倍臣率船師二百艘伐肅慎國、阿倍臣以陸奥、蝦夷令乘已船到大河側、於是度島蝦夷一千餘屯聚海畔、向河而營、營中二人進而急叫曰、肅慎船師多來、將殺我等之故、願欲濟河而仕官矣、命魯肅慎據柵拒戰、能登馬身龍戰死、官軍奮戰敗之、大獲俘虜而還。」

或ハ此肅慎國ヲ以テ滿州ノ肅慎トシ、大河ヲ以テ黑龍江トシ、當時我遠征軍ハ黑龍江マテ至レリトセリ、肅慎ハ即チ女真ニシテ今ノ滿州ナリト云フ。又一説ニハ大河ハ即チ蝦夷ノ石狩川ナラント云フ。然ルニ北海道在任ノ永田某ノ阿

○第三部 日本ト亞細亞大陸東部トノ交渉 ○古昔邦人黑龍江邊ニ至リシ者アリト云フノ説  
〔阿倍比羅夫、諸鞍男、安倍賴時ノ遠征〕



倍臣蝦夷經路考(東京地學協會報告)ニハ阿倍臣經路ハ兩野及陸奥越後ノ一部ニ止リテ北海道ニ及ハザル事ヲ考證シ『此肅慎國トアルハ支那東北ノ肅慎ニアラズシテ越後ノ足羽ナルベシ然ラズハ肅慎人往古ヨリ度島即チ今ノ越後ノ佐度島及ヒ越前越後ニ來住シタルナラン而シテ越後ニ足羽ノ地名アルハ其遺跡ナランカ』ト云ヘリ要スルニ事實ノ確據スベキモノヲ得ザレバ今之ヲ詳ニスルニ由ナシ。

又元正天皇養老四年(皇紀千三百八十年)渡島津輕ノ津司諸鞍男等六人命ヲ奉テ、**靺鞨國**ニ赴キ其風土ヲ觀察ス。

靺鞨ハ即チ肅慎ニシテ朝鮮ノ東北今ノ滿州ニアリ或ハ此遣使ヲ以テ渤海國トノ關係トナス然レモ此國ノ始テ我ニ通セシハ聖武天皇神龜四年(千三百八十七年)ニアリ未ダ同國トノ交渉タルヲ斷定スベカラズ一説ニ靺鞨トハ後ノ樺太(サカサニ)地方マデモ汎稱シタルナリト古代地理ノ明瞭ヲ欠ク今之ヲ確知スベカラズ。

後冷泉天皇ノ永承天喜中(皇紀千七百十年代)安倍賴時叛キテ陸奥ニ據ル既ニ王師ニ抗スベカラザルヲ料リ家ヲ擧ゲ糧ヲ載シ海ヲ越エテ北方ノ一國ニ至リ大

河ニ溯ル<sup>ト</sup>三十餘日岸上ヲ望ムニ昔ナ蘆葦ニノ絶エテ人跡ナシ一日忽チ大地ノ響ヲ聞ク乃チ急ニ船ヲ蘆葦中ニ徙シテ之ヲ視フ其人馬ニ騎シ畫ケル胡人ノ如シ凡千餘騎江ニ臨ミテ相語リ歩兵其左右ニ伴行ス一隊河流ヲ濟リテ去リ其往ク所ヲ知ラズ賴時謂ヘラク必ズ淺處ノ涉ルベキアラント就テ之ヲ測ルニ深クシテ其底ヲ得ズ賴時懼レ望ヲ絶テテ還リ意ヲ決シ衣川ニ據リテ戰死ス(兵ヲ起シヨリ五年ニシテ亡ブ)世以テ賴時女眞ニ至ルトナス。

大日本史註ニ武備志ヲ引キテ曰ク『馬ヲ浮ベテ江河ヲ渡リ舟楫ヲ用弗ズ蓋シ女眞ノ俗此ノ如シ而シテ賴時ノ反スルヤ方ニ効里鉢ト同時ニシテ其士馬精強ナレバ川ヲ濟ルニ舟筏ヲ假ラズ其說信ズベシト又曰ク混同江ハ黑龍江ニ合シ海ニ入ル蝦夷ト纔ニ一水ヲ隔ツ陸奥ノ界ヲ距ル<sup>ト</sup>甚タ相懸テズ且ツ其流ニ溯ル<sup>ト</sup>數十日ナルモ猶ホ津ナキ者ハ海北諸水唯黑龍混同ヲ然トナス其女眞ノ地タルヤ明ナリ』ト茲ニ効里鉢トアルハ女眞ノ驍將ニシテ善ク兵ヲ用井國勢爲ニ振ヒシ者ナリ北島志モ亦賴時ノ溯リタル大江ヲ以テ黑龍江(今ノ露領四比利亞ノアマール河)トナセリ。



〔源義經蝦夷ヨリ滿州ニ至リシト云フノ説〕

世ニ傳フル源義經最終ノ事實ニ關シテハ、史書ノ記スル所甚々詳ナラズ、第一ニ考究スベキハ

『義經蝦夷ニ逃走』

シタリト云フノ説ナリ、大日本史ニ義經ノ奥州衣川ニ死セズシテ蝦夷ニ走ルノ傳説アルヲ略記シ、義經ノ戰死ヨリ首實驗ニ至ルマデ、四十三日ヲ經タレバ、盛暑ノ頃ト云ヒ、腐爛シテ其ノ眞僞ヲ辨シ難キニ至リシナラシ、且ツ蝦夷ニ遺蹟アルヲ以テ之ヲ見レバ、北走ノ事全ク無シトスベカラズト云フニ過ギズ。日本外史ハ『義經妻子ヲ手刃シテ自殺ス』ト記シ、亦疑ヲ存シテ曰ク『六月首至ル和田、梶原命ヲ受ク之ヲ檢ス、或ハ云フ、義經未ダ死セズ、逃走シタルナリト、然レモ賴朝復タ之ヲ追究セズ云々』トアルノミ。單ニ正史ヲ崇テ者ハ、義經衣川ニ死シタルヤ疑ナシ、蝦夷ニ逃レテ土人ヲ服從セシメタルナドハ、附會ノ説ニシテ信ヲ難シ、是レ唯義經ノ武勇ヲ慕フノ餘ニ出デタルモノナリト云ヘリ。正史ニ疑フベキモノアリ、雜記必ズシモ虛ナリト云フヲ得ス、况ンヤ正史モ亦雜記ニ據リタルモノ少カラザルニ於テヤ。故ニ

歷史上ノ事實ヲ明ニセント欲セバ必ズヤ正史ノ外、雜記其他口碑傳説マデモ考究セザルベカラズ、正史ノ往々忌諱ヲ憚リ避ケル場合ニ於テハ殊ニ然リトス。

因テ今諸書ヲ按ズルニ、和漢三才圖會ニ『相傳ヘテ云フ、源義經衣川ニ假死シテ蝦夷ニ奔リ、島民皆敬服、天年ヲ終ヘテ死ス、其地ヲ沙古丹ト云フ、神祠ヲ建テ甚々崇信シ、毎ニ南無義經ト稱ス』ト。又鎌倉實記(此書ノ事下ニ論ズ)ニ『文治五年、閏四月卅日、辰刻、兵高館ヲ襲フ、義經ノ從士等、鐵ヲ揃テ誓、拒戰シ、門ヲ關シテ出ズ、泰衡ガ臣伴藤八等衆ニ先ダチ、龜井、片岡、辨慶等ヲ呼ビ、決戰ヲ求ムレモ、肯テ出ズ、須臾ニシテ城中火起リ、義經及ビ臣僕等ノ死生ヲ知ズ』トアリ。又北島史及ビ福山舊記等ニハ、藤原泰衡賴朝ト戰ヒテ利アラズ、敗績ス、諸將士蝦夷ニ逃竄ス、呼テ之ヲ渡黨(ワタリ)ト謂フト見ユ。義經等ガ奥州ニ走ルノ時既ニ蝦夷ニ赴カントシタルヲニ就キテハ、『雞肋集』ト題スル古記ニ載スル所アリ、其文左ノ如シ、

奥州會津郡油田村

百姓 物平

右者去る戌年御年貢未進有之に付、於御公儀關所に被爲仰付、右物平家内御改候處家の棟木に先祖より代々箱に入、其上幾重にも紙に包、終に爲披見候事無之、棟



木ニ結付置候然る處此度切落披見候得ば、左之通の書付有之候付、其儘御公儀へ差上候の處、御吟味の上右惣平へ御知行三百石被下置、其文に

一此度北秋へ渡る爲養米粟七斗致借用候若し歸國於無之、時之將軍を預裁斷者也

文治四年四月十八日

源義經(判)

龜井六郎筆

惣平殿

此古文書ニツキ、末松某ハ説ヲ爲シテ曰ク、「此書ハ偽ナリ、何ヲ以テ之ヲ言フ、書中時之將軍ノ語アルヲ以テナリ、蓋シ義經流離ノ日ニ方リテハ、將軍ハ武官ノ號ノミ、後世ノ所謂將軍ト同シカラズ、後世ノ將軍ト云フハ、則チ人以テ行政府ノ名ト爲ス、而シテ其ノ此ノ如クナルハ義經逃走ノ後ニ創マル、義經ニシテ實ニ此書アラバ、則チ必ズ守護地頭等ノ語ヲ用井、何ゾ將軍ト云ハ、幕府察セズシテ三百石ヲ給ス、迂ナルカナ、然レモ義經北渡ノ事ニ至リテハ、此書ヲ待タズシテ、世自ラ證據アリト、然ルニ氏ガ此鑑定ヲ下シタルヨリ數年前ニ著セル『マシヤス・カン』中ニハ、越後人ノ説トシテ、該地ニモ同意義ノ古文書ヲ藏スル者アリテ、幕府ヨリ給米ヲ受ケタル事

ヲ載シ、但シ證書ノ文面如何ニハ説キ及バズ、且ツ越後ニ義經ノ乗船シタル處アリトノ説ヲモ載ス、乃チ此文書ノ信偽如何ニ拘ハラズ、一概ニ抹殺シ難キモノアルヲ知ルベシ。

一説ニ曰ク「源廷尉ノ事ヤ、當時鎌倉ノ威權ヲ避ケ、史書モ頼朝ノ意ニ逆ハラズ、事ヲ省キシモ亦知ルベカラス、源廷尉ノ墓ト稱スルモノ、衣川ノ近傍ニ跡ヲ留ムル者ナシ、却テ青森縣下三庭及ヒ岩手縣下宮古、釜石地方ト北海道ニ遺跡ヲ存ス、假令高館ニ自殺ジ、首級ハ鎌倉ニ入り、遺骸ハ燒キ棄ルトモ、斯程ノ大將埋葬ノ跡、後人必ズ不問ニ附スベカラズ、古書ニ、秀衡死後、鎌倉ヨリ義經ヲ征討スベキノ命頼ナレバ、泰衡恐怖シテ拒ム、能ハズ、忠衡、高衡、佐藤元治等ヲ高館ニ遣シ、商議シテ、合戦ニ先ダチ、義經ヲ蝦夷ニ遁レシムト、又泰衡鎌倉ノ命ヲ聞キ、恐怖ノ色見エシカバ、是ヨリ先秀衡臨終ニ及テ、事急迫ニ臨テ之ヲ開クヘシトテ、與ヘタル所ノ遺書ヲ、義經竊ニ之ヲ披見スレバ、蝦夷渡海ノ路、彼島ノ地圖アルニヨリ、常陸坊海存ヲ彼島ニ遣シ、時々夷人ヲ懷ク置キシト云ヒ、又後志國ノ二村ニ義經ノ脊負櫃アリト云フ、公ノ事ニ就テハ考察ニ供スベキ傳説種々アリ、北海道ノ俗間ノ淨瑠璃ノ如キモノ、シヤルハウ



シ』ト唱フル曲中ニ、公ヲ「バシシヤム・ホウクワシ」又、「アイノラツコ」又、「オキルクルメ」又、或ハ「判官神」トモ云ヒ、辨慶ヲ「シヤマヘグル」ト唱フ、之ヲ信スルコト甚ダ嚴ニシテ、我天照皇太神ヲ祭ルガ如シ、酒食ノ際必ズ祭奉ス、祭奉セザレバ酒食セズ、今モ擇捉ノ奥「ナトイマウシ」ニハ、公ノ馬蹄石ト稱スル舊蹟存ス、其外擇捉島中ノ高山ノ處々ニ古跡アリ、公ノ祠ヲ沙流ノ山上ニ移セシハ文化元年ニテ、當時近藤重藏主トシテ事ヲ計ル、此時始テ公ノ弓箭ヲ執リ馬ニ騎スルノ神像ヲ安置ス、其前ハ沙流ヨリ七八丁ノ海岸ニテ岸幅ナル岩屋ト云フニ祠アリ、其戸ハ繼續ノ鑿三枚ナリ、其由來ヲ聞クニ、古コ、ニ居リシキ、夷人共ヲ惠ミ憐ミシカバ、其ノ恩ニ感ズルコト深ク、永ク此處ニ止マラシメテ乞ヒシニ、長居セバ身ノ妨且ハ鎌倉神ヨリ大軍ヲ向クラレンモ計ラズ、夷人共ノ難儀ニ及バンコト深ク案ヲ遂ニ遺物トシテ鎧一領ヲ殘シ、別ヲ惜ミテ去レリ、初ノ程ハ之ヲ神家ニ置キシモ、火災等ノ虞アリトテ祠ヲ設ク、シヤマイクル神(辨慶)モ同シク尊敬スルナリト土人ハ涙ヲ流シテ語レリ、又西地ニ到ル山中、イヤリヤリトノ近邊ニ判官泊アリ、石狩川ニ沿ヒ、絶景ノ地ナリ、此邊ノ土人ノ説ニハ判官神コ、ニ宿リ、景色ヲ愛シ、數日逗留シタル處ナリト云フ、今有名ナル雷電山ハ

後世ノ字ニテ、其實ハ判官神ガ雪中コノ山ヲ越シタル臣下ノ難義ヲ見テ、來年雪消ノ後來レト告グシテ、其マ、來年山ト呼ビシナリトゾ、文化度、西地宗谷ノ長、シヨリクントト云フ老人ノ言ニ、判官神ノ此處ヨリ唐太ニ渡リ、山丹ニ越エタマヒシハ相違ナシ、其故ハ此邊ノ云傳ニ、古、蝦夷ノ總大將ト仰カレ、沙流ニ居ラレシ御方ハ、都人ニテ、天下様ノ御一類ナリシガ、天下様ト御中違トナリ、夫ヨリ蝦夷ノ大王トナラント渡海シタマヒ、土地ヲ見立テ、沙流ヘ落着キテ城ヲ築キ、遠近ヲ打靡クタマヒシモ、沙流ノ御住居ハ心ニ叶ハセラレヌ事アリテ、山丹ニ越エテ大王トナリ、廣ク地ヲ領スル思召ニテ、當所ニ來リタマヒ、渡海ノ便宜ヲ求ムルタメ、暫ク假居ヲ設クタマヒシガ、神供ノ輩威光ヲ振ヒ、氣隨ノ舉動多ク、土人ノ不行届ヲ咎メ、又沙流ヨリ附添ヒシ土人モ、神威ヲ假リ、檀那ノ如ク傲リ、言語ニ絶セシ惡行多クシテ、近郷ノ難儀ニ及ビ、窃ニ判官神ヲモ怨ムヤウ成行キシニゾ、深ク惡人ドモテ憎マセラレ、一人モ沙流ヘ歸ヘサズ、皆、宗谷ニテ殺シタマヘリト、是ハ判官神ノ淨瑠璃ニモ悉シク、其地ノ人ノ今ニ普ク知ル所ナリ、宗谷ノ村外レニ神川ト云フアリ、判官神ノ飲用セシ水ナリト津輕藩士某ガ著述ノ蝦夷志ニ見ユ。以上記スル所ノ舊蹟口碑ニ依レバ、後人ノ附



會カハ計リ難クレモ、公ノ願朝ニ忌マレ、志ヲ本朝ニ得ズ、蝦夷ヲ經テ鞅鞅ヲ過ギ、南  
宋ノ頃ノ金國ニ入りシハ明ナリ『明治十六年函館人某記』。

又太宰春臺ノ文集ニ『範歸死子都門、經走竄于蝦夷』トアリ、開拓使ノ刊書『北海道  
志、蝦夷風俗彙纂』其他北海道ノ事ヲ記スルノ書ニモ、義經ノ事蹟散見スレバ、義經ノ  
蝦夷ニ至リタリト云フハ古來ヨリノ傳説ナルヲ知ルベシ。次ニ考究スベキハ

『義經滿州ニ渡航』

シタリト云フノ説ナリ。本朝通鑑ニ義經衣川ニ自殺ス、或ハ云フ、潛ニ蝦夷ニ逃レ、遠  
ク鞅鞅ニ投ズトアリ。源平盛衰記ニハ、義經以下蝦夷千島ニ至リ、與蝦夷ト名ツク  
ル滿州唐太、并ニ東アシヤ、東亞細亞、オランダカイ、兀耳哈、オロシヤ、露西亞ノ地方マ  
デ從ヘタル事ヲ記シ、又東蝦夷夜話ノ著者越智某ハ、安政三年ヨリ三年間、其ノ地ニ  
在リテ、親ク見聞スル所ヲ記シ、マタ義經ノ遺跡ヲ擧ゲ、『邊海分界』此書ニハ、アイノ  
人種ノ前ニ、クルミシエ人種アリタレモ、アイノノ爲ニ逐ハレ、遂ニ千島、堪察加、邊ニ  
退キタル事ヲ記ス、ヲ引キテ、義經ノ蝦夷ヨリ先ニ渡リタル證據ヲ、此地ニ存セザル  
モノハ、土人ニ文字ヲキガ故ナリ、然レモ義經ノ北大陸ニ渡リタルノ證ハ、確然タリ、

『義經滿州ニ渡航ノ説』

寛永年間滿州ニ漂流シタル越前ノ國新保ト云ヘル小港ノ舟子ガ歸リテ報ズル所  
ニ依レバ、當時清朝ノ都ハ北京ニ移サレタルニヨリ、漂流人等ハ同地ニ送ラレシガ、  
鞅鞅地方ヲ過ギシモ、毎戸ニ義經ト辨慶ノ畫像ヲ貼リ付ケタルヲ見タリト云ヘリ、  
是レ義經ノ一行ガ彼地ニ渡リタルノ確證ナリト見ユ。『日本咏史新樂府』ニモ、義  
經入滿州、其子孫尙盛、寛永癸未年、越前新保人、漂流至鞅鞅地、觀奴兒干門、戶神畫義經  
像、トアルニ符合ス。而シテ新井白石ノ蝦夷志ニハ、舟子ガ義經辨慶ト思ヘル日本ノ  
甲冑着用ノ畫像ヲ見タルノ地ハ、兒奴干ナルベシトアリ。朝鮮圖ニ奴兒干ハ黑龍江  
(アムール)ト吹風、兩河ノ間ニアリト、傳説ニ據レハ、義經ノ此大陸ニ渡リタルハ、滿州  
對岸ノカムイ崎ナリト云フ、其近傍ニ義經ヲ祭レル祠アリ(前ニ引ケル一説ヲ參看  
セヨ)、又、ベンクイ崎ト稱スル小岬アリ。新井白石、蝦夷志ニハ、義經ノ異國ニ渡リタル  
トハ、口碑ト事實ト往々符合セルコトアルバ、壽都地方ノ辨慶崎ヲ後人附會セシカ、夫  
ニモ泥マズ、其ノ證トスベキ事ハ若干アリト論定セリ。又蝦夷勳功記、嘉永六年ノ  
版ニハ、義經北渡ノ事ヲ記スルコト甚ダ詳ナリ、其大略ヲ摘記セバ、左ノ如シ。義經ハ  
秋田人國氏ナル者ノ説ヲ用井、武藏坊辨慶、常陸坊海存、泉三郎、龜井六郎等重立タル



者廿三人ヲ率井テ蝦夷ニ到リ、蝦夷ノ西ニ滿州山丹ト稱スル廣大ノ國土アルヲ聞  
 キテ、之ヲ征略セント欲シ、國民ヲ蝦夷ニ留メ、辨慶ヲシテ先ヅ發セシム、其發船シタ  
 ル地ハ即チ今ノ辨慶崎ト稱スル處ナリ。次ニ義經等乗船ス、其地ヲ稱シテ「カムイ崎」  
 ト云フ、カムイハ即チ神ナリ、土人從フ者數百人、唐太ヨリ山丹ニ渡リテ、其地ヲ征服  
 シ、義經遂ニ滿州ニ王タリ。又カムイ崎ニ於テハ、義經并ニ從士廿三人ノ爲ニ一大社  
 ヲ建立シテ其肖像ヲ安置ス、滿州人之ヲ聞キテ時々ノ修復ヲ怠ラズ、又韃靼人剃髮  
 ノ風俗ハ、即チ辨慶等僧兵ノ頭ニ倣フモノナルベシ云々。盛衰記ノ説ハ内外ノ地  
 理ニ暗キヨリ、記事茫漠ニ失シテ其實ヲ得難キモノアリ、夜話ノ説ハ夸大ニ過ギテ  
 稍稗史ニ近キモノアリ、其ニ未ダ十分ノ證説トナスニ足ラザルガ如シ。

明治十年代ニ露領浦潮港ニ在留シタル貿易事務官瀨脇壽人(舊名手塚律藏、蘭學  
 者)ノ筆記中ニ左ノ數條アリ。余ハ土人支那人及ビ在留日本人ノ説ヲ聞キ、并ニ自  
 ラ探究シタルニ、曾テ日本人ハ浦潮港地方ニ頗ル關係ヲ有シ、口碑ト遺物ノ存スル  
 一甚ダ多ク、日本人ノ堡皆墳墓ト認ムベキモノ各處ニアリ、然ルニ滿州ノ此地方ガ  
 露國ノ所領ニ歸セシキ、若干ノ古碑及ビ數ヶ所ノ祠堂ヨリ得タル古文書ヲ露京ニ

移送シタリト云フ、荷蘭(蘭)逸人ノ説ノ植物學者、シールホルト(其ノ半生ヲ日本ニ送リ  
 マル)曾テ人ニ語リテ曰ク、「余ガ魯國ニ至ルヤ、蒙古ヨリ取寄セタル古物中ニ日本  
 製ノ太刀ト重藤ノ弓アリ、又、オルガ河畔ノ祠堂(元朝先代ノ廟ナラント云フ)ノ前ニ  
 アリシ日本風ノ鳥居ヲ見タリ、是レ或ハ日本ノ勇將義經ガ滿州ニ渡リテ死シタル  
 遺跡ナラント。現ニ、ハンクワント呼ブ岬アリ、是レ義經ノ上陸シタル處ナラント、ホッ  
 ースノ蒙古史ニ附セル地圖ニハ浦潮ニ近キ處ニ「ハンチヤント」云ヘル地名アリト云。  
 浦潮港ヨリ凡ソ百里ノ處ニ蘇城ト稱スル古城アリ、其地ニ居留セル支那人劉鵬程  
 ノ話ニ、昔日本ノ一名將、其ノ國ヨリ難ヲ逃レテ此ノ地ニ來リシト築キタル城ナリ、  
 蘇城ハ即チ難ヲ逃レテ蘇生シタルノ義ニ取ル。城趾ノ近傍ニ穴窟、石碑、堡皆アリ、穴  
 窟ハ將軍來着ノ初ニ住居シタルモノナリト云ヒ傳ヘ、神靈アリトシテ、土人之ヲ畏  
 敬シ、敢テ近カス、將軍ノ子孫ト稱スル者今尙ホ此地ニ存ス、凡ソ三百年前、此等ノ民  
 族銅錢ヲ造リ「寛永通寶」ノ文字ヲ銘ス、此錢ハ現今ニテモ此地方ニ通用スト云ヒタ  
 リ、余等モ現ニ此錢ヲ見タルガ、日本ノ鑄錢ニ異ナル所ナク、唯其ノ形ノ小ナルノミ、  
 蓋シ將軍トハ義經ニシテ、錢ハ後年來着ノ日本人ヨリ之ヲ得テ摸造シタル者ナラ



浦潮港邊ニテハ日本國ノ嶺甚タ高ク昔滿州ハ日本ノ領地タリシモノナリトマ  
デ云ヒ合ヘリ云々。

源義經ノ滿州ニ渡航シタルハ證據ト云フモノハ右ノ如シ而シテ蝦夷ト滿州  
トノ間ニ時々交通アリシコトモ亦疑ナシ彼ノ蝦夷錦ト稱スルモノハ其實滿  
州ヲ經テ支那地方ヨリ貿易品トシテ輸入シタルヤ知ルベキナリ猶ホ南洋島  
ヨリ傳來セル甘藷ヲ經陸地ノ名ニヨリテ薩摩芋或ハ琉球芋ト稱スルカ如シ。  
今傳説ニ據リテ假ニ義經滿州ニ渡航シタリトセバ次ニ起ル問題ハ其ノ滿州ニ  
入リテ如何ナル事ヲ爲セシヤノ一事トス是ニ至リテ考究スベキハ

『義經ハ清朝ノ祖先』

ナリト云フ説ノ眞偽ナリ。按スルニ義經奥州衣川ノ事アリシ我文治五年ハ金國ノ  
中世ニ當リ同年ヨリ元和四年即チ韃靼ノ太祖天命元年(後十八年國號ヲ清ト改ム)  
ニ至ルマテ四百三十九年トス明ノ全ク亡ビタルハ其ノ後四十二年ニシテ金尙ホ  
盛ナルノ時ニアリ抑モ義經ガ清朝ノ祖先ナリト云フ説ノ起原ハ鎌倉實記ナリト  
ス其第十七卷ニ義經陸奥ニ在ルノ日北上川左衛門尉義行ト稱セシヲ記シ且ツ

金史別本列將傳中範車國大將軍義鎮ノ傳ト云フモノヲ引キテ曰ク

範車國大將軍源光錄義鎮者日本陸華仙權冠者義行子也初入新鞋鞞爲千戶邦之  
判事身長六尺有七寸性温和而勇猛才思甲諸部外夷多隨云々

同書ハ文中ノ義行ヲ以テ義經トナセリ是レ義經カ平家追討ノ功ニヨリ任官セラ  
レタル也廷臣ニ良經ト云フ人アリ其名ト同訓ナルヲ以テ義行ト改名シタルヲア  
リ(日本外史毛夷東環記等ニ見ユ。又罪ヲ得タル後名籍ヲ削ラレ義經ト更メタリ)ト  
云フニ據ルナリ鎌倉實記ノ説ニ同スル者ハ之ヲ敷衍シテ曰ク『義鎮ノ先義經蝦夷  
ニ奔リ土人ヲ領ス金ニ至リテ章宗ニ事フ章宗詔シテ光祿大夫ヲ命ス大將軍ニ累  
任シ久シク範車城ヲ守リ北方ヲ鎮ス』ト。又一説ニ曰ク『義經ノ蝦夷ニ入リシ時  
ハ年三十一或ハ廿九ニテ此地ヲ略定シ蕃酋ノ女ヲ娶リ男ヲ生ム義行ト云フ義經  
ノ子ニ義行アルハ金史別本列將傳ニモ見ユ。既ニシテ義經望蜀ノ念ヤマズ轉テ韃靼  
ニ入ル時ニ小亂アリコレヲ鎮平シテ土人ヲ撫字ス土人大ニ服ス推シテ酋長トス  
此時義行稍長シ勇武父ニ肖タリ土人益服ス後義經死ス土人ノコレヲ悼ムコト考  
妣ヲ喪スルガ如シ義行子若干人アリ智勇又父祖ニ類ス各家ヲ起シ支族繁滋ス』



又義經が清朝ノ祖先タルノ證據トシテ清ノ乾隆帝ノ自述ナリト云フモノヲ引用スル者アリ。儒士小松弘毅ノ記ニ曰ク『嘗テ古書ヲ閱シテ森助右衛門所著ノ國學忘具ナルアリ。清朝所編ノ圖書集成全部一萬卷アリ。寶曆十庚辰、清人汪繩武齋來リシテ、明和元甲申、官庫ニ納ム、其書中、圖書輯勘ナル書百三十卷アリ。清帝ノ自序、其文ニ、朕姓源、義經之裔、其先出清和、故號國清、

ト記セルヲ、東都ノ中良虞臣父ナル人見テ、圖書集成ヲ檢シ、初卷ニ雍成帝御序アリ、次ニ蔣廷錫ガ表文アリ、總目ヲ閱スレド、輯勘ナル書名モ無シ、大ニ望ヲ失フト桂林漫錄ニ記セリ、是ヨリ先ニ、伊藤蘭嶼、僧智景耀ノ記ニ、明和三丙戌五月、新渡圖書集成六百套、九千九百九十六卷、清蔣天錫奉勅校定中、有輯勘錄三十卷、第三十序云、

乾隆皇帝述、我姓源、義經裔、其先清和、姓源、故國號清云々、トアルヲ寫シテ、斯文學會諸先生ニ質シ、確乎タル明證ヲ請フ、浦生重章先生ノ報ニ云ク、余之ヲ清國公使黎庶昌ニ質セシニ、云ク、我皇上之先出金源之後、與貴邦源氏無涉ト、毅疑團猶ホ解クズ、森氏、伊藤氏、智景耀、三人見ルコト相同シキニト遺憾ナル處、近頃金史列將傳ノ文ナルモノヲ見テ、義經ノ裔ナルヲ發見シ、黎庶昌ノ所謂金源ト云

フモ符合シ、初テ蒙霧ヲ散セリ。』又僧台舜著『眞宗名目圖』(天明八年版)ニモ、明和三年五月、圖書集成九千九百九十六卷舶來ス、蔣天錫ノ奉勅撰定ニ係ル、中ニ輯勘錄三十卷アリ、第三十序ニ曰ク、乾隆帝述フ、朕姓ハ源、義經ノ裔、其先ハ清和、故ニ國ヲ清ト號スト、右ハ伊藤才藏ノ記スル所ニ依ルトアリ、即チ前記ノ文ト全ク同シ(伊藤ハ有名ナル儒家伊藤仁齋ノ子ニシテ亦名アリ)。又本多利明ノ西域物語(寛政十年記)ニモ『支那ノ國號ヲ大清ト云フハ清和源氏ノ末孫ナルガ故ナリ』ト記スレバ(前後ニ此ニ關係ノ事ヲ載ヘズ)、往時ヨリ文士ノ間ニ此説行ハレタルヲ知ルベシ。

寶曆、明和ハ徳川幕府ノ中葉ニアリ、清國乾隆帝在位ノ中頃ニ當ル。乾隆帝(高宗)ノ先帝ヲ雍正帝(世宗、小松ノ記ニ雍正帝トアルハ誤ナラン)トシ、雍正帝ノ先帝ヲ康熙帝(聖祖)トス。康熙帝即位ノ前、明全ク亡ビ、支那ヲ一統ス。

或ハ云ク、明ノ末鄭成功ガ支那ノ南方ニ據リタル時、清國ニテハ鄭ノ母ハ日本人ナレバ、其ノ縁ニヨリ、日本ノ鄭ヲ援ケンコトヲ虞レ、使節ヲ日本ニ派シテ、書ヲ徳川幕府ニ贈リ、我皇ノ祖先ハ貴國ノ人ニテ、我皇ハ實ニ其後裔ナレバ、爾後互ニ交誼ヲ厚ウセンコトヲ望ム、前言ヲ證スル爲ニ、我皇ノ祖先ノ着セル傳家ノ寶ヲ呈ストアリテ、



古キ日本製ノ鏡ノ草摺一枚ヲ贈リ越シタリ、其草摺并ニ文書ハ久シク幕府ノ庫中ニ秘メ置キシガ、維新ノ後數年ヲ經テ、徳川家ヨリ宮内省ニ獻納シタリトカ聞クト。一説ニハ前ニ記セル寛永廿年(即チ明朝亡アレノ十七年前ニアリ)漂流人ノ還リシト、清廷ノ之ニ書ヲ托シタルナリト。

清帝ノ姓愛親覺羅ハ滿語「金族」ノ義ナリ。清國公使ノ答書中金源トアルハ支那ノ史書ヲ見ルニ、金朝ヲ指シタルモノニシテ、猶ホ「滿清」ノ清朝ニ於ケルガ如シ。支那ノ史書中清帝愛親覺羅氏ノ祖先ヲ明記セルモノナシ、前在清英國公使「サー・ジェー・デービス」ノ支那帝國總記(英文)ニハ元ノ世祖忽必烈(成吉思ノ孫)ノ末裔ハ明帝ニ逐ハレテ東韃靼ニ逃ル、後ニ明ヲ亡シタル滿州ノ諸酋長ハ實ニ此末裔ヨリ出ヅ、故ニ清朝ノ歷帝ハ忽必烈ヨリ出テタルモノナリトアレ、其據ル所ヲ知ラズ。

『元ノ太祖成吉思汗ト義經ト同人物ナリトノ説』

亞歐二大洲ノ間ヲ征略シタル成吉思汗(此漢字ハ音譯字ニシテ固有ノ名字ニアラズ)ハ源義經ト同人物ナラントノ説ハ、曾テ久シク我國ニ在留シタル獨逸人(或ハ誤テ關人トナス)「シーボルト」之ヲ唱ヘタリ、松浦武四郎ノ西蝦夷日誌第二編中ニ栗原柳

莽ノ雜記ヲ引テ、關人「シーボルト」ガ清人ヨリ建靖寧寺碑トテ滿州文ノ碑文ヲ獲タルヲ記ス、其文ニ據レバ成吉思汗ハ日本國源義經ノ事ナリトアリト云ヒ、又西洋ノ「フート」ハ日本國ヨリ出テタル者ニシテ、即チ成吉思汗ヨリ傳フル者トナス。米國人「グリフ井ス」モ亦成吉思汗義經同人物ナルノ説ヲ其著書「ミカドス・エムパイア」(皇國)ニ載シテ疑ヲ存シ、東京大學中ノ人及ヒ米國ノ學士「ハウス」等モ其ノ説ヲ主張シ、殊ニ末松謙澄ハ支那、蒙古、波斯ノ語文ニ基ケル諸書(元史、超異ノ廿二史劄記、イソラスノ蒙古史、アブルガキ汗ノ韃靼人系史、ベチス・ド・ラ・クロイスノ蒙古史等)ヲ涉獵シ、遂ニ「大捷者成吉思汗ト日本英雄義經ト同人物ナルノ論」ト題スル書(英文)ヲ著シ、之ヲ證スルニ、第一、何レノ書ニ據ルモ、成吉思汗ト義經ト時代及ヒ年齡粗ボ同キ事(義經ノ國外ニ奔リタルハ凡ソ三十歳ノ時(西曆一八九年)、成吉思汗ノ蒙古ニ興リタルハ凡ソ四十歳(一二〇二年或ハ一二〇三年)ニシテ、其死セシハ六十七歳、或ハ七十三歳(一二二七年、或ハ一二三六年)ナリトス)。次ニ成吉思汗ノ出處及ヒ早歳ノ事蹟遡トシテ詳明ナラサル事(蒙古語ヨリ譯シタル元朝秘史ヲ讀ミタルニ、首ニ成吉思汗ノ父祖ハ不可思議ナル狼ト犬ノ子ナリトアリ)、シソヤス・カン」ハ源義經或ハ源氏汗(汗ハ蒙古君公

『元ノ太祖成吉思汗ト義經ト同人物ナリトノ説』



ノ稱ノ蒙古訛音ニシテ、支那ノ書「屠譜」ニモ成吉思汗ハ即チ源義經ナリト記セリト聞ク事。成吉思ノ姓奇握温ハ「ギヤン」(蒙古語ニテ「ク」チ混スルノ例多シ)ニシテ、源ノ轉訛ナルベク、其名録木眞ハ天神ナルベク、成吉思ノ父ヲ也速該ト云ヒシハ即チ蝦夷海ヨリ取リタルモノナルベク、其ノ正妻ヲ「フヤン」ト稱シタルハ夫人ノ國音ナルベク、長子ヲ「フジ」ト名ヅクタルハ富士山ヨリ取リタルモノナルベキ事。國ヲ元ト號シタルハ即チ源ニ據リタルモノニシテ、其意義亦相近シ、天保頃ノ學者伴信友ノ中外經緯傳中諸書ノ説ヲ考ヘ、義經ガ「ムーク」(舊名「スーシ」)ニシテ、瀋州ノ北部ヲ據ルニ渡リシキ祖先滿仲ノ名ヲ取リテ瀋州ト改稱シ、義經其ノ才德ニヨリテ、彼地ノ君主トナリ、遂ニ支那ニ攻メ入り、源姓ノ音ヲ取リテ國ヲ元ト號シタリトアル事。成吉思ノ白旗ヲ用井タル事。成吉思ノ部屬ヲ「ニロン」ニシテ、稱シタルハ「太陽ノ子」ノ義ニシテ、即チ「日本人」ノ轉訛ナルベキ事。蒲潮港ニ在留シタル瀨脇貿易事務官ノ筆記中、瀋州土人ノ口碑ニ、昔日本ヨリ金鳥諸寛永ノ兩勇將該地ニ渡リテ首長トナリ、支那地方ヲ侵撃シ、全鳥諸ノ子孫一大帝國ヲ建テタリトアリ(寛永蘇城ノ王位ニ即キシヨリ其後裔二百八十餘年在位スト云フ、寛永ノ頃蘇ハ蘇城ニ在リテ碑文アリ、金鳥

諸ノ女紅羅女(明史ニ紅羅ト云ヘル者アリ考フベシ)東京城ヲ造ルト云フ、寛永八年號ナリ、何人タルヲ知ラザレモ「ギンウチユ」ハ「ソノキス」ノ轉訛ナル「ギンキツ」ヨリ更ニ轉訛シタルモノナルベク、又成吉思ニ從ヒ、波斯及ビ歐洲ノ南部ヲ侵撃シタルニ將速不臺(或ハ「スイダ」)ハ、辨慶ノ姓ナル齋藤ニシテ、哲伯(或ハ「フツベ」)ハ、鷲尾(三郎)ノ音讀ナルベキ事。蒙古語ノふちきトほどげハ日本語ノほどけト同一ナルベキ事。始テ佛敎ノ蒙古ニ入りタルハ其ノ時代以後ニアリト云フ、等ヲ列擧シ、終ニ兩人物ノ性行相似タル事。成吉思ノ少時鍛工タリシトノ説ハ、即チ義經ノ金工吉次ニ依リテ與州ニ赴キタル事ヲ云フナリト。各宗教ニ對シテ自由ヲ與ヘシ事、其ノ政治、兵法ハ蒙古ノ如キ未開國ノモノニアラズ、其制定シタル法律ノ甚ダ我ニ同マキ事ヲ論據トシテ、竟ニ成吉思ト義經トハ全ク同人物ナリト斷定シタリ。

蒙古ハ支那本部ノ西北ニアル一大地域ナリ、初メ蒙古ト號ス、一ニ韃靼ト云フ、支那ノ歷代ニ匈奴、胡、突厥、回紇ト呼ビシ者皆ナ同地ナリト。

趙翼ノ廿二史劄記ニ曰ク「元朔漢ヨリ起リ、本、文字ナシ、開國以後、又能ク先朝ノ事蹟ヲ訪求スル、トナシ、是ヲ以テ記載寥寥、太祖奇勳偉績甚ダ多シ、惜ムラクハ當時史官備ハラズ、記述ヲ失ヘリ、云々」ト以テ元ノ初代ノ史ノ詳明ナラザル

「元ノ太祖成吉思汗ト義經ト同人物ナリトノ説」



ヲ證スベシ。

以上引ク所、第一、鎌倉實記ノ謂フ所ノ金史別本ナルモノ、原書ヲ求ムルニ全ク有ルヲナク、世ノ學者モ亦之ヲ見タリト云フ者一人モナクレバ、好事家ノ構造説タルヤ、明クシ、夫ノ鎌倉實記タル俗書ニシテ、殆ド小説ニ近キ所モアレバ、信ヲ置クニ足ラズ。第二、輯勘録ノ序文中清帝ノ自述ナリト云フモノモ亦甚ダ疑ハシ、此事ヲ記スル書籍ニアリト雖モ、現ニ内務省ノ書庫ニ藏スル圖書集成ノ中ニ輯勘録ナルモノ無シト云フ。清國公使黎庶昌ガ貴邦源氏ト關係ナシト答ヘタルハ、其地位宜ク然アルベキコトニシテ、此考證ニ對シテハ毫モ重キヲ有セザレバ、輯勘録ノ有無ニ言及セザルハ何故ゾヤ。此書ノ事ニ就キテハ、博識ノ史家ニモ討尋シタレバ、未ダ之ヲ實見シタリト云フノ人ヲ得ズ、或ハ是レ全ク構造説ニシテ信スルニ足ラズト斷言スル者サヘ有リ。第三、清廷ヨリ幕府ニ贈リタル書中清帝ノ祖先ハ日本人ナリ云々トアリトノ説モ、同シク明據ヲ得ザレバ確信スベキモノニ非ズ。第四、成吉思汗ト義經ト同人物ナリトノ考説タル、快ハ則チ快ナリト雖モ、頗ル小末ノ穿鑿ニ過ギテ、却

テ牽強附會ニ涉リ、大本ニ於テハ一モ確據スヘキモノナク、或ハ偶然互ニ暗合セル事モアラソレニ要スルニ成吉思ノ出處曖昧ナルニ乗テ、之ヲ大眼目トシテ考證シタルモノナレバ、著者自ラ何レノ書ニモ成吉思ハ日本人ナリト記スルモノナシト明言セルガ如ク、大本ノ證據甚ダ薄弱ナレバ、成吉思ト義經ト同人物ナリト斷定スルヲ得ズ、或ハ義經成吉思ト同人物トスルハ國譽ナルヲ以テ國民ノ宜シク主張スベキ所ナリト云フガ如キハ事實ノ考究ト自ラ別事ナルヲ以テ今之ヲ取ラズ。之ヲ要スルニ源義經ノ蝦夷ニ逃レタリトノ説ハ、稍ヤ證據トスベキモノアレバ、滿州ニ入りタリト云フヨリ以上ノ説ハ未タ明確タルヲ得ザルモノトス、而シテ余ガ茲ニ種々ノ説ヲ引抄セルモノハ他ナシ、唯異聞ヲ廣メラテ以テ後ノ考究ノ料ニ供センガ爲ナルノミ。



### ○北隣露西亞國ニ對スル日本人。

#### 〔露人東侵事要〕

近古貿易ノ漸盛ナルニ當リテヤ、露西亞ハ莫斯科國ト稱シ、尙歐洲ノ小邦タリ、其勢力微々トシテ、葡、蘭、諸國ノ下ニアリ、未ダ我ニ通ズルニ至ラズ、其稍強盛ニ赴キ、領土ヲ亞細亞東部ニ擴メ、境域ヲ我國并ニ支那、朝鮮ト接スルニ至リシハ、實ニ我國ノ鎖國退守ノ政策ヲ執リシ年間ニアリ、而シテ支那ニ於テ俄羅斯國ノ名ヲ聞知シタルハ、我寬永十五年（一六三八年）喀爾喀地方ノ蒙古酋長ガ俄國所製ノ小銃ヲ滿州ノ太宗文帝ニ呈シタル時ニ始マル。是ヨリ先天正年間（一五八〇年代）莫斯科國高索部ノ壯兵八百餘人烏拉山脉ヲ越エテ始テ西比利亞ノ西部ニ出テ、韃靼人ヲ破リ、トボル地方ヲ略取ス。文祿三年（一五九五年）更ニ進ミテ、オビ河ニ至リ、トムスク城ヲ築キテ以テ進取ノ策ヲ定メ、寬永五年（一六二八年）レナ河ヲ下リ、雅庫次克ヲ占領シ、十六年（一六三九年）大ニ進ミテ、遂ニ西比利亞ノ極東、オコツク海岸ニ達ス。十八年（一六四一年）高索遠征軍ノ一部、黑龍江畔ニ進ミ、尼布楚（露稱「チルチンスク」）及ビ貝加爾湖ノ

東邊ヲ侵略ス、爾來屢々難苦ヲ冒シテ、黑龍江遠征ヲ試ミ、慶安四年（一六五一年）アルバツンニ於テ滿州兵ト衝突シ、是ヨリノ後交戦互ニ勝敗アリ、其後兩國ノ委員相會シテ境界條約ヲ定ム。

露國ハ又正徳享保、元文年間（一七〇〇年代ノ初）ヨリ千島（露稱「トリル」）ヲ蠶食シテ島名ヲ露稱ニ改ム、而シテ日本ハ盲ノ如ク、蠶ノ如ク、茫トシテ之ヲ知ラズ、之ヲ知ルモ毫モ顧ル所ナシ。明和八年（一七七一）露國船阿波ノ海濱ニ至ル、藩主蜂須賀氏之ヲ撫郵ス、船中波蘭人、アウスト云フ者アリ、嚮ニ露國ニ囚ハレ、西比利亞ノ東北ニ流サレ、露船ノ其東岸ニ至ルニ及ンテ、船長ニ頼リ、南洋ヨリ歸國セント欲シ、共ニ蝦夷及ビ日本ノ東南海ヲ廻リ、琉球ヲ經テ歸ル、其薩摩ノ大島ニ上陸スルヤ、書ヲ長崎ノ蘭人ニ寄シテ、阿波藩等ノ待遇ヲ謝シ、日本ノ爲ニ北地ノ危急ヲ報ス、是レ一ハ我國ノ厚意ニ感セシニ由ルト雖モ、一ハ露國ハ其怨敵タルガ故ナリ、幕府其書ヲ受クダレト例トシテ、竟ニ之ニ備フルコトナシ、（下ニ引ク本多利明ノ記ヲ參看ス。）露國ハ此間睡國ノ隙ヲ窺ヒ、東方ニ向テ斟酌ナク、其版圖ヲ廣メ、亞細亞ノ東極、東察加半島マデ併吞シ、更ニ亞米利加ノ西北岸ニ渡リ、アラスカニ於テ廣漠ノ地ヲ占

○北隣露西亞國ニ對スル日本人〔露人東侵事要〕











